The axe was sharp, and heavy as lead,
As it touched the neck, off went the head!
Whir — whir — whir — whir!

And the screaming of the grindstone formed an appropriate accompaniment to the melody.

Queen Anne laid her white throat upon the block,
Quietly waiting the fatal shock;
The axe it severed it right in twain,
And so quick — so true — that she felt no pain!
Whir — whir — whir — whir!"

—Ainsworth, *The Tower of London*, chap. xl.

第三節　不對法

強勢の對置はfに添ふるにf′を以てして、fの一時的價値を高度に變ずるを主意とするが故にf本位なり。緩和の對置は同じくfに添ふるにf′を以てして、fの一時的價値を低度に變ずるを主意とするが故に是亦f本位なり。兩素の順序より云へば強勢法に在つては客たるべきf′先づ來

つて、主たるべきf之に從ふを常とし、緩和法に在つては之を逆まにして、主たるべきfあつて客たるべきf′之に次ぐを例とす。假對法にあつてはfとf′と相待つて始めて新しきf″を生ずるを目的とするが故に本位は獨りfに存するにあらず、又獨りf′に存するにあらずして兩素の共有する所なるは疑なきが如し。この節に於て述べんとする不對法はfとf′の間に於て本位を定め難き點に於て假對法に似たり。但し公式を以てすれば假對法はfとf′と合して纏まりたる一種のf″を生ずるが故に f+f′=f″ を以てあらはし得ると雖ども不對法に在つて兩素の本位を定むる能はざるのみならず、兩素の抱合して一團となるの形迹なきが故に、強勢、緩和の二法に通ずる特色を失へる上、又假對法の性質を帶ぶる能はず。換言すれば此際に於るf′の兩素は緣なきに對立して、しかく對立するも毫も感應を生ぜざるものとす。更に換言すれば此等の兩素は相乘ずる能はず又相除する能はず、又加減する能はず。吾人は此兩素を點檢し審議し拈定して遂に之を打して一丸となすの術なきに困ずるものなり。然かも彼等は平然として對立して憚からず。天地開闢以來より對立すべく大法によりて命ぜられたるかの如き態度にて對立し、既に對立せる後も對立せざる以前と異なるなく吾不關焉の態度を固持す。吾人はかく緣故なき兩素の、しかく卒然と結びつけられたるを驚ろきて、不調和の感を生ぜんとする刹那に、此緣故なき兩素が如何にも自若として其不調和に留意せざるものゝ如く突兀として長へに對立するの度胸に打たれて、急に不調和

の着眼點を去つて矛盾滑稽の平面に立つて窮屈なる規律の拘束を免かれたるを喜こぶ。而して其結果は洪笑となり、微笑となる。是を不對法の特性とす。此特性を有するが爲めに不對法は先に說敍せる第四種の聯想法と編を隔てゝ相呼應するものなり。「正成泣いて正行を誡めて曰く」と云ふ。泣くの一字を點じ得て人をして其妥當なるを首肯せしむるに足る。今此一字に代ふるにあくびを以てせば如何、更に代ふるにビールを煽つてとせば如何、更に進んで「正成鼻糞を丸めて正行を誡めて曰く」とせば如何、正成の遺誡と鼻糞を丸めるの行爲は對立すべき豫期以外に超然として對立するの傍若無人なるにあきるゝの結果は不調和の惡感を透過して解脫の天地に入るに似たり。

作例を求むるに一にして足らず。*Tom Jones* 中 Molly（賤しき家の娘）の分外に盛裝して寺に賽したるが爲め、四隣の嫉を買ひて遂に一場の活劇を釀せる狀を寫せるものあり。

"Ye Muses, then, whoever ye are, who love to sing battles, and principally thou who whilom didst recount the slaughter in those fields where Hudibras and Trulla fought, if thou wert not starved with thy friend Butler, assist me on this great occasion. All things are not in the power of all."—Bk. IV. chap. viii.

寫す所は匹夫匹婦の爭なり。寫す姿は詩神を九天に呼び起して神來の興趣を人間に傳ふる莊重

典雅の筆に似たり。此兩者はまさに對立すべからずして、而も一切の習慣を無視し、天下の嘲笑を事ともせずに對立す。對立するが爲めに强勢のfを形づくらず、又緩和のfを產せず。或は兩者を加へて新たなる一新fをも生まず。彼等は相冒す事なく、相應ずる事なく、個々として對立し、支離に對立し、滅裂に對立す。腹掛と陣羽織と對立するが如し。然れど不對法は單にこゝに止まらず。源平盛衰記の口調を以つて土方の爭鬪を敍せんと擬するFieldingは猶語を繼いで云ふ。

"As a vast herd of cows in a rich farmer's yard, if, while they are milked, they hear their calves at a distance, lamenting the robbery which is then committing, roar and bellow; so roared forth the Somersetshire mob an hallaloo, made up of almost as many squalls, screams, and other different sounds as there were persons, or indeed passions among them: some were inspired by rage, others alarmed by fear, and others had nothing in their heads but the love of fun; but chiefly Envy, the sister of Satan, and his constant companion, rushed among the crowd, and blew up the fury of the women; who no sooner came up to Molly than they pelted her with dirt and rubbish."—*Ibid.*

是 Homer の文を借りて丐兒の喚聲を敍するもの、其矛盾の思慮工夫以上に著るしくして且つ會釋なく對立せるが故に不對法として成功せるものなり。然れども矛盾は此一段を通過して更に

一歩を進む。

"Molly, having endeavoured in vain to make a handsome retreat, faced about; and laying hold of ragged Bess, who advanced in the front of the enemy, she at one blow felled her to the ground. The whole army of the enemy (though near a hundred in number), seeing the fate of their general, gave back many paces, and retired behind a new-dug grave: for the churchyard was the field of battle, where there was to be a funeral that very evening. Molly pursued her victory, and catching up a skull which lay on the side of the grave, discharged it with such fury, that having hit a tailor on the head, two skulls sent equally forth a hollow sound at their meeting, and the tailor took presently measure of his length on the ground, where the skulls lay side by side, and it was doubtful which was the more valuable of the two. Molly then taking a thigh-bone in her hand, fell in among the flying ranks, and dealing her blows with great liberality on either side, overthrew the carcass of many a mighty hero and heroine."—*Ibid.*

良家の令嬢に扮し得て刻意に風格を揚げんとするものゝ卒然と怒を作して、本來の面目を拳闘

裏に露出し來るさへ一種の不對法なり。然れども作者の技巧は單に是にとゞまらず。此悍婦を置くに神聖なる寺院を借る、これ不對法なり。紛糅喧騒を敍するの序附記して當夜葬儀ありて新たに墓をうがてりと云ふ、これ不對法なり。Molly 奮然として地上の髑髏をとつて敵に擲つ、これ不對法なり。妙齡の女子死人の枯骨を振つて、勇躍敵中に入る、是不對法なり。而して全章を貫くに莊嚴なる Homer の文體を用ゐて些の遲疑なし是不對の尤も甚しきものなり。

此種の對置に用ゐらるべき兩素は其性質上非常に悲酸なるべからず、又非常に嚴肅なるべからず。少なくとも滑稽趣味に要する道德觀念の抽出を許すものならざる可からず。沈默なるもの忽ち豹變して饒舌底止する所を知らざるは不對法として興味を惹くに足ると雖ども、溫順なるもの急變して他を殺すに至つては之を不對として滑稽視しがたきが如し。冥想遐思して泥溝に顚墜するは不對として成功せざるにあらずと雖ども深井に陷つて非業に死せりとせば諧謔の趣は頓に消するを見るべし。從つて深刻ならざる材を得て之を對置するか、もしくは深刻なる材を不留意に平淡なる材として使用するを可とす。*Tristram Shandy* を繙いて左の一節を讀め。

"Now, whether it was physically impossible, with half a dozen hands all thrust into the napkin at one time,—but that some one chestnut, of more life and rotundity than the rest, must be put in motion,—it so fell out, however, that one was actually sent

rolling off the table: and as Phutatorius sat straddling under, — it fell perpendicularly into that particular aperture of Phutatorius's breeches, for which, to the shame and indelicacy of our language be it spoke, there is no chaste word throughout all Johnson's Dictionary: — let it suffice to say, — it was that particular aperture which, in all good societies, the laws of decorum do strictly require, like the temple of Janus (in peace at least), to be universally shut up .....

The genial warmth which the chestnut imparted, was not undelectable for the first twenty or five-and-twenty seconds; — and did no more than gently solicit Phutatorius's attention towards the part: — but the heat gradually increasing, and, in a few seconds more, getting beyond the point of all sober pleasure, and then advancing with all speed into the regions of pain, the soul of Phutatorius, together with all his ideas, his thoughts, his attention, his imagination, judgment, resolution, deliberation, and ratiocination, memory, fancy, with ten battalions of animal spirits, all tumultuously crowded down, through different defiles and circuits, to the place in danger, leaving all his upper regions, as you may imagine, as empty as my purse." —Vol. IV. chap. xxvii.

嚴肅なるべき學者を一方に想像し、熱したる燒栗の其股間に轉墜する狀を他方に想像する時、此不對法の趣を解するは何人も認むる所なるべし。然れども單に燒栗なる平淡の材料なるが故に感興の深きを忘るべからず。もし之に代ふるに毒蛇を以てするとき滑稽の趣は頓に索然たらざるを得ず。毒蛇の人を害する事は燒栗の比にあらざるを以て、吾人の注意は其如何に危險を人命に及ぼすかの掛念に制せられて遂に不對法の存在を認むる能はざるに至る。燒栗の場合にも毒蛇の場合にも不對は依然として存在す。然れども不對の效力は兩者を選擇するの如何に因つてしかく消長するを忘るべからず。

吾人は此種の不對法を個人の上に認むる時、滑稽的快感を禁じ得ざるを以て、此滑稽的快感を自然の供給以上に貪らんとするの念よりして人工的に此不對法を製造して快を取る事あり。人工的不對法は二種の形式によりて實世界に出現す。其一は惡戲にして、他は虛言なり。此二方法を用ゐるときは吾人は他をして一種の矛盾に陷らしむる事を得。例へば盛裝せる紳士の帽を纏ふに紙鳶の糸を以てして、之を泥土の上に落下するが如し。此二種の形式を以て不對法を實世界に應用するとき、吾人は他を矛盾の境に置くの責任者たる點に於て多少の不德義を遂行せざるを得ず。故に其目的物はかゝる目的物となつて自己の矛盾を興ありと見る程の洒落なるものか、又は神經遲鈍にして此矛盾を感ぜざるものか、又はある事情よりして此矛盾の不便と不面目とを受くる價

値あるものならざるべからず。一たび此形式を濫用して憚からざる時吾人は目的物の矛盾より生ずる滑稽感を味ふの暇なきうちに却つて此不德義を犯したる無賴漢を嫉むに至る。彼の外國の喜劇と稱するものを讀んで其此種の不對に充つるが爲め却つて不快の念を起すは此法を利用して滑稽感を讀者に與へんが爲め、矛盾の境に苦しむべからざる溫厚篤實の人を强ひて窮境に誘致して顧みざるに因る。かゝる不德義を敢てして憚からざる作家は輕佻の作家なり、かゝる作物を讀んで滑稽と思ふは輕佻の讀者なり。淳朴の風衰へて浮靡の風一世を墮落せしめたる時始めて此種の作物を見る。故に此種の作物は開化の產物なり。而して又都會の產物なり。

第七章　寫實法

余は前段に於て吾人の用ゐる文學的手段と名くべきもの六種を擧げて之を敍述せり。首に四種の聯想法を說き次ぎに調和、對置の二法に論及したるが故に更に章を改めて寫實の一法を辯ぜんと欲す。

凡そ文學の材料となり得べきものは(F+f)の公式に引き直すを得べしとは、本論の冒頭に於て說けるが如し。而して上來點檢し來れる六種の手段とは此材料が單に(F+f)となつて孤立せず、

之に加ふるに(F′+f′)なる新材料を以てして兩者の結合より生ずる變化の類目を、比較的に組織立ちたる方法によりて調査したるに過ぎず。故に此六種に共有なる特色は一材料を表現するに他の材料を雇ふにあり。少なくとも二個以上の材料なきとき此手段は成立せざるにあり。

更に六種を類別して其傾向を論ぜんに、(一)に連結せられたる二材が同所に活動して、吾人のFに對する情緒を普通の程度以上に高むる場合多きを忘るべからず。四種の聯想法中第一、第二、第三聯想法と對置法中の强勢法とは之に屬す。(二)に連結せられたる二材が相克して、吾人のFに對する情緒を普通の程度以下に低ふする場合あるを忘るべからず。對置法中の緩和法は之に屬す。(三)に二材相合してFに偏せず又F′に偏せず、兩者相待つて、FにもF′にも屬せざる一種の(纏まりたる)情緒を生ずる二個の場合あるを忘るべからず。調和法と假對法是なり。(四)に聯想法中の第四と對置法中の不對法とは二材の連結するに關はらず、此結合よりして何等の渾和せる一情緒を起す事なきを忘るべからず。

約言すれば吾人があるFより受くる情緒の變化を欲して之にF′を加ふるとき、强烈若しくは濃厚の方向に動くもの六種を數へ、消除、減低の方向に走るもの一種を得、FF′の固有なる情緒に關係なく、卒然として全く新しき情緒を得るもの二種を擧ぐ。最後に之をつゞむれば、上來の文學的手段はFに加ふるにF′を以てして之を强烈にし又濃厚にするを目的とするもの多きに居る。

今余が述べんとする寫實法は實に此尤も多き方法に對して起るものなり。故に余の所謂寫實法とは其意義に於て世間の豫期する所のものと異なるやも知るべからず。余が前段に說敍せる文學的手段は、玆に呈出せられたる材料ありて、此材料を如何に表現せば尤もよく詩化せらるべきや又美化せらるべきや(或は滑稽化せらるべきや)の問題を解釋せるに過ぎず。もし夫れ材料其ものゝ取捨如何に至つては上說の手段中に含まるゝ事なきを以て、問題に接觸せずとして之を論議の外に置けり。寫實法は此際文學的手段の一として、前段の連續せるものに外ならざるを以て、同じく此型中に其意義を限らざる可からず。卽ち與へられたる材料を如何に表現せば寫實法にして其效果は果して如何との問題を解決するを以て一章の主眼とす。材料其物の寫實的なるや否やに至つては後段の衍義を待つて始めて問題となるを忘るべからず。

"The brazen throat of war had ceased to roar."—Milton, *Paradise Lost*, Bk. XI. 1. 713.

是大膽なる詩的の語なり。詩的と云ふの曖昧なるを厭ひて余一家の術語を用ゐれば聯想法中の投出語なり。投出語の效果は前に詳說せるを以て玆に贅するの必要なしと雖ども、其效果の如何に拘はらず、一の爭ふべからざる事實を證明するは明なり。日本人は勿論、歐洲人は勿論、英國人と雖ども、假令 Milton と同時代に生れたる英國人と雖ども、日常談話の際かゝる言語を使用せずとの事實は如何に抗辯するも遂に否定し能はざるべし。既に日常人の會話にあらざるよりは

此種の言語によりて日常人を想見しがたきは論を待たず。詩家紙に向ひ思を構へて如何なる形容語を以て戰を表現すべきかを拈定して、始めて此會得あり。從つて此會得は詩人の專賣に屬す。庸人のあづかり知る所にあらず。かく戰を形容して千軍萬馬の聲を一行數字のうちに集注するの技巧は詩人を待つて始めて能くするを得るが故に、詩人の詩人たる所以は全く此構想の成否に因つて決すべき程の大事なるやも知る可からず。然れども詩的の語は遂に詩的の語なり。一定の思索的勞力を經て始めて成るの點に於て、之を自然の語と云ふべからず。(蠻人中に存外詩的語多きはこの問題に關係なし。) 從つて戰を髣髴せしむるの點に得る所あると同時に、吾人が日常の表現法を離れたるの點に於て不自然の弊に陷れりと云ふを憚からず。故にかゝる語法を用ゐて與へられたる材料を表現するとき、與へられたる材料は腐草化して螢となるの觀を呈すべきも、醇化の度愈高くして、實世界の表現を離るゝ事愈遠きに至る。もし一人あつて現實社會の表現を眼前に活動せしめんとせば、勢是等の語法より得る便宜を犧牲に供して、自然に吾人の耳に入る表現法(平凡なるにも關せず)を用ゐざる可からず。之を寫實法と云ふ。

此故に前段に述べたる文學的方法の多くのものと寫實法とは全く其目的を異にす。例へば美人を描くが如し。(美人を與へられたる材料に比す。) 前段の諸法の志す所は此美人の服裝を如何にせば、此美人の毛髮を如何にせば、此美人の背景を如何にせば、又之を如何なる醜婦の傍に立た

しめば、天性の麗質を愈發揮すべきかを研究するにあり。かく人工を待つて始めて出現せる美人は嬋妍の態に於て遙かに途上の美人を凌ぐに足るものあらんも、之を凌げば凌ぐに從つて吾人と其撰を異にするが爲め、一方より云へば吾人の同情を失ふものとす。途上の美人は必ずしも詩人の考案になる服裝と、雲髻と、背景と、配合とを負ふて途上を行かざるが故なり。吾人はかゝる條件を具備せる詩國の美人と畫裡の美人とを好まざるにあらずと雖ども、相逢ふて是れ吾同胞なりと切實に感じ得んが爲め、吾血を以て、吾肉を以て成れる美人に邂逅せん事を要す。天外異方の佳人にして碧眼金毛なるものと、吾親戚中に寄寓する一孃子とを比較するとき、窈窕の度はいたく劣るにも關せず、わが同情は常に後者の上に落つるを見るべし。後者の人類として吾に親しきが故、人類として(美醜を度外にして)其利害を憂ふる事切なればなり。一例は以て全斑をつくすに足るべし。是に於てか知る。——吾人は詩人の建立せる蓬萊に入り、畫家の創造せる桃源に遊んで陶然たる幻惑を受くるを辭せざると共に、わが親しく見聞せる日常生活の局部が其儘眼前に搖曳して寫實的幻惑中に吾人を擠ひ去るを快とするものなるを。

先きに引用せる俊寛の口説に徵するも這裏の消息は審かなるを得べし。俊寛の言語は謠曲に全通する一種の工夫を用ゐて詩化せられたるものなり。(巧拙は論ぜず。) 此工夫あるが爲めに彼の言語は其中に包有するFの情緒的價値を高めたりと雖ども、之が爲めに吾人が俊寛をわが朋友視

するの念は愈消滅するを免かれず。吾人の朋友中にかゝる思想を表現するにかゝる手段を取るものは一人も有らざる可ければなり。從つて俊寛の言語は詩的幻惑を生ずるに他を拔く一步なると同時に、寫實的幻惑を生ずるに他に後るゝ事一步なりと云はざる可からず。單に俊寛のみならず沙翁の劇中に活動する人物は悉く此種の言語を弄して憚からざるものなり。此故に沙翁の描ける人物は寫實法より見て尤も不自然なる言語を使用するものなり。(心理作用の自然、表現せられたる情緒の自然等は此問題に關係なきものとす。) 下つて十八世紀に至つて此種の言語遂に弊をなして遂に發展の餘地なきに至る。彼等の月なるFを表現するに Cynthia's horn の二字を使用せるを見て、如何に其累をなせるかを見るべし。

擧世此工夫に心醉して又他を顧みるに暇なきに當つてWordsworthは忽然として詩壇の刷新家として出現せり。有名なる *Lyrical Ballads* の二版の序に曰く、

"The principal object, then, proposed in these Poems was to choose incidents and situations from common life, and to relate or describe them, throughout, as far as possible, in a selection of language really used by men, ..."

"Incidents" と云ひ "situations" と云ふは今余の論議せんと欲する所にあらず、只普通人の實際に用ゐる言語を以て詩を行るが目的なりと云ふに至つては、余が此章に敍說する寫實法に

よりて句を運ぶと云ふと一般なるが如し。(彼の主張の必ずしも然らざるは序を通讀して知るべし。) 只此一事實は余が必要を認めたる寫實法の存在を益强固ならしむるのみならず、其方向の前段述説の諸法と趨勢を異にして殆んど反馳するの傾あるを以て、擧世一の弊を受けて、其累に堪へざらんとするとき、必ず他に赴いて之を救はんとするに至るべきを例證せるものなり。(故に Wordsworth の詩を讀むものは何人も余が寫實法の效果として述べたる條件を具足するを發見すべし。)

寫實法は實世界の表現法を其儘に踏襲するが故に實世界の斷片を紙上に縮寫するの便ありと述べたるは事實なり。然れども玆に實世界の斷片とは寫實法によりて敍述せらるべき材料より組織せられたる斷片の謂にあらず。先に引用せる Milton の一句に就て云はんに、もし此詩的の言語に代ふるに寫實法に戻らざる活世間の表現法を用ゐるときは、表現の內容たる「戰」が、現世界の戰として、鮮明に吾人の眸底に印せらるべしと云ふにあらず。もし印象よりすれば Milton 以上の表現法は何人と雖ども發見しがたきやも知る可からず。只此句の詩的感興を惹く事多きが故に、工夫の鎔爐に鍛錬の幾時を經過して、鏘然と紙上に落下せるものたるべきを覺る時、斷じて街頭寒暄の辭と同じからずとして、活世間と交涉遠しとなすに過ぎず。故に活世界と交涉遠しと云ふは「戰」を表現すべき人に卽して云ふべくして、表現せられたる「戰」が活世間を離れたり

との意にあらざるは無論なり。上來述べ來りたる寫實法の辯護は多く此點より彼是を比較して云云せるものとす。是故に他の文學的手段の巧拙に至つては之を問題外に放棄せり。

然れども一度問題外に放棄せる巧拙をも打算して寫實法と對比するとき、其辯護は單に實社會の人物を活躍せしむるの功德にとゞまらず、與へられたる材料其物の表現的價値に卽しても亦同樣の議論をなすを得べし。前段の文學的諸法は悉く積極的技巧なるを以て完全に成功する時は天來の妙趣を一句の裏に淋漓たらしむるを得るが如しと雖ども、一たび正鵠を失して斧鑿の痕を縱横に印するとき、天巧は人巧に陷り、人巧は拙巧に墮し、意を用ゐる事愈深くして、醜を露はす事愈多きに至る。是に於てか彫琢を加へて面目漸く下り、俗語に所謂キザと云ひ厭味と呼ぶものを滿紙に塗布して顧みざるに至る。是表現に技を弄して拙を暴露するのみならず、却つて拙以下に低落せるものなり。翻つて寫實法を案ずるに、寫實法は其自然の言語なるが故に——、尤も意を經ざる表現なるが故に、——造次顚沛の科白なるが故に——技巧として尤も拙なるものなり。否巧拙を云々すべき技巧なきにちかきものなり。馬を指して馬と云ひ、牛を呼んで牛と云ふ。何等の奇なきに似たり。純乎として無藝の表現なり。たゞ夫かくの如く無藝にして他奇なきが故に、光彩の陸離として人を射るなきも、淡粧濃抹の度を失して、粉飾の俗氣觀者の膽を寒からしめて、肌上に點々の粟をつらぬるに勝るや遠し。寫實法は拙なる表現なり。拙を蔽はざる表現なり。故

に粗にして野なり、眞率にして質直なり。簡易にして無雜作なる表現なり。單なる表現法とするも寫實の價値亦沒すべからざるに似たり。「雲を霞と逃げ去る」と云ふ。比較的複雜なる表現なり。「遠く逃る」と云ふ。寫實の表現なり。而して前者の文飾を厭ふものは必ず後者の直截を愛せん。月を敍して Cynthia's horn と云ふ。これ聯想より來る表現法なり。或は其事實の月に遠きを忌むものあらん。「鎌の如き月」と云ふ。又聯想法に過ぎず、然れども切實の度に於て數歩を拔くが如し。最後に「三日月」と云ふ。天下是より簡單なる表現法なし、是より質直なる表現法なし。而してあるものは、ある場合に於て必ず後者に與す。

與へられた材料を如何に處理すべきかの問題に關して寫實法の功果を說ける事上の如し。もし夫れ一歩を進めて材料其物の取捨に就て寫實法の好惡する所を說かんか論議すべきもの固より少なからず。然れども表現的寫實法の長所は取材的寫實法の長所と異なる所なく、兩者活世界の尋常生活を方寸に劃して、之を吾人の面前に曜らしめ、以て吾人が比隣の同胞に對する如き興味と同情を喚起するにあり。吾人の比隣に英雄なし。故に寫實家の描く人物は英雄ならず。英雄ならずして吾人の同情をひくは、其人物の偉大なるが爲めにあらず、吾人と同じく平凡なればなり。(平凡なるが故にわれに近し、われに近き故に同情多し。此種の同情を拒むものは日夕に往來する親友の寫眞に同情せざるが如し。) 吾人の比隣には珍事なし。故に寫實家の敍する事件は多く平

淡也。時に瑣末に流るゝ事さへあり。平淡の事件に吾人の興味あるは猶平凡の人物に同情あるが如し。吾人の日常世界に推移する事件は小說的に發展し、又小說的に綜合する事少なし。故に寫實家の作る結構は、(結構は材料にあらざるも序なれば云ふ) 結構として價値少なし。(結構が結構として價値あるは普通以上なればなり。普通以上なれば常住實世界に存在する事なし。故に結構の結構として推賞すべきは其自然以上に纏まりたる點に於て自然を缺くものなり。たとひ技巧として完全に近きも寫實的幻惑は却つて之が爲めに損せらるゝを免かれず。) 寫實家の描く景物は新奇なるを要せず、日常眼前に横はるが爲め、吾に親切の感多きものを捕ふれば足る。其理由に至つては前者と一樣なれば繰り返すの必要なし。

寫實家はしかく平凡なるものなり。否奇を求むる事を欲せざるものなり。而して吾人は其平凡なる所、奇を求めざる所に向つて興味を感ずるに過ぎず。かの沙翁の劇を檢するに常に異常の人を捕へて、異常の事件を寫すを以て、劇の本領となすものゝ如し。わが父を殺すものはわが叔父にして、わが母に通ずるものもわが叔父なるのみか、殺されたる父の亡靈に會する事一再にしてとゞまらざる Hamlet の如きは余の未だ曾て遭遇せざる人物なり。可憐の身を挺して法服に男裝するのみならず、一字の法規を暗んずるなくして、法庭に執拗なる猶太人を說服する Portia の如きも余の夢にだも見る能はざる女流なり。殘忍不孝なる Lear の二女の如きも、陰險奸譎 Iago

の如きも亦わが知人中に發見する能はざる非常識の徒なり。此等の異常の人物が異常の事件に遭遇して行爲する心理作用の自然なるか將た不自然なるかは余の關知する所にあらず、又兩者の離合曲折より生ずる技巧上の興味は余の說かんと欲する所にあらず。たゞ此異常の人、異常の事件は百年を通じて吾人の身邊に偶發するの機少なきを以て、吾人と別乾坤なるやの疑を起さしむるの點に於て慥かに不自然の誹を免かれざるものなり。不自然の誹を免かれざる點に於て寫實家の敢てせざる所のものなり。此意義に於て寫實派は浪漫派に反す。同じき意義に於て寫實派は理想派に反し、又古典派に反す。余は敢て兩者を軒輊するの意なし。只其長短を比較して兩者各其主張あるを明かにして、世の文學を愛するものをして、作によつて着眼を異にすべきを知らしめんとするのみ。（此章は特に寫實を題目とするが故に之を說く事詳にして深く他を解說するの餘地なし。他日を俟つ。）

余は表現の寫實を論ずるの序、取材の寫實に及びて遂に本章の領外に逸出せるを以て、玆に二三の實例を擧げて此章を結ばんとす。十八世紀末の詩人 Crabbe は表現の形式に於て既に Pope 一派の籬下に立つを免かれずと雖ども、其取材の平易卑近なるは優に寫實法に一家をなせるものと云ふべし。

[*Farm-Servants at Meal.*]

"To farmer Moss, in Langar Vale, came down
His only daughter, from her school in town;
A tender, timid maid! who knew not how
To pass a pig-sty, or to face a cow:
Smiling she came, with petty talents graced,
A fair complexion, and a slender waist.
Used to spare meals, disposed in manner pure,
Her father's kitchen she could ill endure;
Where by the steaming beef he hungry sat,
And laid at once a pound upon his plate;
Hot from the field, her eager brother seized
An equal part, and hunger's rage appeased;
The air, surcharged with moisture, flagg'd around,
And the offended damsel sigh'd and frown'd;
The swelling fat in lumps conglomerate laid,

And fancy's sickness seized the loathing maid.
But, when the men beside their station took,
The maidens with them, and with these the cook;
When one huge wooden bowl before them stood,
Fill'd with huge balls of farinaceous food;
With bacon, mass saline, where never lean
Beneath the brown and bristly rind was seen;
When from a single horn the party drew
Their copious draughts of heavy ale and new;
When the coarse cloth she saw with many a stain,
Soil'd by rude hinds who cut and came again —
She could not breathe; but, with a heavy sigh,
Rein'd the fair neck, and shut th' offended eye;
She minced the sanguine flesh in frustums fine,
And wonder'd much to see the creatures dine."—*The Widow's Tale*, ll. 1–30.

Popeの詩を讀むものにして此篇に對せば其用韻の末に於て互に相似る所あるにも關せず、其實質を比較する時霄壤の差あるを見るべし。敍する所は農家の事なり、しかも彼等の想像に成る古典的臭味を帶びたる農家にあらずして、勞役と汚穢とをかねたる農家の廚房なり。之を誦して詩趣を呼び起さずと訴ふるは誦するものゝ罪なり。只眼前に彼等が生活狀態の如何に素樸にして且つ無作法なるかを想見すれば足る。Crabbeの吾人に與ふ所のものは架空の詩にあらず、田舍の實景なり。此實景に眉をひそめて野人に同情を寄するとき、彼の目的は達し得たりと云ふべし。もし夫れ食膳の敍記に至つてはKeatsの *The Eve of St. Agnes* 中の一節、及びMooreの *Lalla Rookh* 中の *The Light of the Haram* の篇を通讀して此と相對照して始めて詩家毛穎子を動かすの法決して一ならざるを知るべし。Crabbeの欲する所は寫實的幻惑なり。他二家の志す所は詩趣的幻惑なり。(今煩を避けて一々に之を比較せず。就て見るべし。) 其他 *Peter Grimes* に於ける河岸の光景、*Strolling Players* に於る優人の技を學ぶの狀、*The Smoking Club* に於る醉漢の語に至つて、一として所謂詩境を擺脫して實世界の斷片を憚りなく寫さゞるものなし。

Jane Austenは寫實の泰斗なり。平凡にして活躍せる文字を草して技神に入るの點に於て、優に鬚眉の大家を凌ぐ。余云ふ。Austenを賞翫する能はざるものは遂に寫實の妙味を解し能はざるものなりと。例を擧げて之を證せん。

"'My dear Mr. Bennet,' said his lady to him one day, 'have you heard that Netherfield Park is let at last?'

Mr. Bennet replied that he had not.

'But it is,' returned she; 'for Mrs. Long has just been here, and she told me all about it.'

Mr. Bennet made no answer.

'Do not you want to know who has taken it?' cried his wife, impatiently.

'*You* want to tell me, and I have no objection to hearing it.'

This was invitation enough.

'Why, my dear, you must know, Mrs. Long says that Netherfield is taken by a young man of large fortune from the north of England; that he came down on Monday in a chaise and four to see the place, and was so much delighted with it that he agreed with Mr. Morris immediately; that he is to take possession before Michaelmas, and some of his servants are to be in the house by the end of next week.'

'What is his name?'

'Bingley.'

'Is he married or single?'

'Oh, single, my dear, to be sure! A single man of large fortune, four or five thousand a year. What a fine thing for our girls!'

'How so? how can it affect them?'

'My dear Mr. Bennet,' replied his wife, 'how can you be so tiresome? You must know that I am thinking of his marrying one of them.'

'Is that his design in settling here?'

'Design? nonsense, how can you talk so! But it is very likely that he *may* fall in love with one of them, and therefore you must visit him as soon as he comes.'

'I see no occasion for that. You and the girls may go, or you may send them by themselves, which perhaps will be still better, for, as you are as handsome as any of them, Mr. Bingley might like you the best of the party.'

'My dear, you flatter me. I certainly *have* had my share of beauty, but I do not pretend to be anything extraordinary now. When a woman has five grown-up daughters,

she ought to give over thinking of her own beauty.'

'In such cases, a woman has not often much beauty to think of.'

'But, my dear, you must indeed go and see Mr. Bingley when he comes into the neighbourhood.'

'It is more than I engage for, I assure you.'

'But consider your daughters. Only think what an establishment it would be for one of them. Sir William and Lady Lucas are determined to go, merely on that account; for in general, you know, they visit no newcomers. Indeed you must go, for it will be impossible for *us* to visit him, if you do not.'

'You are over scrupulous, surely. I daresay Mr. Bingley will be very glad to see you; and I will send a few lines by you to assure him of my hearty consent to his marrying whichever he chooses of the girls; though I must throw in a good word for my little Lizzy.'

'I desire you will do no such thing. Lizzy is not a bit better than the others: and I am sure she is not half so handsome as Jane, nor so good-humoured as Lydia. But

you are always giving *her* the preference.'

'They have none of them much to recommend them,' replied he; 'they are all silly and ignorant like other girls; but Lizzy has something more of quickness than her sisters.'

'Mr. Bennet, how can you abuse your own children in such a way? You take delight in vexing me. You have no compassion on my poor nerves.'

'You mistake me, my dear. I have a high respect for your nerves. They are my old friends. I have heard you mention them with consideration these twenty years at least.'

'Ah, you do not know what I suffer.'

'But I hope you will get over it, and live to see many young men of four thousand a year come into the neighbourhood.'

'It will be no use to us, if twenty such should come, since you will not visit them.'

'Depend upon it, my dear, that when there are twenty, I will visit them all.'"

—Austen, *Pride and Prejudice*, chap. i.

取材既に淡々たり。表現亦洒々として寸毫の粉飾を用ゐず。是眞個に吾人の起臥し衣食する尋

常の天地なり。此尋常他奇なきの天地を眼前に放出して客觀裏に其機微の光景を樂しむ。もし樂しむ能はずと云はゞ是喫茶喫飯のやすきに馴れて平凡の大功德を忘れたるものゝ言なり。かの詩人といひ墨客と號するもの動もすれば動心驚魄の事を天外に捕へて、動心驚魄の筆を紙上に驅るにあらずんば文章にあらずと思へり。然れども動心驚魄の事は尋常一樣の人を千載一遇の異境に置いて始めて發展の實を擧げ得べきもの、從つてかの徒の所謂深刻と云ひ、痛切と云ひ、熱烈と云ひ、日常茶飯裏の活計と交渉なきに似たる活劇も、亦此尋常一樣人の所作の權化に過ぎず。もし尋常一樣の人にあらずと主張するとき、彼等の描寫する人物と、平凡なる吾等との間に同情の一縷だも緣の糸となつて纏はらざるを以て、深刻も、痛切も、熱烈も、悉く是天外の深刻と痛切と熱烈にして、實世界の感動にあづからず。纏々千萬語をつらねて遂に讀者の一笑を買ふに過ぎず。此故に如何なる非凡異常の活劇を描くも、之を演ずるものは遂に平凡なる現實社會の一員たらざる可からず。少なくとも此平凡なる一員が特殊の境界に、特殊の所作を實現するものと假定せざる可からず。否假定するの必要なく比隣鄕黨の某々を拉して此特殊の境界に置くとき、彼等も亦篇中の人物と同じく特殊の所作を實現すべしとの基礎を背景に置て、讀者の胸裏に終局の安慰を與へざるべからず。安慰とは——平凡なる吾等讀者も一度び非平凡なる境界に入るとき、非平凡の所作を現ずるの已を得ざるに至るべきを思ふて、書中に敍述する所の如何に吾平生を離れ

たるにも關せず、有條件の事實なりと認識するの謂なり。從つて是等非平凡の行爲は平凡なる日常の行爲と、質に於て渾然として融和して、一脈の流水の本末の如き觀を呈せざるべからず。篇中非凡なる人物の動作は平凡なる吾人の動作の、自からなる連續にして、兩者の間には截然たる溝渠あつて之を二區に劃するにあらずと思はしめざるべからず。

此結論を提げて再び寫實の領域に歸り來るとき、吾人は彼等の爲めに斬新なる一種の主張をもたらし歸りたるが如き心地あり。Austen の描く所は單に平凡なる夫婦の無意義なる會話にあらず。興味なき活社會の斷片を眼前に髣髴せしむるを以て能事を畢るものにあらず。此一節のうちに夫婦の性格の躍然として飛動せるは文字を解するものゝ否定する能はざる所なるべし。夫の鷹揚にして、婦の小心なる。夫の無頓着にして婦の神經質なる。夫の和諧の範を超えずして、しかも揶揄の戲を禁じ得ざる、婦の兒女の將來を思ふて咫尺の謀に餘念なき——悉く筆端に個々の生命を託するに似たり。夫婦の壽はもとより知りがたく、遭逢の變亦計りがたきは云ふを待たずと雖ども、此一節によりて彼等の平生を想見するは容易なり。卽ち此一節は夫婦の全生涯を一幅のうちに縮寫し得たるの點に於て尤も意味深きものなり。只に縮寫なるが故に意味深きのみならず。吾人一度び彼等性格の常態を此縮寫によつて把住するとき、かねて其變態をも豫知し得べきが故なり。有爲と云ひ、轉變となづくる浮世にあつて、運命の翻弄一定の度を超過するとき、彼等も

亦特殊の境界に入りて特殊の活劇を演ずるやも計りがたしと雖ども、此活劇は既に此一節に於て表出せられたる彼等性格の常態中に含有せらるゝにあらずや。彼等の運命に對するあらゆる飛躍は此常態より脱化するものにして、此常態と獨立するものにあらざればなり。もし獨立するとき吾人は脈絡の感を失ひて吾人は一人を目して二人もしくは三人となさゞるべからず。吾人と交渉なき星の世の人物と見做さゞるべからず。故に兩者が依然として吾人の同情を惹き、終局の安慰を吾人の胸裏に與へんが爲めには、此常態があらゆる境遇に應じて變化する凡ての可能性を含めりと云はざる可からず。含むと云ふの不穩當ならば徹底の深きに此可能性を何時にても喚起するの資格ありと斷ぜざる可からず。此故に此一節の描寫は單に彼等性格の常態を縮圖にせるの點に於て深さを有するのみならず、併せて其可能的變態をも封藏せるの點に於て深さを有するものとす。此斷案を許すとき動心驚魄の事を借りて異常の世界に尋常の人を運び去るにあらざるよりは人生の機微を穿つて、深奥なる能はずと主張するは誤りにちかきが如し。人を殺して血を見ざれば已まずと云ひ、風雲を叱し、雷霆を呵せざれば壯ならずと云ひ、骨を剜り、眼を剔せざれば泣かずと云ふ。云ふは可なり。之を以て深しと思ふは却つて解すべからず。當面の珍事は大に人を動かすが故に深からん。然れども露骨にして含蓄を缺くが故に淺しとも云ひ得べし。一笑にして萬斛の涙を藏するものあり。泣かざれば泣くと思はぬものには此笑は無意義なるやも知るべから

ず。吾は却つて是等をこそ深きものと思へ。這裏の消息に通ずるものはAustenの深さを知るべし。Austenの深さを知るものは平淡なる寫實中に潛伏し得る深さを知るべし。

寫實家の表現法は彼の如く、其取材法亦斯の如し。更に取材の範圍に制限を加ふる所の構事法を見れば其目的は愈分明なり。Marianneは病にかゝるもの、Elinorは病を看護するもの。Austen其光景を敍して曰く、

"The repose of the latter became more and more disturbed; and her sister, who watched, with unremitting attention, her continual change of posture, and heard the frequent but inarticulate sounds of complaint which passed her lips, was almost wishing to rouse her from so painful a slumber, when Marianne, suddenly awakened by some accidental noise in the house, started hastily up, and, with feverish wildness, cried out—

'Is mamma coming?'

'Not yet!' replied the other, concealing her terror, and assisting Marianne to lie down again; 'but she will be here, I hope, before it is long. It is a great way, you know, from hence to Barton.'

'But she must not go round by London,' cried Marianne, in the same hurried manner.

'I shall never see her, if she goes by London,'"—*Sense and Sensibility*, chap. xliii.

此一節は病者發熱の際、半ば無意識に口に上す迷亂の語を其儘に直敍せるものに過ぎず。然れども神經の異狀を呈せる病者の言語は二樣の解釋を許す。彼は平生の我を失へるものなり。平生の我を失ふものは平生以上の我を得たるか、平生以下の我に墮せるかの二に過ぎず。常識を以て判ずるに、體熱昂上して精神昏昧の境に彷徨するは自然の勢なるを以て、Marianne の母に關する妄語の如きは、平生以下の我を發現せるものと見做すを以て至當とす。然れども詩歌の空想鄕に立つて、此現象を見るときは迥然として別種の觀あるを妨げず。日常の自我を遺失せる刻下に、已靈の幽光を千里の遠きに放つて、雙耳雙目の視聽以外に、物象の先後するを知り得て、傍人の解すべからざる玄妙の豫言を道破し得たりと解するも亦高遠の趣なきにあらず。二者孰れに從はんかの問題を決し得るとき、寫實派と浪漫派の區別を決し得べし。Austen は寫實家なり。寫實家としての Austen が此小女の囈語を如何に利用せるかを說くに當つて、類似の場合に於る浪漫派の態度を說くの便宜なるべきを信ず。

Jane の情人と索居して、思慕の念に堪へざるや、月明の夜、一室のうちに坐して、遙かに吾名を呼ぶものあるを聞く。耳を峙つるに室中より起るにあらず、庭際より來るにあらず、天より下るにあらず、地より出づるにあらず。しかも人間の聲なり、しかも吾が情人の聲なり。吾が情

人の苦しんで、狂ふて、切に吾を呼ぶ聲なり。作者 Brontë 女主人公の口を借りて其行動を敍して曰く、

"'I am coming!' I cried. 'Wait for me! Oh, I will come!' I flew to the door, and looked into the passage: it was dark. I ran out into the garden: it was void.

'Where are you?' I exclaimed.

The hills beyond Marsh Glen sent the answer faintly back, 'Where are you?' I listened. The wind sighed low in the firs: all was moorland loneliness and midnight hush."—*Jane Eyre*, chap. xxxv.

と。Jane の吾名を空裏に聞くは、Marianne の遠き母を云々するが如し。其敍方既に兩作家の好尙をあらはして步趨既に一ならずと雖ども、引用せる節に二樣の解釋を許すは兩者異なる所なし。二樣の解釋を許すにも關せず、Brontë の斷乎として玄祕主義を執れるは後段の照應を見て知るべし。

書の三十七篇に曰く"As I exclaimed 'Jane! Jane! Jane!' a voice—I cannot tell whence the voice came, but I know whose voice it was—replied, 'I am coming! wait for me!' and a moment after, went whispering on the wind, the words—'Where are you?'.....

'Where are you?' seemed spoken amongst mountains; for I heard a hill sent echo repeat the words." と是情人 Rochester の Jane に告ぐるの語なり。是に由つて之を見れば女の聽けるは空裏の幻音にあらず、男の受けたるは夢中の妄答にあらず、離群百里にして、相思の念、靈界に呼應して、肉團五官の諸緣に超絶せるものなり。二二〔が〕四をなすの世界に在つて此不可思議の因緣を窺ふとき、吾人は事の異常なるに驚ろいて逡巡する事數歩ならんとす。然れども一度び現實の俗念を放下し得て醍醐の詩味に全身を委棄して顧みざるとき壺中に天地あり、蓬萊亦咫尺なるを知る。之を浪漫派得意の興致とす。(C. Reade は其著 *The Cloister and the Hearth* に於て又此浪漫的方法を用ゐて讀者をして自然以上の情緒に耽らしめんと力めたるものゝ如く、Chap. lxx, lxxix, lxxx, 皆此超自然の消息に觸るゝを見る。然りと雖ども是等異常の事は其異常なるが爲めに半ば興懷を杳遠にするの功力あるもの、之を用ゐる事多きに失すれば、讀者遂に作家を信ぜざらんとす。質に於て異常なるものは何度繰り返さるゝも玄祕の感を免かれずして、しかも其效果のみは平凡となるが故なり。怪力亂神を說く事二六時中なるも怪力亂神は遂に怪力亂神にして、其人を怖れしむるの程度は說くに從つて減ずるが如し。此故に如何に浪漫派の作物と雖ども感應の場合の如きは一あつて二あるべからざるもの、Reade は慥かに此點に於て失敗せるものと云ふべし。)

吾人は構事の點に於て既に浪漫派の作戰法を看破したるを以て、此新知識を得て再び寫實家の壘に歸り以て彼我の參差を較量せんとす。Austen の寫實主義は Marianne の譫語が後段に至つて如何に照應するかを待つて始めて發揮せらるゝものとす。小女の言は其母に關す。小女の此言を發せる時、其母の如何なる狀態にありしかを檢すれば此問題は自から解決せらるゝものとす。Colonel Brandon は小女の病を報じて其母を迎へんが爲めに Barton に至れるの人なり。

"The shock of Colonel Brandon's errand at Barton had been much softened to Mrs. Dashwood by her own previous alarm; for so great was her uneasiness about Marianne, that she had already determined to set out for Cleveland on that very day, without waiting for any further intelligence, and had so far settled her journey before his arrival, that the Careys were then expected every moment to fetch Margaret away, as her mother was unwilling to take her where there might be infection."

—*Sense and Sensibility*, chap. xlv.

小女の靈と其母の神と自然以上の感應なかりしは此一節の證明によつて疑ふの餘地なきに似たり。換言すれば作家は M. の病をかりて、空冥の奥に形而上の作用を喚起して、讀者の詩魂を翻弄するの策を採らざりしに似たり。此故に M. は尋常の子女にして、其母亦尋常の母たるを免か

れず。只尋常なるが故に吾人と共に衣し、共に食し、共に行動するを知る。之を知るが故に吾人は彼等に向つて一般の同胞に對すると異なるなき同情を與ふるに躊躇せざるものとす。

M. を尋常なりと云へり、母を尋常なりと云へり。否余は M. の罹りたる病すらも尋常なりと云はんと欲す。(*Pride and Prejudice* 中にも亦妙齡の子女が他家に掩留して風邪に罹るの例あり。) 凡そ小說にあつて、篇中の人物が病に罹るとき、此病の尋常の病たるや極めて少なし。吾人は其源因に於て、或は其結果に於て必ず重大の關係を有するを發見す。此病を緣に佳人の看護を受けて相思の成立するあり。或は財貨と機運を放抛して主人公の困厄に陷るあり。或は一日枕に伏して十日不歸の客となるあり。要するに因果の纏綿せる病なり。翻つて吾人の平生を見るに、吾人の病にかゝる事屢なるに關らず、吾人の生活狀態に大影響を與ふる事少なきを常とす。吾人は風邪の爲めに雜炊を食ふ事あり、脚氣の爲めに小豆を用ゐる事あり。眼疾の爲めに讀書を廢する事あり。然れども未だ曾て窓間より藥餌の料を投入せるものなし。看護婦にして、昔しわが隣人の兒女なるに邂逅せる事なし。わが父の高利に苦しめられたる醫師の配劑によりて萬死に一生の恩を謝したる事なし。要するに吾人の病は病の爲にする病にして他に何等の責任なきものなり。此故に尋常の病は小說にあつては不用の病たるを免かれず、破格の病たるに過ぎず。而して Austen が插入せるは正に此不用にして破格なる病なり。只夫れ不用なり、全篇の大趣向を動か

すに足らず。此故に眞實の病なるを想見せずんばあらず。平凡を裝ふて讀者を欺くは寫實家の慣用手段にして、Austen は其最たるものなり。

之を取材法(附構事法)に於る寫實派と浪漫、理想諸派の區別とす。蓋し浪漫、理想の語は寫實の取材法を論ずるに當つて始めて之に配して用ゐたるもの、寫實の表現を說くに際しては、只之を六種の文學的手段に對置せるのみにして、未だ浪漫、理想の表現法あるを口にせる事なし。今溯つて表現の諸法を檢し、吾人が取材に於て浪漫、理想對寫實の形式を得るが如く、浪漫的表現、理想的表現、對寫實的表現の形式を作つて、浪漫的理想的表現のもとに前六種の手段を總括し得るや否やを見んと欲す。之を見んが爲には六種の特性を一目に比較して、概括の便を刻下に會得すべき表を製するを上策とす。

文學的手段	文學的效果
第一種聯想(投出法)	f+f′
第二種聯想(投入法)	f+f′
第三種聯想法	f+f′
第四種聯想法	×
第五調和法	f+f′
第六對置法 (a)強勢法……f+f′ (b)緩和法……f−f′ (b)附假對法……f+f′ (c)不對法……×	
第七寫實法	f

表中左側に列記するは文學的手段にして、右側にあるは、此手段によりて顯著にせられたる效果を公式に引き直したるものなり。f は約束の如く、與へられたる材料(F)に附着

する情緒にして、f′は作家の腦中より得來つて、與へられたる材料(F)に配する新材(F′)より生ずる情緒を示すものとす。×はf f′の關係上公式に引き直す事能はざるものとす。

今右側の公式を檢するに比較する能はざる二の×と、第六のうち(b)に屬する(F−P)を除くの外は悉く(F+P)なる一樣の公式に屬するを見る。更に約言すれば吾人が文學的手段として列擧せる六種の大部分は其趨勢に於て歩武をひとしうするものなるは明かなり。

此大體の趨勢を代表する(F+P)なる公式を尋常の言語に譯す時、如何なる意義を現はし來るかを知れば吾人の問題は容易に解決せらるゝものとす。案ずるにfは既與性にして又既與量なり。この既與性と既與量とに滿足せざるが故にf′は配せられたるものとす。か(り)にfを以て尋常一般の既與性と既與量を有するものとせば、作家の手段は之に加ふるにf′なる新情緒を以てして、尋常なるfを尋常以上に濃化釀酵せんとするものゝ如し。換言すれば與へられたる千金を工夫して、二千、乃至三千金に利用せんとするが如し。或は與へられたる冷水にf′の熱を加へて七十度もしくは八十度の感を生ぜしめんとするが如し。此點に於て(F+P)を以て示し得る數種の文學的表現法は、(吾人が取材に就て寫實法と對したる)浪漫、理想諸派と其傾向を同じくすと斷言するを得べし。如何となれば後者は既與fに對して工夫を費やす事の代りに始めより高度のfを有する材料を使用するが故に當初より冷水を厭ふて八十度もしくは九十度の熱を含める材料を提げ來

るが故に其效果より云へば(少なくとも其傾向より云へば)彼是相通ずるの特點を有すればなり。取材の上に於て命名せる浪漫、理想諸派の特色と、表現上に於て概括せる(F+P)の公式を有する諸法が此點に於て一致する時、吾人は取材の上に於てのみ用ゐたる浪漫、理想の語が單に取材に限らるゝのみならず、此等表現の諸法の上にも當然冠せらるべき性質を有するを信ず。是に於てか取材法に於て寫實派に對するに浪漫諸派を以てしたる、吾人は更に表現法に於ても亦寫實に對するに浪漫理想を以てして、此浪漫理想の語中に(F+P)の公式に引き直し得べき文學的表現法の特色を含蓄せしめんとす。此約束の成立する時、吾人の寫實と云ひ、浪漫と云ひ理想と云ふは皆二樣の意義を具ふるを見る。而して兩者の結合より種々なる變形の生ずるを見る。表現の寫實にして取材の浪漫なるものあり。取材の寫實にして表現の浪漫なるものあり。兩者共に寫實なるものあり。兩者共に浪漫なるものあり。

取材は寫實に始まつて幾多の階段を經て浪漫派(附理想派)の高度に達す。表現も同所に始まつて又同樣の階段を經て同樣の高度に終る。文章は一句の末より一節一章の長きに至つて取材、表現の結合なるが故に此兩方法の數多きに從つて其結合の數も亦多き

	取材法	表現法
浪漫派	120	120
	110	110
	100	100
	90	90
	80	80
	70	70
	60	60
寫實派	50	50

は爭ふべからず。而して浪漫、寫實の二法は單に兩極をとつて命名せるが故に兩間に介在して、或は一に近く或は他に近かく、順を追ふて羅列するに堪へざる程の變形を產すべし。而して此變形の個々が悉く取材表現の二者に分かるゝを以て、又此二者のいづれをか組み合せて始めて文章を作るを以て吾人の實際に當つて文を評し詩を品するは比較的に錯雜なる解剖を經ざる好尙に支配せらるゝは疑ひなし。

欄內に記入せる數字は取材、表現の二法にわたつて諸流の讀者の上に生じ得る情緖の分量を比例的に示せるものなり。下端に位する寫實派は材を普通の事物に取る。普通の事物に非常なるfを生ずる事少なし。かりに此fの數量を示すに50を以てす。寫實派の表現法に至つては固より何等の潤澤と粉飾を要せざるが故に其f又下端に位して、之を示すに亦50を以てす。是より以上取材を變ずる事一度びにして十を增し二十を增し遂に百二十に至る。百二十とは單に高度を示すにとゞまつて、必ずしも百二十ならざるべからざる〔ことなき〕は、猶五十の五十ならざるも不可なきが如し。表現法にあつて寫實を去る一步にして十を加へ、二步にして二十を加へて遂に百二十に至るは取材法の場合と異なるなし。

寫實派の得點は最下位にあるにも關はらず、其自然に近きの點に於て、其現實を詐はらざるの點に於て、其無邪氣なるの點に於て、巧を求めざるの點に於て、最後に平淡のうちに意外の深さ

を寓し得るの點に於て、優に浪漫派と對するに足る。而して其失は平凡に陷るにあり、無味に墮するに在り、勃窣に終るにあり、何等の風格を存せざるにあり。浪漫派（附理想派）の得所は其刺激强きにあり、其斬新なるにあり、縹緲の韻を具するにあり、血肉を緊張するにあり、張膽刮目の功を讀者の上に收むるにあり。もし其弊を論ずれば一にして足らず。或は不自然となり、厭味となり、幼稚となり、滑稽なる窮氣となり、滅裂なる突飛となる。吾人の嗜好が此孰れに僻するかは時勢により、年齡により、兩性により、最後に天稟の資質による。Elizabeth 朝の文學は無上に浪漫的なるものなり。後人其想像の豐富なるに驚ろくと共に其無制限に飛躍するを嘲らんと欲す。老人は架空の刺激に堪へざるものなり、青年の劍を舞はして獻欷し酒を被つて長歌するを見て其勇を賞すると共に其稚氣あるを憐れまずんばあらず。女子は最大級を好むものなり、三五の兒女を擁するもの猶且つ杜撰荒唐の小說を愛して恥づる事なし。Austen の *Pride and Prejudice* を草するとき年齒廿を超ゆる事二三に過ぎず、しかも寫實の泰斗として百代に君臨するに足る。凡そ此數者は皆時勢、年齡、兩性、天稟の支配を受けて吾人の嗜好の兩極中に上下し彷徨するを示すものなり。此故に如何なる結合が百世に通じて尤も完全なる文字を產し得べきやは器械的に斷案を下す可からず。吾人はかくして批評の條目を定め得べきも、批評の標準に至つては遂に定むべからざるなり。もし强ひて之を定めんとせば、各條目內に於てするを穩當とす。一條目に於

て建立し得たる標準を机上に安置して、妄りに他の條目に屬すべき性質を律し去らんとするとき毫釐千里の誤を生じ易し。之を批評家の昏迷と云ふ。

第八章　間隔論

文學の大目的の那邊に存するかは暫く措く。其大目的を生ずるに必要なる第二の目的は幻惑の二字に歸着す。浪漫派の材を天外に取つて、筆を妖嬌に驅るは鏡裏に怪異の影を宿して、その怪異なるが爲めに吾人をして眼を他に轉ずる事能はざらしむ。寫實派の事を卑俗に藉りて文を坦途に馳するは鏡裏に親交の姿を現じて、その親交なるが爲めに吾人をして眼を他に轉ずるを欲せざらしむ。能はざらしむると、欲せざらしむると興致に於て一ならずと雖ども此效果の幻惑に存するは爭ふべからず。幻惑を生ずるの法固より一にして足らず。前段章を分つて講說せるは皆「文藝上の眞」を發揮して幻惑の境を讀者の腦裏に誘致するの方法に過ぎず。然れども表現に取材に浪漫、寫實の兩極にわたつて論ぜるは悉く內容の消息なり。（世人或は表現を以て形式に屬すとなすものあるは誤れり。吾人の點檢したる表現の諸法は旣與性なる(F+P)に配するに(F'+P')を以てして、彼此の影響する所を論ぜるに過ぎざれば、吾人の所謂表現法は文章の內容に卽しての

み用ゐる可き言語なるは疑ふべからず。）幻惑は固より內容性に因つて產出せらるゝを常とするにも關はらず、又形式に待つなき能はず。形式とは內容に關係なく二個以上の文素の結合せる狀態を云ふ。此狀態の範圍を短縮して一句の上に論議を試むるときは、文法に所謂句の構成法と同じきに至る。例へば Great is Diana of the Ephesians と Diana of the Ephesians is great とを比較して其幻惑を生ずるの度を定むるが如し。英の哲學者 Spencer は其著『文體論』に於て之を詳述せり。一步を進めて複雜の方面に向ふとき主賓の地位及長短の辯に入る。吾人の先に調和法を說けるや、主材と客材とを分ちて其長短の比例を論じたるは、內容の辯をなすべく制限を受けながら、實は形式の論を插みたるものなり。又先に對置法中にあつて緩和、强勢の二種を說くや、同じく內容の論中に形式上の說を密輸入せるものなり。此程度の複雜期に於ける形式の幻惑は、同じく內容の論中に形式上の說を密輸入せるものなり。更に複雜の度を加へて一章一篇の長きにわたつて立上に及ぼす效果はしかく大なるを知るべし。論するとき、形式論は遂に變じて結構論となる。結構論となるとき問題は單に幻惑の上に落ちず。結構は結構として吾人の形式美感の要求を充たすべく存在し得るが故なり。首尾相應じて常山の蛇の如き其一なり。前段を末一章に收拾し得て些の滲漏なきも其一なり。明暗互に用ゐ人をして其變化を樂ましめ、しかも其錯雜を感ぜざらしむるも其一なり。層々として筍子の皮を剝ぐが如

くなるも其一なり。一離一合して最後を縹緲の裏に抹し去るも亦其一なり。(余の淺學なる內容を說いて形式に及ぶ能はず、形式の局部に觸れて結構の大本を詳說する能はざるは遺憾なり。) 故に此點より見たる結構は吾人の美感を滿足するを以て目的とするが故に——事物に卽し、人物に卽して美感を滿足せしむるにあらずして、形式に於ての美感を滿足するを目的とするが故に、事物と人物とのみに卽して云ひ得べき幻惑に直接の關係を有せざるものとす。

內容の幻惑法は不充分ながら前數章に涉つて之を述べたり。(余はとくに不充分と云ふ。敢て謙遜の意にあらず。余の說ける幻惑法は一時の幻惑法にして、ある一定時をつらぬいて起る幻惑法にあらざればなり。例へば篇中の人物が終始を通じて讀者に幻惑を生ぜしむる場合の如きは、其方法と必要と條件とに論なく毫も論及するを得ず、前章を布衍して、わが論旨を此項に貫徹せしめんには、わが有する以上の閑時日を要す。) 形式の幻惑法は結構に至りて直接の影響を失ふを發見せり、是に於てか不完全ながら余の論じ得べき幻惑の諸法は略ぼ悉くせるに近し。只だ一事の之に附加して云ふべきあり。間隔論是なり。間隔論は其器械的なるの點に於て寧ろ形式の方面に屬すると雖ども純然たる結構上の議論にあらず。章と章、節と節の關係より起る效果を考量するにあらずして、寧ろ篇中の人物の讀者に對する位地の遠近を論ずるものとす。但し篇中の人物は、單に讀者に對してある位地を保たざる可からざるのみならず、又篇中の事件及び他の人物に

對してある位地を保たざる可からざるが故に、單に讀者のみを眼中に置いて、之を適當の位地に立たしむるときは、たとひ讀者の歡を買ふ事此點に於て顯著なるにもせよ、他の方面に於て作家は、より大なる犧牲を敢てせざるを得ざるに至る。從つて其應用は前段の諸法の如く普遍ならずと知るべし。

取材の幻惑は材そのものゝ質に由つて決す。表現の幻惑は技そのものゝ巧を待つて定まる。間隔の幻惑は距離其ものゝ遠近に支配せらる。間隔の幻惑は質にあらず技にあらず單に位地にあり。故を以て前兩者の如く優勢なる能はず。又任意に使用する能はざるを以て前兩者の如く便利ならず。然れども理論上遂に其功力を否定し能はざるは事實なりとす。例へば格鬪の如し。千里を隔て、百年を隔てゝ、故紙上に之を讀む何等の興味なし。時間もしくは空間の隔りを拂つて之を現代に移すか、又は自國に運び來るかに因りて幾分の活氣を添ふ。卽時卽席之を觀るに及んで始めて拍案の概あり。是に於て讀者と篇中の人物との距離は時空兩間に於て、他に妨げなき限り、接近せしむるを以て幻惑を生ずるの捷徑とす。

時間に於て距離を短縮するの一法として作家の慣用するは歷史的現在の敍述なり。何人の創意に成るを審かにせずと雖ども、其常套の慣手段なるは坊間行はるゝ所の修辭學を讀んで知るべし。此他に時間を短縮し得るの良策あるや否やは未だ考へず。去りとて此陳腐なる技巧を今更の如く

論議するは徒らに紙筆に災するの擧なるを以て措く。

歴史的現在と併立して吾人の注意を要求すべきは空間短縮法にして、しかも彼が如く一般の顧眄に價せざる如き觀あるは、歴史的現在に匹敵すべき便法の此方面に發見せられざるに因るか。思ふに普通の作物に在つては、著者の紹介を待つて始めて、篇中の事物、人物を知るを例とす。著者の彼と呼び彼女と稱するものは必ず著者に對して一定の間隔を保つを示すもの、而して、其著者と吾人讀者とは亦一定の間隔に立つが故に、吾人と篇中の人物との間には二重の距離を控へたるは明かなり。譬へば電話機に他と語るが如し。交換手の斡旋を待つて始めて彼我の意を通ずるに過ぎず。吾人の耳目は常に自から聽き自から見て其聰明に誇らんとするもの、著者の指摘を待つて始めて彼を知り彼女を知るは、わが耳目の聰明を奪はれたるにひとし。わが耳目の自由なる活動を阻礙せられて、わが能力の非凡なるに誇らんとする凡ての機會を失へるものゝ、かしこに著者を控へ、其著者のかなたに又篇中の人物を控へて遙かに之を望むの已を得ざる時、著者の彼と指し此と敎ふるものを疎外するは勢の免かれ難き所なり。是に由つて之を觀れば空間短縮法の一方は中間に介在する著者の影を隱して、讀者と篇中の人物とをして當面に對坐せしむるにあり。之を成就するに二法あり。讀者を著者の傍に引きつけて、兩者を同立脚地に置くは其一法なり。此時に當つて讀者の目は著者の目と合し、其耳亦著者の耳と化するが故に、かれの存在は毫

もわが聰明を妨ぐるに足らずして、二重の間隔は短縮して其半ばを減ずるに至る。或は讀者を著者の傍らに引くに代ふるに、著者自から動いて篇中の人物と融化し、毫も其介在して獨存するの痕迹を留めざるが如き手段を用ふ。此時に當つて其著者は篇中の主人公たり、若しくは副主人公なり、もしくは篇中の空氣を呼吸して生息する一員たり。從つて讀者は第三者なる作家の指揮干渉を受けずして、作物と直接に感觸するの便宜を有す。

もし此二方法をとつて、之を哲理的に解釋し去らんとするとき、吾人はその題目の深廣にして、吾人の今述べんとしつゝある卑近なる形式間隔論の領域を遙かに超越するを認めずんばあらず。如何となれば此二方法は實に作家の作物に對する二大態度を示すものなればなり。第一法を用ゐたる作物を批評的作物と名づけて第二法に遵ふものを同情的作物とし以て一切の小說類を二大別するを得べき方法たればなり。批評的作物とは作家篇中の人物と一定の間隔を保つて批判的眼光を以て彼等の行動を敍述して成るを云ふ。此方法によりて成功せんとせば作家自からに偉大なる强烈なる人格ありて其見識と判斷と觀察とを讀者の上に放射し、彼等をして一言の不平なく作家の前に叩頭せしめざるべからず。わが千里眼を以て彼等の明を奪ひ、わが順風耳を以て彼等の聰を殺し、わが金剛力を以て彼等の平凡なる人格を摧粉して、一字一句の末に至る迄悉くわが意に贊同せしめて始めて能くする事を得べし。同情的作物とは作者の自我を主張せざるの作物を云ふ。

たとひ自我を主張するも篇中の人物を離れて、主張すべき自我なきを言ふ。換言すれば兩者の間に間隔の認むべきなくして、同情の極油然として一所に渾化せるを云ふ。此方法によりて成功せん爲めには作家必ずしも篇中人物の行爲動作を批判し好惡するの見識と趣味とを要せず、第三者の位地に超然として公平なる判官の態度を嗜好の上に維持するを須ひず。只篇中の人物と盲動すれば足る。篇中の人物の如何に愚昧なるも、如何に淺薄なるも、如何に狹隘なるも作家の問ふ所にあらず。愚昧なるものは愚昧なる所に向つて徹底に同情し、淺薄なるものは淺薄なる所に向つて專念に同情し、狹隘なるものは狹隘なる所に向つて滿腔に同情し得て、其同情の眞面目なる事吾に同情するが如く甚しきに至つて始めて著者の自我を沒し得て讀者の心を動かす。

形式的間隔論をなさんが爲めに擧げたる二方法は是に於てか逆行して作家の態度となり、心的狀況となり、主義となり、人生觀となり、發して小說の二大區別となる。深く此裏の消息に通じて、題相應の哲理的論辯をなさんとせば幾多の材料と思索と解剖綜合の過程に待たざるを得ず。余が現在の知識と見解とは此點に向つて一箸をだに下し能はず。徒らに此大問題を提供して研究の餘地を青年の學徒に向つて指示するに過ぎざるは遺憾なり。

哲理的間隔論は余の能くする所にあらざるを以て、再び前述の二方法に歸つて形式の方面より此方法の如何なる樣姿を以て作物の上に現はるゝかを檢せんと欲す。案ずるに第一法は讀者と作

家(篇中の人物と獨立せる)との間隔を打破するにあるを以て、形式の上より見て、之に叶へるものを發見する事難しとす。然れども第二法に至つては篇中人物の位地に關連し來るが故に、此等の位地を變更して、作家との間隔を短縮するを得べく、短縮の結果として零の答を得る時、作家は變じて篇中の人物と化するが故に讀者と篇中人物とは作家を離れて對坐するに至るべきなり。要するに交涉する所は讀者、作家、篇中人物の三織素にして、形式にあらはるゝは、此三織素のうち、篇中の人物のみなるが故に、もし動かし得る者ありとすれば、之を措いて他に何等の動くべきものゝあるべき理由なければなり。

形式にあらはるゝ篇中人物の位地を變更するとは彼と呼び彼女と稱して冥々に疎外視するものを變じて、汝となし、更に進んで余と改むるに過ぎず。從つて頗る器械的なり。然れども單に此稱呼を更ふる丈にて間隔の縮小するは何人も否定し能はざるの事實なりとす。彼とは呼ばれたる人物の現場に存在せざるを示すの語なり。彼を以て目せられたる人物の、呼ぶ人より遠きは言語の約束上然るなり。此故に彼を變じて汝となすとき、現場に存生せざる人物は忽然として眼前に出頭し來る。然れども汝とは我に對するの語なり。呼ぶに汝を以てするとき彼是の間に猶一定の距離あるを免かれず。彼に比すれば親密の度を加ふる事一級なるも遂に個々對立の姿を維持するに過ぎず。只汝の我に變化するとき、從來認めて以て他とせるものは俄然として、一體となつて

些の籬藩に隔てらるゝ事なし。此故に彼は篇中の人物を讀者より尤も遠きに置くものなり。汝は之を作家の眼前に引き据ゑるの點に於て其距離を縮め得たるものなり。最後に余に至つて作家と篇中人物とは全く同化するが故に讀者への距離は尤も短縮せるものなり。

彼を變じて汝となすの法は所謂書翰文體 (Epistolary form) の小說によつて文界に出現せるが如し。書翰を以て一篇の小說を構成するとき篇中の人物は彼是を呼ぶに汝を以てするが故に、讀者は汝と呼ぶ人を通じて、汝と呼ばれたる人と對坐する事を得。然れども書翰文體は此點に於て利益あるにも關はらず他に大なる不便を冒さざる可からざるを以て Richardson 以後此法を踏襲せるもの少なし。もし夫れ此不便なくして此形式を常用し得るものは脚本のみ。脚本は首尾を通じて問答より成るが故に篇中の人物は相互を呼ぶに汝を以てせざる可からずして、此點より來る利益を十二分に收め得るものとす。或人告げて曰く小說の頁を翻へして會話あるは讀み、會話なきは讀まずと、ある人の言は一般讀書子の嗜好をあらはすものと云ふて不可なきが如し。即ち此間隔短縮法の如何に人を動かすに效力あるかを見るべし。但し篇中の人物が相互に汝と呼ぶは、作家が篇中の人物を呼ぶに汝を以てすると異なり。作家が汝と呼ぶときは讀者作家の傍らに立ちて汝を見るに過ぎずと雖ども、此作家は篇中の人物を汝と云ひ得るが故に、眼前の人物と共に同空氣に生息するは明なりとす。玆に至つて作家は遂に篇中人物の一員たらざるを得ざるが故に、

幻惑の程度より云へば篇中の人物が相互に汝と呼ぶ場合と異なるなし。

若し夫れ作家にして終始一貫して篇中人物を呼ぶに汝を以てする事を得るとせば、作家が變じて余となつて篇中にあらはるゝの場合ならざるべからず。余の先きに擧げたる作家と作裏の一人とが同化せる場合即ち是なり。作家もし此法を用ゐるときは吾人と作家(即ち余と稱するもの)とは直接に相對するが故に事々切實にして窓紗を隔てゝ庭砌を望むの遺憾なきを得るに近し。もし文學史に於て此種の作例を求むれば其數枚擧に遑あらず。時人其陳腐にして却つて其效果を疑はんと欲するが如し。俗に所謂寫生文なるものは悉く此法を用ゐて文をやるに似たり。其主張の如きは敢て聽くを得ざるを以て論議すべからざるに似たりと雖ども、余を以て之を見るに彼等はしかせざる可からざる源因あるに似たり。彼等の描寫する所は筋として纏まらざるもの多し。即ち篇中の人物が一定の曲線をゑがいて一定の落所を示す事少なく、其多くは散漫にして收束なき雜然たる光景なるを以て興味の中心たるは觀察者即ち主人公ならざるべからず。他の小說にあつては觀察をうくる事物人物が發展し收束し得るが故に讀者は之を以て興味の中樞とするを得べきも、寫生文にあつては描寫せらるゝものに滿足なる興味の段落なきが故にもし中心とも目し得べき說話者(即ち余)を失へば一篇の光景は忽ち支柱を失つて瓦解するに至るべし。此故に讀者は只此余(作家として見たるにあらず、篇中の主人公として見たる)に從つて、之をたよりに迷路を行くに

過ぎず。此大切なる余は讀者に親しからざるべからず。故に余ならざるべからず。彼なるべからず。

卑近なる間隔論は略悉くすを得たり。但し是とても一般の理論に過ぎず。此理論の應用に至つては固より千差萬別にして作家の手腕を待つて始めて發揮すべきのみ。左に二三の例を擧げて之を證せんとす。

Palgrave の編述にかゝる *Golden Treasury of Songs and Lyrics* は一代の好著として普く人の許す所なり。卷中 CXXXVIII 及び CXXXIX に相次で Goldsmith と Burns の小詩一篇を掲ぐ。記憶すべきは兩詩共に少女の身を過つて、節を汚し、嗟臍の悔を殘喘に託して天地に蹐蹐するの窮狀を歌へるにあり。取材既に同じきを以て比較に便なるが故に之を引用す。

"When lovely woman stoops to folly
And finds too late that men betray,—
What charm can soothe her melancholy,
What art can wash her guilt away?

The only art her guilt to cover,

To hide her shame from every eye,
To give repentance to her lover
And wring his bosom, is—to die."—O. Goldsmith.

Burns の詩は廣く人の知る所のもの、殆んど之を引くの用なきに似たれども、兩者の差異を一目のうちに明瞭ならしめんが爲めに、敢て蛇足の罪を犯す。

"Ye banks and braes o' bonnie Doon,
How can ye bloom sae fair!
How can ye chant, ye little birds,
And I sae fu' o' care!

Thou'll break my heart, thou bonnie bird,
That sings upon the bough;
Thou minds me o' the happy days
When my fause Luve was true.

Thou'll break my heart, thou bonnie bird
That sings beside thy mate;
For sae I sat, and sae I sang,
And wist na o' my fate.

Aft hae I rov'd by bonnie Doon,
To see the wood-bine twine,
And ilka bird sang o' its love;
And sae did I o' mine.

Wi' lightsome heart I pu'd a rose,
Frae aff its thorny tree;
And my fause luver staw the rose,
But left the thorn wi' me."—R. Burns.

此兩詩を一時に唱し了つて、いづれが讀者の心を動かす事最も多きやと問ふ時、讀者もし同じ

と云はゞ夫にて論議の餘地なし。もし Goldsmith の方詩情に訴ふる事切なりと云はゞ、然るかと云ふて已まん。去れども讀者もし其批判を逆しまにして Burns の痛切なる、前者の及ぶ所にあらずと主張せば、余は再び何が故に Burns は痛切なりやと問はん。讀者もし囁嚅して逡巡し、自己の感得を言語の平面世界に羅列する事能はずと云はゞ、われ讀者の爲めに無用の辯を費やして、兩者の長短を剔刔するの愚を憚からざるべし。G. の詩は冷靜なり、端然として窮愁を說く事木人の舞ひ石女の泣くが如し。B. に至つては滿腔凡て是悲哀なり。日月を傾け山河を貫いて只悔恨の二字を餘すに過ぎず。是兩詩の吾人に訴ふる感受の差なり。吾人は此差より出立せざる可からず。此差より出立して其對象を二作の上に求めざるべからず。之を求むるに(一)に曰く B. の詩は鳥と云ひ草と云ひ河と云ひ薔薇と云ひ感覺的材料に充ちたり。(二)に曰く B. の詩は岸よと呼び鳥よと呼び投出語を用ゐる事多し。(三)に曰く B. の詩は禽聲の和諧を述べ、岸頭の碧蕪を望みて、之をわが孤愁暗涙に對する點に於て强勢法にかなへり。此三者は皆 G. の有せざる所のもの、以て兩者の優劣を決して餘りありと云ふべし。然れども此三者を別にして、しかも一瞥の早きに甲乙を定むべきものあり。之を第四とす。(四)に曰く B. の詩は間隔法を得たり。歌を作るものは B. にして、歌ふものは少女なり。而して此少女と作家とは詩中に相會して合して一となるが故に、讀者は詩人の繞ぐらせる籬落を隔てゝ、茫々たる少女を望むにあらず、面上咫尺を去つて此

不幸の兒と相對する事を得。之に反して G. の詩に在つては主たるべき薄命の子と詩中に相見る事を得ず、僅かに詩人を介して其近狀を冷靜なる口吻によりて傳へ聞くに過ぎず。慟哭の態、哀痛の音に乏しきは云ふを待たず。

世俗に所謂敍情詩なるものは、事物を敍するにあらず、性格を寫すにあらず、其名の示す如く情を歌ふものなり。既に情を歌ふを以て主眼とす。勢痛切ならざる可からず。情を歌ひて痛切ならんとするとき、歌ふものは自己ならざるべからず。自己より痛切なる情緒を有するものなければなり。此故にかの敍情詩なるものは余を以て筆を起し、余を以て筆を擱く。余とは作家なり、然らずんば作家と合致せる主人公なり。此故に敍情詩に在つては吾人常に間隔の尤も短縮せる距離に於て詩中の趣を味ひ得るものとす。

更に一例を擧ぐ。少時 Scott の *Ivanhoe* を讀んで、Rebecca の盾を翳して壁間より戰狀を Ivanhoe に報ずるの章に至つて張目寐ぬる能はず、燈を挑げて天明に達せるは、今猶明かに記憶にあり。當時庶幾する所は只書を樂しむに在つて、事を解するに存せざりしを以て、其何が故に吾心を動かすの此の如く甚しかりしかは遂に腦裏に反問するの意なくして長く歲月を經たり。後年漸く思索の街頭に往來の蒼頭白首を數へて、紅絹青衣を類別するに至つて、始めて十年の昔に回頭して、考案の未だ透過せざるものあるを思ひ、之を拈定して一炷の香を燒く事再三、未だ分

明に端的を會せずして已めり。今又此間隔論に逢着して、前の話頭を擧し來るの恰好なるを見る。もし辨じ得て釋然たらざるとき、大方の善知識余の爲めに三十棒を揮へ。

說かんと欲する所は書中二十九章にあり。全文を引用せんとすれども其長きに堪へず。故を以て一言の辯を費やして其不足を補はんとす。讀者(一)に主人公(Ivanhoe)の病に臥して蓐中に呻吟するを記憶せん事を要す。(二)に妙齡の佳人藥湯に侍して慇懃なるを記憶せん事を要す。佳人の名は Rebecca なるを記憶せん事を要す。(三)に此二人の城中の一室にあるを記憶せん事を要す。(四)に敵ありて城下に逼るを記憶せん事を要す。(五)に戰の起るを、戰の酣なるを記憶せん事を要す。(六)に Ivanhoe の病を力めて起たんとするを、Rebecca の强ひて之を止むるを記憶せん事を要す。(七)に佳人の身を挺して、窓に凭り、堞下の亂戰を Ivanhoe に報ずるを記憶せん事を要す。(八)かくして眼下の光景は佳人の口を通じて、問答の間に、發展し來るを記憶せん事を要す。茲に引用するは單に其一小節に過ぎず。

"'Holy prophets of the law! Front-de-Beuf and the Black Knight fight hand to hand on the breach, amid the roar of their followers, who watch the progress of the strife—Heaven strike with the cause of the oppressed and of the captive!' She then uttered a loud shriek, and exclaimed, 'He is down!—he is down!'

'Who is down?' cried Ivanhoe; 'for our dear Lady's sake, tell me which has fallen?'

'The Black Knight,' answered Rebecca, faintly; then instantly again shouted with joyful eagerness — 'But no — but no! — the name of the Lord of Hosts be blessed! — he is on foot again, and fights as if there were twenty men's strength in his single arm — His sword is broken — he snatches an axe from a yeoman — he presses Front-de-Bœuf with blow on blow — The giant stoops and totters like an oak under the steel of the woodman — he falls — he falls!'

'Front-de-Bœuf?' exclaimed Ivanhoe.

'Front-de-Bœuf!' answered the Jewess; 'his men rush to the rescue, headed by the haughty Templar — their united force compels the champion to pause — they drag Front-de-Bœuf within the walls." —Chap. xxx.

単に記述の浪漫的なるを以て此種の幻惑を解し去らんとするは未だし。間隔論を提げ來つて之を念頭に懸くる時、始め〔て〕牢關を透過して神漸く下るを覺ゆ。普通の記述は作中に融化せられざる著者の媒介を待つて始めて之を納受するは前に述べたるが如し。記を記事とし、著を作家とし、讀を讀者として、三者の間隔を圖に示せば記—著—讀となる。(之を第一圖とす。) 若し記事

の性質と著者の技巧により、幻惑の高潮度に達したるとき、卒然として著者の存在を遺却して當面に記事を熟視するを得ば、間隔は縮つて記—讀となる。讀者と著者と合したるの興致を示すものなり。(之を二圖とす。) 作家もし余を以て事を敍し、篇中の一人を代表して文を遣るとき、單獨なる作家は當初より其存在を認むるの必要なきを以て間隔は始より二圖と異なるなく記—讀を以て示すを得べし。此三式を胸裏に圖して、吾人の問題なる引例に歸つて比較の料とせん。

Ivanhoe の場合に在つて上圖の記に相當すべきは城下に起る戰鬪の光景なり。黑兜白毛の騎士なり。長幹偉軀の惡僧なり。伏せて彎く弓なり、空に鳴る矢なり。劍光なり。馬影なり。咄喊の聲、甲冑の浪なり。而して此等の動靜を敍するものは著者にあらずして明眸皓齒の佳人 Rebecca なり。故に此際に於ける圖式は記—著—讀にあらずして、記—R—讀となる。換言すれば作家に代ふるに Rebecca を以てして始めて相當なる圖式を得るものとす。幻惑(作家の技倆、記事の內容より生ずる者、間隔より生ずるものにあらず)の熾なる時讀者、作家の筆力に魅せられて、一定の間隔を支持する事を忘れ、進んで之に近づき、近づいて之に進み、遂に著者と同平面、同位地に立つて、著者の眼を以て見、著者の耳を以て聽くに至るが故に著者と讀者の間に一尺の距離をも餘す事なし。而して此際に於る著者は Rebecca にあらずや。此際に於る幻惑は白熱度ならずや。吾人は進んで Rebecca に近かざるを得ず、遂に Rebecca と同平面同位地に立たざる可からず。最後に R. の眼を以て見、R. の耳を以て聽

かざるべからず。R. と吾人との間に一尺の距離を餘すなきに至つて已まざる可からず。然るに Rebecca は篇中の一人物なり。戰況を敍述するの點に於て著者の用を辨ずると共に、篇中に出頭し沒頭し、逶迤として事局の發展に沿ふて最後の大團圓に流下するの點に於て記事中の一人たるを免かれず。此故に吾人は著者としての Rebecca と同化する傍ら、既に記事中の一人たる Rebecca と同化し了るものなり。是に於てか *Ivanhoe* の記事は重圜を描いて循環するを見る。外圜を描くものは Scott にして Rebecca は此圜內に活動し、內圜を描くものは Rebecca にして、堞下の接戰は其中に活動す。吾人は幻惑を受けて戰況を眼前に髣髴するの結果、內圜を描くものと同時、同所に立つて覺らず。顧みれば卽ち身は旣に外圜のうちに擒にせられて、篇中の人物と共に旋轉するを見る。翻つて Scott を索むれば遙かに圜外に在つて、吾人と利益を共にせざるが如く長嘯するに似たり。

此故に此場合に於ける間隔的幻惑は固より(記)—(著)—(讀)の如く隔靴搔痒の感あるものにあらず。或は讀者の進んで著者と合したる(記)—(讀)にもあらず。又は著者の余となつて篇中の人物を代表する意味に於ての(記)—(讀)にもあらず。讀者が記事其者の中に闖入せる場合なり。圖を以て示せば(記讀)ならざるべからず。記事、讀者共に一圜中に生息して、尺寸の間隔なき場合ならざるべからず。更に竿頭に一步を進めて云へば記事と讀者が一團となるのみならず、眞の著者を遙かの後へに見

捨てたるの場合ならざるべからず。從つて此特殊なる吾人の幻惑は、記事を操つる著者が、記事に對するよりも、吾人が記事に對するの、遙かに親密の度に於て優れりとの自覺より來るものなり。自から記事中に活動して圜外の著者を疎外視するより來る幻惑なり。之を圖に示すとき(記讀)—(著)なる變形を得るに似たり。

鄢陵の戰は左氏の文中白眉なるものとして、讀書子の推賞措かざる所なり。文に曰く

楚子登巢車以望晉軍。子重使大宰伯州犂侍于王後。王曰。騁而左右。何也。曰召軍吏也。皆聚于中軍矣。曰合謀也。張幕矣。曰虔卜於先君也。徹幕矣。曰將發命也。甚囂且塵上矣。曰將塞井夷竈而爲行也。皆乘矣。左右執兵而下矣。曰聽誓也。戰乎。曰未可知也。乘而左右皆下矣。曰戰禱也。

此章を讀むものは一見して其間隔法に於て *Ivanhoe* と暗合するを知るべし。もし間隔法を度外にして、此文の妙を稱せんとせば、稱する事日夜を舍てずと雖ども、遂に其妙所を道破し得ざるべし。

Rebecca の記述せるは眼前の戰なり。楚子の說明を求めたるも亦眼前の事なり。眼前とは咫尺の距離を意味するのみならず、又現在を意味す。是に於てか先に陳腐にして顧みるに足らずとせる歷史的現在法も、ある變形を以て、ある敍述に包含せらるゝときは、有力なる幻惑の要素を構

成すべきかの問題に入る。之を解釋せんには、先に擧げたる二例のうち、幻惑を生ずる上に於て、時の間隔が擔任せる比例は若干に値するかを發見すれば足る。此比例を發見せんには此間隔法を含有せざる作例を檢して其效果を明かにするを以て捷徑なりと信ず。

之を英文學史中に求めて Milton の *Samson Agonistes* を得たり。Samson が The Philistine の招に應じて、膂力を其間に示すや、好機遇すべからずとなし、一擧して敵を屠殺せんと誓ふ。是 Milton の正敍する所なり。柱を抱いて屋を撼かし、咆吼跳躍して滿堂の大衆を梁桷の下に壓殺するの壯擧に至つては、他の口を藉りて、之を其父に語らしむ。其語整齊、段落を得、次第を亂さず。層問層答して、遂に主眼の事件に入る。其言に曰く、

"At length, for intermission sake, they led him
Between the pillars; he his guide requested
(For so from such as nearer stood we heard),
As over-tired, to let him lean a while
With both his arms on those two massy pillars,
That to the archèd roof gave main support.
He unsuspicious led him; which when Samson
Felt in his arms, with head a while inclined,
And eves fast fixed, he stood, as one who prayed,
Or some great matter in his mind revolved:
At last, with head erect, thus cried aloud:—
'Hitherto, Lords, what your commands imposed
I have performed, as reason was, obeying,
Not without wonder or delight beheld;
Now, of my own accord, such other trial
I mean to shew you of my strength yet greater
As with amaze shall strike all who behold.'
This uttered, straining all his nerves, he bowed;
As with the force of winds and waters pent
When mountains tremble, those two massy pillars
With horrible convulsion to and fro
He tugged, he shook, till down they came, and drew

The whole roof after them with burst of thunder
Upon the heads of all who sat beneath,
Lords, ladies, captains, counsellors, or priests,
Their choice nobility and flower, not only
Of this, but each Philistian city round,
Met from all parts to solemnize this feast.
Samson, with these immixed, inevitably
Pulled down the same destruction on himself;
The vulgar only scaped, who stood without."—ll. 1629–59.

表現の巧拙は吾人の關する所にあらず、取材の警凡も亦吾人の論ぜざる所、吾人は只此敍記に對して間隔の辯(とくに時間的なる)をなせば足る。間隔の辯も亦他の批評の如く、讀過後の感得を基礎として起るが故に、吾人は此節に對する吾人が幻惑の程度を示して然る後其所以を究めざるべからず。先づ之を讀んで *Ivanhoe* に於けるが如く間隔上の幻惑を生ずるや否や。是を先決問題とす。他人の感得は余の揣摩し能はざる所なりと雖ども、若し余一個の意見を以て忌憚なく之を評し去れば此章にあらはれたる Milton の間隔的幻惑は Scott の夫に對して、いたく遜色ある

が如し。余は此一節を讀んで恰も盲詩人自からの口を通じて Samson の最期を聞くが如き感あるを免かれず。故に圖を以て此場合に於る間隔的幻惑を示すときは(記)—(著)—(讀)の價値以上に出づる能はざるを見る。讀者は此評價に於て余と同意せん事を要す。然らざれば余は批判の基礎を失ひて遂に一歩を進むる事能はざればなり。讀者もし余が評價に同意せるとき、余は更に詩句其ものの上に歸りて、此比較的に安價なる間隔的幻惑の出所はいづこにあるかを詮索すべし。之を詮索して先づ二點を得たり。(一)に曰く Samson の死狀は報道者の口によりて詳敍せらるゝに關せず、此節の三十餘行前に始まつて、最後の The vulgar only …… の句に至る迄一氣に進行して、中途に停留する事なし。抑も吾人が記事の當體たる Samson の死に接近して彼我の間隔をちゞめんが爲めには、篇中の人にして之を語るものなかるべからず、篇中の人にして又之を聽くものなかるべからざるは *Ivanhoe* の場合に徵して明かなり。然れども此二人は單に形式の爲めに存在すべからず。相當の責任を帶びて一定の義務を盡くす爲めに存在せざる可からず。一定の義務と云ひ責任と云ふは他なし。此二人が篇中に活動すとの證明を絕えず讀者に與へて、讀者をして、Samson の死を聞くは、作家より聞くにあらずして、篇中の一人より聞くなりとの記憶を繰り返さしむるにあり。之を繰り返さしむる爲めには、語るものと、聽くものとをして相互に問答を重ねしめざる可からず。之を重ぬるは(記事に關して云へば)彼等を活動せしむる唯一の法なりとす。も

し此方法を遺却する事あらんか、もし語るものをして幾度の反問に、說話の糸を遮ぎらるゝ事なくして、坦々の野に自轉車を驅るが如くに進行せしめんか、讀者は只記事の自然と曲折なく展開するを知るのみにして、遂に語るものあるを忘れ、又聽くものあるを忘れんとす。此兩者を忘るるときは、著者自から之を敍述するも、或は篇中の人物をして之を敍述せしむるも間隔に於て寸毫の異なるなきは睹易きの理なり。此故に間隔に於て短縮するものありとせば、吾人と Samson の死狀との間に存する間隔にして、吾人と報道者との間に存在する間隔にあらず。吾人と報道者との間隔を縮めて兩者の相合したる時、吾人は始めて記事の外圍中に入つて一種の幻惑を受くるを得るが故に、此間隔にして依然として舊の如くなる以上は、假令第一記事たる Samson の死狀に接近して、之を眼前に見る事を得るも、幻惑の程度は左迄に甚しからざるものとす。是 Milton の間隔的幻惑の安價なる第一の理由なり。

(二)に至つては時間に關聯し來るの點に於て實は此問題の主腦なり。曰く報道者の言は Samson の過去に於る死狀を說いて、現在に於る彼の壯烈なる最後を述ぶる事なし。過去を述ぶる事の現在を說くに比して時間的間隔に差違あるは論を待たず。間隔を現在に短縮して、如何なる效果を讀者の心頭に收め得るかを究めたる時、始めて余が先に此節に就て下したる間隔上の幻惑的價値を說明したるものと云ふべし。*Ivanhoe* の場合に於て、吾人の興味は第一記事を敍述する

Rebecca の上に尤も多く落下し來るは爭ふべからず。吾人は城壁下の戰況を聽かんと欲す、而して之を聽かしむるものは R. なるが故なり。然れども斯く解するは、戰況を聽かんが爲めに其方便たる R. に興味を寄するの意にして、目的として此佳人に留意するとは趣を異にす。之を第一の場合と定む。此場合に在つては記事其物が吾人の目的なるを以て、記事の面白ければ面白き程(他に關係なく)吾人は滿足の意を表するものとす。而して之を面白くする一方法として戰爭は現在に於て起らざる可からず。余は單に通俗なる修辭の一として數へられたる歷史的現在に附着せる普通の意義に於て之を主張するにあらず。單なる時間の短縮は、話材を事實に變じて活動の一睛を點ずるに於て、其功力の爭ふべからざるものあるは明なりと雖ども、此場合に於ける余の主張は、かく一般に認識せられたる功力以上のあるものを現在法に見留むるが故なり。現在法によりて逐次に展開する事件は讀者に對して未知數なるのみならず、之を話說する Rebecca にも亦未知數なり。單に Rebecca に對して未知數なるのみならず、事件の發展にして其期に達せざる限りは、運命と號する怪物の外天下又何人も知る能はざるなり。知る能はざるが故に、讀者の注意は勿論、Rebecca の全精神も亦局面の發展に傾瀉するは自然の理なり。未知數は不定なり。不定なるものは甲たらんも知るべからず、乙たらんも計りがたし。其結果の甲たり乙たるに於て吾人の興味に大なる影響を與ふるとき、話するものゝ全身は悉く眼なり。聽くものゝ全身は悉く耳

なり。運命の一子を下す毎に一喜し又一憂す。蓋し運命のわが期待する如く變ぜんかとの投機的希望に束縛せらるゝが故なり。Rebecca の眼下に起るは戰にあらずや、戰とは敵と味方とを意味し、敵と味方とは勝負を意味す。The Black Knight か、Front-de-Beuf か、是讀者の呼吸を凝らして知らんと欲するのみならず、Rebecca のまた張膽明目して知らんと欲する所のものなり。而して Rebecca のかく熱心なるは勝敗の數未だ定まらざる現在の光景なればなり。一分の發展する毎に、一分の結果をもたらし、一分の結果をもたらしつゝ發展し去る刻下の狀態なればなり。大勢既に定まつて往時を追懷して之を讀者に報ずるとき、報ずべき事の讀者に未知數なるは依然たらんも、報ずるものゝ胸中に在つては既に既知數に屬す。たとひ其事の如何に痛切なればとて、運命の賽に一六の判然と時の表に刻まれたる以上は、之を抹殺するの人力にあらざるを覺悟せざるべからず。此覺悟の前に過去を物語る意中は、現在を刻々に見つゝ、進みつゝ、語りつゝ行く Rebecca と情緒の强烈なる點に於て比較すべからず。Samson の死を報ずるものゝ態度は、既知數を報ずるの態度なるが故に、覺悟の態度にして豫期煩悶の態度にあらず。從つて此報ずるものゝ言語により當時を想像する讀者の神經は比較的緊張するを得ざるや論なし。以上は吾人讀者の興味が第一記事に集注せらるゝ場合の論なり。もし Rebecca を以て第一記事の報道者たる方便なるが故に吾人の利害に關係ありとせず、彼女自身が外圍中に浮沈旋轉するが故に讀者の心を

惹くと假定せんに、現在法の效果は一層の價値を加ふるが如し。此時に當つて吾人の主題は戰爭其物にあらずして、Rebecca の上に移る。從つて吾人の戰爭に對する興味は其影響の Rebecca を冒す點に於てのみ存すと云ふて可なるべし。勝負は比較的重要ならず。只勝負の Rebecca の上に反射し來つて、彼女が未來の生活の一部分を構成するが故に重要なり。此立脚地より見たる戰爭は過去なるべからず。もし過去に結了すと假定すれば其影響も定了なりと云はざる可からず。從つて其 Rebecca に及ぼす結果も亦定了にして動かすべからずと斷言し得べし。然れども既に結果の定了せる戰爭は、R. の未來に既知數として織り込まるゝが故に、其口より敍述せらるゝにも關はらず、句々の末に痛心苦慮の尾をひいて、吾人を前方に導き去る事なし。もし之を現在に變ぜんか、第一の場合に於けるが如く、未知數の孰れに向つて發展するかを氣遣ふの餘り、吾人は催眠術にかゝれる患者の如くに左右を顧みるの遑なくして前進す。これ第二の場合に於ても亦現在の過去にまさる所以なり。而して Milton の敍方に至つては、此兩立脚地より見て、等しく必要なる時間的間隔の短縮なし。是其感興の *Ivanhoe* に及ばざる所にして、かねて現在法の要用なる理由を說明するに足らんか。

余は現在法の效果につき其價値を定めんと欲して、例を *Samson Agonistes* に取れり。然れども其例は單に時間上の間隔のみに於て *Ivanhoe* と異なるにあらずして、他の間隔に於ても亦之と

同じからざるを發見せり。從つて現在法の價値に就て、當初に豫期せるが如く判明なる斷案を下す能はざりしは遺憾なり。只此解剖によりて時間的間隔のある場合に必要なるを讀者に示し得たりと信ず。

第五編　集合的F

吾人は吾人の意識中より文學的材料となり得べきもの、性質を限りて、幾多の例證に之を說明せり。次に此等の材料を彼此比較考量して、其特色より之を四種に分類せり。之を分類せる後是等の材料中に起る相互の關係を論述し、かねて表現の方法として彼此代用し、甲乙相合するの道を講じ、遂に表現より逆行して取材の領域に入れり。吾人は其中間に於て文學的材料の意識に上る事多き文學者のFを論じて、科學者のそれと對置せり。此編に詳論せんとするは、此記號Fの消息なりとす。

吾人は此編に於てFの差違を述べんとす。Fの差違とは時間の差違を含み、空間の差違を含み、個人と個人との間に起る差違を含み、一國民と他國民との間に起る差違を含み、又は古代と今代と、もしくは今代と豫想せられたる後代との差違をも含む。先に述べたる文學者と科學者との差違の如きは其一部分の研究に過ぎずして、しかも此一部分の研究の、とくに必要なりし爲め之を

前章に講述せるに過ぎず。

余は此編に於てFの差違を述べんと欲す。然れどもFの差違はかくの如く複雜にして多面多樣なり。從つて說いて遺漏なき能はず、論じて精細なる能はず。數苦を洿池に張つて有らん限りの魚鼈を捕へ盡す能はざるは明なり。但言はんと欲する所は文學の事なり。此故に說く所にして這裏の消息に觸れて、文運消長の理、騷壇流派の別、思潮漲落の趣を幾分か解釋し得れば足る。完きは之を後の君子に待つ。

余は此編に於てFの差違を述べんと欲す。頭を卷頭に回らして、Fの記憶を新たにして、再び研究の途に上るは輕率を戒しめて、天の未だ雨ふらざるに當つて門戶を綢繆するの意なり。讀者數言の重複に似たるを咎むるなかれ。一分時に於ける意識の內容は一曲の波を描いて高低す。其頂點は意識の尤も明かなるの所、吾人は心理學者の說に從つて、之に命名するに意識の焦點なる語を以てしたり。此焦點の記號としてFを用ゐ、同時にFの範圍を限つて認識的性質をのみ帶べるものと假定せり。故にFの單獨に起らずして、ある情緒を伴ひ來る時は、之に添ふるにfを以てして(F+f)の公式を得たり。文學的材料にして意識のうちにあらはるゝものは、ある情緒を有せざる可からずとの條件なるを以て、文學的Fは必ず(F+f)の公式を具ふとの結果を示したり。然れども(F+f)はFの一種なるを以て、單にFと云ふも、fを伴はずと附記せざる限りは文學的

Fを含むと見做すを妨げざるに似たり。吾人は一分時に於て得たるFを擴大して、一日、一夜、半歲、五十歲にわたつて吾人の意識を構成する大波動に應用して、個人に於ける一期一代の傾向を一字のFにあらはすの便宜なるを說けり。更に一代を橫に貫いて個人と個人との共有にかゝる思潮を綜合して其尤も强烈なる焦點を捕へて、之を一字のFに縮寫するの至當なるを說けり。此編に論ぜんとするは主として此集合Fの類別、推移、變遷に關す。而してとくに文學の範圍內に於てのみ行はるゝ理法にあらざるよりは、別に之を差別して文學に於る云々と云はず。例證する所又他の方面にわたるやも知るべからずと雖ども、文學的集合Fも亦其理法によつて支配せらるるを以て圓枘方鑿の矛盾を生ずる憂なきを信ず。且此集合的Fは個人の一分時に於るFの意義を擴大せるものに過ぎざるを以て、後者に關して云ひ得べき理法は特別の場合を除くの外移して以て前者に應用し得べきものとす。吾人時に例を後者にかりて前者の活動を無斷に說明する事あるべし。類推を一々にするの煩を厭へばなり。

第一章　一代に於る三種の集合的F

一代に於る集合意識を大別して三とす。模擬的意識、能才的意識、天才的意識是なり。こゝに

意識と云ふは意識の焦點(即ちF)なる事は言ふを待たず。而して此區別は內容の形質に就て此三種の間に存する關係より生ずるものにして、其內容の實質を列擧して得たる結果にあらず。實質は時代によりて推移しつゝあるを以て一期に卽して之を檢するにあらざるよりは說明すべきやうなし。

(一)模擬的意識とはわが焦點の容易に他に支配せらるゝを云ふ。支配せらるゝとは甲を去つて乙に移るに當つて、自然に他と步武を齊うし、去就を同じうするの謂に外ならず。要するに嗜好に於て、主義に於て、經驗に於て他を模倣して起るものとす。模倣は社會を構成するに膠油の如く必要なるものなり。もし社會に模倣の一性質を缺かんか、引力の大律に支配せられざる天體の如く、四分し五裂して糅然として須臾に瓦解す。此故に學者云ふ社會は模倣なりと。學者をして此言を爲さしむる程に吾人はしかく模倣を愛するものなり。Mantegazza 其著 *Physiognomy and Expression* (八四頁)に述べて曰く「稠人の中に在つて火あり、火あり、と叫べ、或は之に加ふるに手を擧げ目を搖かすの狀を以てして一散に走れ。第一の場合に在つて多數は步を停めて、其故を聞かん。第二の場合に在つては大衆われを制する事を忘れて聲に應じて走らん。動作は言語よりも器械的なり而して器械的に模倣を生ず。人もしわが言を疑はゞ、かの陰晴の未だ定まらざるに方つて、街頭に立つて卒爾に雨傘を開け、或は乘合馬車の中に坐してわが手を隱袋に插入して

車代を拂ふものゝ如くせよ。雨傘を開くもの、銅貨を探ぐるものゝ一二人に止まらざるを見るべし。是單に器械的勢力に制せられて他を模倣するに過ぎず」と。Mantegazza が動作に就て云へる事は、動作以外の複雜なる思想にも亦應用し得るは論を待たず。案ずるに吾人が一樣に此種の性質を有するは生存競爭の大理法に基づくもの、もし此點に於て水準以下の天賦を受くるときは社會に適合する所以の道に迷ふて、尋常の人事に失脚し去るの運命に遭遇す。嬰兒の生育は乳母の恩に待つある多きが如しと雖ども、嬰兒にして他を模するの性を缺かんか、遂に髫髮の齡に達せずして夭折する事多からん。食を三度に限るは模倣なり。寢を半夜に貪ぼるは模倣なり。起居禮あるも模倣なり。進退度あるも模倣なり。途に車を避け、市に馬を避けて、髮膚を毀傷せざるも模倣なり。模倣は斯の如く必要なり。大人の社會に生存して、不測の變を常時に招かざるは、其思想、行爲、言語の其社會に適合するを示すものなり。故に小兒の大人を模倣するは其社會に生存して適意なるの資格を製造すると一般なり。從つて吾人は他を模倣すべく自然の命を受けて此世に出現す。社會の存在は此模倣性の個人と個人の間に如何なる程度に運行しつゝあるかを證明して餘りありとす。

模倣は社會の成立と維持とを滿足ならしむる根本義に於て此の如く必要なり。吾人は生存上に必要なる模倣性を他の方面に應用して、こゝに第二義の模倣を敢てして憚からざるに至る。第

二義の模倣とは必要ならざるに、好奇の餘、他を模倣するを云ふ。たとへば小兒の父を模し、奴婢の主婦を模するが如し。ある場合に在つては病的なる嗜好をさへ模倣して、一世を擧げて悉く非常識ならしむる事あり。十九世紀の當初に勢を逞ふせる厭世的文學の潮流の如きは是なり。George Brandes 曰く「十九世紀の始めに起れる厭世觀は一種の病患の性質を帶ぶ。而して此病患は一國民中の一個人を冒すべき性質のものにあらずして、中世紀に於て、全歐に傳播せる宗教狂の如くなる流行病なり。Rene、は此病症の天稟の英才を冒せる尤も早くして尤も著るしき例に過ぎず」と。人もし之を以て模倣にあらずと云はゞ余は答へて云はん。普通の模倣は故意の模倣なり。此際に於る模倣は自然より命ぜられたる模倣なり。自己の意志以上のあるものに餘儀なくせられたる模倣なりと。

模倣は社會の凸凹を拂つて、平等の狀態に各員を揃へんと欲するもの、錯雜なる表面に一樣の觀を添へて、彼是相通じ、甲乙擇ぶ所なきの結果を生じて已む。此故に此意識に富むものは個人として他の目標を形づくる事なきが故に、生存上危險の處を冒す場合少なくして比較的安全の境に在り。此意識に富むものゝ多き社會は現狀を維持する上に於て尤も便宜を有するものなり。只從來の習慣に遵つて、父祖の遺業を守り、傳來の嗜好を再びして、隣里鄕黨の知己と進退し、去就し、好惡して頗る秩序の整然たるものあればなり。此意識に富むものは平常の場合に於て社會

の大多數を構成す。大多數なるが故に、數を以て論ずれば、尤も有力なり。單に數字の上に於てのみならず大抵は實力に於ても優勢なり。然れども翻つて創造力(Originality)の多寡を本位として此意識を評價すれば、其勢力頗る貧弱なりとす。通例の場合に於て、此種の意識に富めるものを稱して、平凡と云ひ庸俗と云ふ。只他を模擬して人と同じからん事を、是力むるが故なり。之を文學の上に限るとき、彼等は可もなく不可もなき詩人となり、小說家となる。人の歌ふ所を歌ひ、人の美とする所を美とし、人の詩と云ひ小說と云ふ所のものを詩とし小說とす。——模擬的集合Fの意此の如し。

(二)然れども模擬は模擬者と被模擬者とを對立して始めて使用し得べき言語なり。模擬者のFは(一)に於て其大意を述べたり。模擬者をして模擬せしめんが爲めには、之に其目的たるべきFを供給せざる可からず。此種のFは必ずしも同時代の人より傳授を受けて、意識の頂點に炳耀するにあらず、習慣も可なり、讀書も可なりと雖ども、遂に頭を一代のうちに鳩めて、同界の空氣を吐呑する儕輩より其所範を示さるゝ事なきにあらず。此種の積極的Fに名くるに如何なる稱呼を以てするの妥當なるかは余の知らざる所なれども、今假りに能才的Fの名を附して指示の便宜に供せんとす。

此種のFに就いて其實質を敍述せんは冒頭に云へるが如く頗る難事に屬す。彼等は吾人の一分

時に於けるFと同じく常に推移して一所に滯留する事なければなり。此故に彼等の實質を知らんと欲せば既與性の一時期を劃して其域内に於て、始めて具體的の説明をなすを得べし。即ち具體的なりと雖ども、既與性の一時期に限られて他に轉用しがたきが故に、時空二間を離れたる概論に於ては單に其形質よりして抽象的の説明をなすに過ぎず。

吾人の意識の特色は一分と、一時と、一年とに論なく朦朧たる識末に始まつて明晰なる頂點に達し、漸次に又茫漠の度を增して識末より識域に降下す。かくして一波動の曲線を完ふせる時、又以上の過程を繰り返して再度の一波動を描く。波動は生命の續く限り、社會の存する限り曲線を描いて停止する所なし。此故にFは必ず推移を意味す。(活動なきFを想像するとき、吾人は記憶の觀念を離れざるを得ず。只一Fにとゞまつて左右を顧み前後を連結する能はざるを以て、吾人とFとは合して一となる。而して其一たる事をすら認識する能はず。) 推移すべくFを相するとき、吾人は少なくとも連續せる三個のFの狀態としてaとbとcとを想像せざるを得ず。今一時代の集合意識(模擬的)を以てbにありとせば、之に先だてるaは識域の近傍にほのかに幽かなる影を存するに過ぎざるべし。同時に次に來るべきcの狀態は識域下より起つて漸次に此頂點を奪ふべく、冥々のうちに準備を整へつゝありと假定するを得べし。換言すればbは今意識の焦點を專領すれども、驕る平家の久しからざるに似て、早晩cに天位を讓るべき運命を有して焦點を

下らざるが如し。此故にbの傾向は漸次にcに變化しつゝ意識の内容を形づくつて進行す。此時に當つて天下大衆のFは大抵同方向に動くが故に、一歩早く動けるものは一歩早く大衆の到着地cに達するを得。二歩早く動けるものは二歩早く大衆の到着地cに到着す。能才的Fは大衆に先だつ事十歩二十歩にして、大衆の到着すべき次回の焦點に達し、顧みて大衆を麾くを常とす。後れたる大衆は後れたるを忌んで、半途に踵を回らして他の焦點に方向を轉ずる能はず。bの傾向として遲速を論ぜずcに推移せざる可からざる運命を有すればなり。譬へば品川に至るに電車と徒歩とを以てするが如し。品川に至らざる可からざるは條件なり。電車に及ばざるが故に品川に至らずと主張せば當初の條件を無視するのみ。此故に能才の意識的波動は一波動づゝ天下の公衆に先んずるを例とす。此波動の不竝行は時によりて自覺的に苦慮計畫の餘より出づる事なきにあらずと雖ども、多くの場合に於て身心の因果に束縛せられたるの意義に過ぎず。例へば講堂に講義を聽くに際し、講義の題目、講述の巧拙、堂外の天候、室内の空氣は一樣に學生を影響して、彼等をして倦厭の情を催ふさしむる事あるべし。此際に於て倦厭は一般聽講者の到着すべき必然の運命なれども、到着の遲速に至つては豫め計り知る可からず。最初に欠伸を意識する能材も、能材を欠伸の上に發揮せんが爲めに他の聽講者に先んじて、倦厭の波動を一順繰り越して、欠伸の意識を明かに焦點に安置するの理由なきなり。之と同じく最後に欠伸の番に中るもの亦必ずし

も凡材を以て甘んずるにあらず。欠伸の模擬さへ人後に立つを恥づるやも知るべからずと雖ども、如何せん機緣未だ熟せず、欠伸の悟りを開く能はざれば碌々として最終の嘲を受けざるを得ざるが如し。

能才的Fは模擬的Fの必ず到着すべき點に、模擬的Fより先に到着するが故に、數に於て後者に及ばざる事遠しと雖ども、漸次に之をわれに吸收するの點に於て、却つて後者に優る勢力を有するものとす。世俗此種の人物を評して、機を見るに敏なるの士となし、或は時勢を達觀するの才と云ふ。蓋し世評のうちには偶然に先だてるものと、有意に進めるものとを區別せざるが如し。而して前者の比較的に多きは猶更想到せざるが如し。日露戰爭のとき戰後工業の勃興を豫知して多大の株を買收して千萬圓の富を致せるものあり。是明かに、此種のFを有するものなり。只商賣上の事は、考慮計營の餘に成るのみならず、多くの危險を賭せざるべからざるが故に、詩人の詩を作り、文人の文を草するとは大に趣を異にするものあり。創作の士は趣味の上に立つ。趣味は思索にあらず。時好と流行と自己と相接觸して、一尊の芳醇自から胸裏に熟するとき、機に應じて馥郁を吐くのみ。而して自から知らざる事多し。若し内に酵釀する所なくんば、知を用ゐる事周到、計をめぐらす事綿密、企畫悉く有理にして、以て天下の好尚に先んぜんと欲するも、知の命ずる所に向つて筆を走らし、計の定むる邊にあたつて句を着する事難きが故に遂に失敗に終

るは明かなり。能才的Fにして文壇に成功せるもの古來擧げて數ふべからず。Byronは一朝睡眼を摩して臥床に、わが知名の士なるを發見せり。Kiplingの印度の小話によつて名を得たるも此類なり。(かの有名なるMarie Corelliの文界に勢力あるが如きは大に之と趣を異にす。其勢力あるは一般の集合F、卽ち模擬的意識を有するものを讀者として多數の歡迎を受くるに過ぎず。此故に讀者愈多くして其作愈庸俗なり。)

(三)第三の意識を名けて天才的Fと云ふ。もし實質に就て天才のFと能才のFを區別せよと命ぜられたる時、何人も之を明瞭に定め得るものなかるべし。只余は以下の形質を帶ぶるものを一括して之に名づくるに天才的Fの稱を以てしたるのみ。(讀者能才と天才の用語に拘泥して無用の葛藤を胸裏に描くなくんば可なり。)

能才的Fの社會に歡迎せられて成功の桂冠に其頭を飾るに反して天才的Fは聲譽を俗流に擅にする能はざるのみならず、時としては一代の好尚と相反馳して、互に容るゝ事能はざるの不幸に會す。大聲は俚耳に入らずと云ひ、豚兒に眞珠を拋つと云ひ、馬耳に東風と云ふ。皆天才的Fの庸衆と迥かに其撰を異にせるを示せるものなり。吾人は再び焦點意識の波動說に歸つて、此種のFの他と竝馳せざる所以を究めざるべからず。

模擬的意識のFに留まつて咫尺の先を闇黑に控へたる時に當つて、能才の腦裏には、Fの將に

推移すべき次期のF′を胚胎しつゝあるは前節に述べたるが如し。今能才がF′を豫想しつゝあるに當つて、既にF′を焦點に意識するものありとせば此人は能才よりも一歩の早きに時勢を覺知するものなり。啻にF′を意識するのみならず、次期のF″を豫想し、豫想するのみならず之を意識し、更に進んでF‴に及び、――F‴に安んぜずしてF⁗に至り、遂にFⁿに行き得るものありとせば、此人は多數の民衆がFに固定せる間に、少數の能才がF′を豫想しつゝある間に、既に幾多の波動を乘り超えてFⁿに跳け拔けたるものなり。FⁿはFの早晩達すべき驛路なるは云ふを待たずと雖ども、現在のFを有する多數より判斷すれば、其間隔の餘りに遠きが爲めに、其現在意識の周圍を四顧してFⁿの影を認むる事能はざるを以て、之を評價する能はざるのみならず、且つ之を排斥せんとす。同類は相聚つて得意なり。同類中にあつて尤も緣故の遠きものより疎外し驅逐せんとの賦性を有すればなり。天才的Fの失敗と壓迫とを事實として、之を焦點意識の理論によりて解せんとする時、此說明を以て說明の一方法とするも可なるに似たり。此說明によつて吾人の得たる凡人と天才との差違は下の如し。――凡人と天才とはFを意識するの遲速によつて決す。――凡人と天才との距離は、FとFⁿとの間隔なり。Fは自然の流に沿ふて自からFⁿに至るべき傾向を有するが故に、其質に於て兩者の差違を定むる事能はず。此故に凡人と天才との差違は其意識する內容の質にあらずして其先後なり。但し先後は質に關係なきにあらざるが故に、もし嚴密なる言語を

以て之を正せば、波動を生ずる時の影響より起る、(而して他の源因より起るにあらざる)意識の內容の差違なり。例へば一人の幼時と壯時との差違の如し。一人に就て云ふが故に兩者は同物なり、然れども一定の時を經過せざれば幼年は壯年に達する事能はざるが故に、兩者は、時の支配を受くる點より見て、異物なり。而して少年に示すに、其少年が二十年の後必ず到着すべき體軀容姿の寫眞を以てするも、其距離のあまりに遠きが故に、自己を見て、自己を認識せざるのみならず、却つて之を憎まんとするが、凡人の天才に對する態度なり。(此解釋より見たる)

吾人は此解釋を以て不當なりと信ぜず。然れども之を以て唯一の解釋なりと主張する能はざるなり。凡人と天才の差は焦點意識の原理より論じて、猶二樣の解釋を容るゝの餘地あるが如し。前節の解釋を以てするときは、天才の意識波動は、一般の推移と只其stageを異にするのみにして、推移の過程と順序に至つては毫も矛盾せざるのみか、よく合致して戾らざるものなり。然れども吾人は此解釋を許すと共に、又かく想像するの自由なるを信ず。

(い)天才の意識焦點中には他人に見出し能はざる一個の核となづくべきものありて、此焦點たるFの主腦となる。此主腦の如何にして發現し又如何にして現在の狀態にあるかは吾人の論ずる所にあらず。只吾人の云はんと欲する所は此核の存在なり。核の存在を假定したる後、吾人は再び云ふ。天才のFも常人の如く推移して不斷の波動を構成す。只此波動の起伏を一曲折の短かきに

切斷して、其焦點を檢するとき吾人は常に特殊の現象に際會す。特殊の現象とは、いづれの焦點中にも此核の織素として其地位を保持するを云ふなり。此に於てFのF′に移り、F′のF″に變ずるの點に於て常人と異なる所なき焦點は、只一個の核の存在の爲めに、いづれの焦點に於ても常人と異なるの奇觀を呈するに至る。而して此核は數學に所謂恆數(constant)にして、其量と質に於て、終始一貫して數多の焦點を影響し去るを以て、他と同じかるべき焦點は、此一核の爲めに隨時隨處に他と同じからざるの結果を生ずるのみならず、雜駁にして收束なきFの變化に一種の統一を與ふ。

前項に述べたる天才の、千里の遠きを視、千里の外を聽くが爲めに凡人と異なるに反して、此種の解釋に從へば、天才はいづれの場合、いづれの時にも會釋遠慮なくして、此自己に特有なる核を以て見、核を以て聞くが爲めに凡人と異なるに至る。而して此核は恆數なるを以て造次顚沛の際にも彼の意識を離るゝ能はざるが故に、常見と反し、常識と戻る場合にも、其反戻を顧慮するの遑なきうちに、核の影響は既に一般Fを變化して自家特有のFを生ず。しかも是を以て普通に共通ならざる可からざるFと思惟する事往々なり。是に於てか彼等は時に流俗の怒を招き又其嘲笑を買ふ。或は其特色の一種の神經病者と似たるを以て、屢彼此混同の厄に逢ふ。古より偉大なる系統は常に零碎の事實をあつめて成る。常人の意識は煩瑣なる現象の繽紛として去來するに

任せて、朝三暮四の活計に耳目の生命を託す。此故に色相に驅役せられ、物華に浮沈して旋回流轉し了るに過ぎず。日々に逢ふ所千緒萬端なるに關はらず、其千緒萬端なるに任せて雜然として明滅す。かの絡繹たるものは遂に是鏡裏に車馬行人を寫すと異なるなし。只此一個の核を拈定して金輪際に動かざるものは、此核の形に應じ、此核の質に隨つて、かの浮游限りなきの塵埃をあつめて、あるひは一元の會をなし、あるひは二元の會をなし、あるひは萬有皆神の會をなし、或は物質不滅の會をなし、或は樂天の會をなし、或は悲觀の會をなす。此會をなして天地を貫くとき、人生を斷ずるとき、耳目に觸るゝ所は常人と異なるなくして、しかも其意識する所は迥然として常人と趣を異にす。角を以て核となすものあり。枡を以て角となし、硯を以て角となすのみならず、盆を以て角となし、月を以て角となし、日を以て角となさずんば已まず。彼等の解釋は悉く角なる核に支配せらるゝが故なり。彼等は事毎に角より出立すればなり。彼等は圓を以て角の變體となすが故なり。三角を以て四角の一邊を失へるものと觀ずればなり。菱形を以て角度の狂へる角と思惟するが故なり。かくの如くにして天下は悉く角より成立せざるものなし。三を以て核となすものあり。彼等の云ふ所を聞けば天地は人と合して三體をなす。現在は過去、未來を併せて三世をなす。日は夜を餘し、歳は冬を餘し、時は雨を餘して三餘となす。單に是のみならず、一は三より二を減じたるものなり、四は三に一を加へたるものなり。かくの如くにして宇宙は三

を以て成立せざるものなし。孝子は飴を見て親を養はんと欲す、是其核の親に存するが故なり、丐兒は飴を得て錢を釣らんと欲す。是其核の錢に在ればなり。Falstaff は滑稽の核を有して天地を横斷するものなり。Don Quixote は騎士の核を有して一生を縱貫するものなり。Darwin は進化の核を有して鳥獸を見、妻子を見、かねて天子を見るものなり。蕪村は俳句の核を有して、日月を見、星辰を見、奴婢を見、又王侯を見るものなり。彼等は意識毎に此核を以て主腦とす。此故に意識は一波に起り一波に滅して、しかも其内容は凡人と異なるなきにも關はらず、常に此核の影響を受けて一種の特色を生ず。此特色あるが爲めに、常人の威嚴を感ずる所に於て喙笑を感じ、常人の尊敬を拂ふ所に於て侮蔑を拂ひ、常人の不可思議とする所に於て可思議と斷ず。此故に天才に世俗と相容れざるの意識あるは此核の存在に起因すと假定するも不可なきが如し。

(ろ)再び意識焦點の辯に歸つて第三の說明を下す事下の如し。常人の意識は常人を支配する源因によりてFよりF′に、F′よりF″に推移して窮極する所なし。天才の意識は常人を支配する源因によらずしてFよりAに、AよりBに推移して窮極する所なし。之を解說せんには先づ天才と常人とが共通なるFを波動の頂點に戴だく事ありと假定して、其別途に分岐して進行する樣子を探究するを便宜とす。

常人の意識が一定時の間Fにとゞまるの後、遂にF′に移るにあたつて、ある個人の意識は常人

と共に推遷する事を諾んぜず、普通以上の時間之に停住して、又他を顧みざる事あり。其何が故に此遲速を生ずるやは今論述するを要せず。思ふに他の移らんとするを我一人移らずと主張するは(故意に主張するにあらず。自然に命ぜられて主張するなり)焦點たる刻下のFが、とくに此人に於て比較的强烈なるを證明するものと云はざる可からず。强烈なるFを意識して、他の刺擊に應ぜざる程に心を奪はるゝときは、普通の場合に於て、此强烈なるFの識末に降下するを待つて、他人の後塵を追ふて、遲刻を憚からずF′に赴くものにあらず。如何となればFの强烈なれば程、彼は此Fに於て他の見る能はざるものを見、他の聞き能はざるものを聞き、もしくは他の感ずる能はざるものを感じ或は他の考ふる能はざるものを考へ得るの傾向を有すればなり。故にもし此個人にしてFより他に移るべき機會を生ずるときは其傾向は普通人の既に移りたるF′にあらずして、却つて是と趣を異にせるAなるに近し。而してAは、Fを强く意識せるの結果として次回の波動にあらはるゝものなるが故に、特殊の源因なき限りは、Fの外部より來らずして反つてFの中より發現すと斷じ得べし。Fの内部より發現し來るとせば、Fと無關係の或物にあらずして、Fの一部なるも、前回の波動には比較的明瞭に意識せられざりしものに外ならざるべし。之をFの一部と云ふも可なり、或はFの屬性と云ふも可なり、又はFの屬性と屬性との關係と云ふも可なり。

常人の意識がFよりF′に行くに反して、ある個人の意識がFよりAに行くは之を説明せり。而してAの性質も亦之を説明せり。今Aに在る意識の再びBに行くを、Bに在る意識の又Cに去るを、前項に述べたる意義に於て、又前項に述べたる關係に於てするとき、吾人は此個人の意識焦點の連續と常人の意識焦點の連續とは只一のFを共通に有するのみにて、波動を重ぬるに從つて互に分岐するを見るべし。而して常人の意識はFを平面的に離れ、この個人の意識はFを立體的に離るゝと云ひ得べし。平面的とはFに執着せざるが故に、外界の機緣に應じて散漫を厭はず、外部に向つて波動を延長するを云ふ。立體的とはFに執着するが故にFの内面に新焦點を發見し、其新焦點内に又新焦點を發見して、Fを穿つて深く波動を下層に徹せしむるを云ふ。

此二種の延長法を許す時、吾人は前者の多く素人と云へる大部分の間に行はれ、後者の多く黒人と名づくる藝術家、專門學者等のうちに行はるゝを見る。而して此延長法のある程度を超えて黒人の域にとゞまらざるに至るとき、歩を進めて云へばFの内面に波動を擴ぐるのみにて、決して、外部に焦點を求めざるとき、即ち彼等が狹隘にして深奥なる、綿密にして周到なる智識と情緒をある專攻の題目に有して、其他の人事天然に全く無頓着なるとき、吾人は明かに一種の畸形兒にして且つ天才なる一人物を豫想し得べし。此一人物は天才なると同時に畸形兒たるが故に世間の習慣を解せず、俗流の禮義に嫺はず。或は普通一般の道德心をさへ有せず。爲めに社會の大

多數の忌む所となるなきを保せず。

高等なる專門學者にして毫も氣韻の尊むべきなきものあり。有名なる藝術家にして毫も正義を重んぜざるものあり。是等は皆天才たるの榮を有すると共に畸形兒たるの業を享けて此世に生れたるものなり。彼等は既に畸形兒たるの犧牲を敢てして内部に其Fを擴張するが故に其專門の學科もしくは技藝に於ては鋭敏なる事凡人の百千倍に達す。或人曰く Titian は尋常人の一色を認むる所に於て、既に百色を鑒別すと。之を專修の功と云ふ。是等は尤も榮譽あるの一例なり。もし夫れ專門とする所にして何等の取るべきなくして徒らに其道に天才なるは、只に天才たるの不名譽なるのみならず、併せて畸形兒たるの醜を一代にかゞやかすものなり。彼の實業家にして專一に利を射るの天才あり。偸盗の天才あり。瞞着の天才あり。金力を濫用し、もしくは權勢を濫用して貧弱を迫害せんと欲するの天才あり。之を稱して有害無益の天才と云ふ。有害無益の天才は賠償すべき功德を有せずして、毒を社會に流すを以て目的とするに均しき天才なるのみならず、他の尊むべき天才と共に、畸形兒たるの弊をかねたるを以て、之を撲殺して狂犬の如く坑内に投ずるは全社會の責任なり。

余は焦點意識の説に本いて、一見不可思議なる天才的Fに對して三樣の説明を呈出せり。三樣のうち何れを以て正當の解釋となすべきか、又は三樣共に存すべきか遂に之を知らずと雖ども、

余の解釋は此三樣の外に出づる能はざるを以て、こゝに天才の說明を終る。

模擬の意識と、能才の意識と、天才の意識とは、一代に於る各階級に通じて行はるべき三大區劃なり。但し此區劃は便宜の爲めに設けたるに過ぎざるを以て、之を事實に驗するときは、吾人のかくの如く截然たる範疇內に蟄居して、かつて門牆外に逸出する事なき器械的の生活を營まざるを發見するは無論なり。模擬と能才の中間には兩者の雜種と見做すべき一族を數ふるを得べく、能才と天才との中間にも亦兩者の混血兒を擧ぐるを得べし。かくの如くにして三を分つて五となし、五を割いて九となし、九を縮めて十七となし、層々區劃の領域を狹むる時、此三種の意識は明確なる段落を構成する事なく、墨を暈して白紙に熨貼するに似て、分明に異同を辨ずるの必要なく、甲は流れて乙に入り、乙は融けて丙に和するに至る。而して文學者は社會階級の一として數ふるを得るが故に、彼等も亦此意識の特性を享有して、各三種の間に一點の地步を占めて介在するは明かなり。（諸君若しFの發育する過程を知らんと欲せば Baldwin の *Social and Ethical Interpretations in Mental Development* を參考すべく、又實例に就て天才の風貌を窺はんと欲するものは Lombroso の *The Men of Genius* を繙くべし。Gustave Le Bon の *The Psychology of Socialism* は通俗にして學說の深奧なるものなしと雖ども集合せる人心の活動狀態を知るに便宜あるを以て通讀するを可とす。）

最後に三種の意識に總括的評論を下して曰く

(一)模擬の意識は數に於て尤も優勢なり。故に利害の關係上尤も安全なり。但し獨創的價値を云へば殆んど皆無なり。從つて赫々の名なくして草木と同じく泯滅す。

(二)能才の意識は數に於て、(一)に劣る事多し。然れども其特性として、(一)の到着地を豫想して一波動の先驅者たるの功あるを以て、概して社會の寵兒たり。利害より論ずれば固より安全なり。但し其特色は獨創的と云はんよりは寧ろ機敏と評するを可とす。機敏とは遲速の辯に過ぎざるを以て、遲速以外に社會に影響を與ふる能はざるを例とす。通俗の語を以て此種の人を品すれば才子と云ふが尤も適當なるべし。世俗時に才子を誤つて天才となすは一時の成功に眩せられて其實質を解剖する能はざるに由る。

(三)天才の意識は數に於て遠く前二者に及ばず。且つ其特色の突飛なるを以て危險の虞最も多し。多くの場合に於て其成熟の期に達せざるにあたつて早く既に俗物の蹂躪する所となる。（而も此俗物は天才を謳歌すると自稱するものなり。此俗物は歷史的に古昔より傳來せる天才を謳歌して、何が故に今世に天才は出現せざるや、出現せざるやと問ふの傍ら、常に幾多の天才を足下に踏み潰して悔ゆる事なし。是俗物なる所以なり。）然れども天才の意識は非常に强烈なるを常態とするを以て、世俗と衝突して、夭折するにあらざるよりは、其所思を實現せずんば已まず。此點よ

り見て天才は尤も頑愚なるものなり。もし其一念の實現せられて、たま〳〵其獨創的價値の社會に認めらるゝや、先の頑愚なるもの變じて偉烈なる人格となり、頑愚の頭より赫灼の光を放つに至る。而も彼自身は偉烈に關せず、頑愚に關せず、只自己の强烈なる意識に左右せられて之を實現するのみ。故に天才の自己を實現するを忌まば忠告するなかれ、反對する勿れ、嘲罵するなかれ、無用の勞を徒費するなかれ。只不意に起つて之を撲殺すべし。日蓮を忌まば日蓮を殺すを以て上策とす、耶蘇を忌まば耶蘇を磔するを以て上策とす。陳蔡の野に困したる孔子は遂に道を失ふ事なく、退學を命ぜられたるShelleyは無神論を翻へす可からず。彼等をして只世俗の云ふ所に從つて去來進退せしめば其天才たる果していづれの點に存せん。

第二章　意識推移の原則

一時代の意識を横斷して、類別せる三種に形質上の說明を與へたるは第一章に於るが如し。一時代の集合意識が如何なる方向に變化して、如何なる法則に支配せらるゝかを論ずるは此章の目的なり。

(一)一時代に於る集合意識の播布は暗示の法則に由つて支配せらる。暗示とは感覺と云はず、觀

念と云はず、意志と云はず、進んで複雜なる情操に至つて、甲の乙に傳播して之を踏襲せしむる一種の方法を云ふ。暗示法の尤も强烈なる證明は被催眠者に於て之を見る事を得。彼等に向つて水を熱しと云へば、冰甌を抱いて、沸湯を盛るが如くに苦悶す。羽毛の輕きを掌上に載せて、其重からん事を暗示すれば、九鼎を支へて堪ゆる能はざるが如きの觀をなす。是人の普く知る所、斯道の書、例を擧ぐる事審なれば辯明を費やすの必要なし。常態に住するの人亦往々にして此の如きの暗示を受くる事あるも事實なるが如し。或醫師の報告によるに甞て神經質なる一女子に手術を施こすの必要ありて、麻睡劑を用ゐるの準備として假面を被らしめたるに、未だ藥を致さゞるに既に昏睡の狀に陷つて知覺を失へりと云へり。是常人にして尤も暗示を受け易きものなり。特殊の例外を除いて、一般の人に就て云へば、小兒は其最たるもの、女子之に次ぐに似たり。普通の男子にあつては大に其度を減ずるが如しと雖ども、其存在は爭ふべからず。Pascal曰く吾人他を呼んで愚人なりと云ふ事屢なれば、單に屢なる丈にて、他をして自己を愚人なりと思はしむるに足る。他をして吾は愚人なりと自己に告げしむる丈にて、自己を愚人なりと信ぜしむるに足る。人は斯く造られたるものなりと。

以上は暗示の方法によつて想像世界に事實を創造せしむる特別の場合に過ぎずと雖ども、吾人をして暗示の意義を少しく布衍するを得せしむれば、日常の場合に於ける日常人も亦不斷に暗示

を受けて、其意識を變化しつゝありと云ふを妨げざるに似たり。

之を説明するに吾人は再び焦點波動の辯に歸つてFのF′に推移するの狀を考へざるべからず。專門家ならざる余の、かゝる問題に入るは、好んで水際を離れて轍下に喩喝する鮒魚に似たりと雖ども、全章の主意に關係あるを以て、門外漢の理論として、卑見を述ぶるの必要を認む。吾人がFを焦點に意識する時、之に應ずる腦の狀態はCに在りと假定し得べし。而してFのF′に推移するとき、Cも亦之に應じてC′に推移するは疑ふべからず。意識は區分して微塵の細に至るとも、遂に腦裏の物質的狀態に變ずる能はざるは勿論なりと雖ども、兩者の關係は、如何なる精密の變化をも相應作用にて、互に説明しつゝありとするは當然と云はんよりは必然の假定なればなり。果して然らばCはC′を生ずる一の條件にして、而してC′はF′に相應する腦の狀態なるが故に、Cは又F′を生ずる一の條件なり。而してCは何等の刺激(內、外)なくしてC′に移るの理由なきが故に、F′を生ずる必要條件はCとS(刺激)とに歸着すべし。(刺激と云ふが不穩當ならば他の語を代用するを妨げず。)此Sの性質は未定なれども、之を一に限るの不合理なるを以て、種々なりと推定す。强弱の度に於て、性質の差に於て一樣ならざるSがCを冒すときは、何れの場合に於てもCは一樣なる難易の度を以てSに反動するの理なし。あるSに應ずる事は速かに且つ强く、あるSに應ずる事は遲く且鈍き事あるべし。是に於てかCを以てそれ自身に於て斷然たる特殊の傾

向を有するものと見做すは已を得ざるの結論なり。斷然たる特殊の傾向を有するCにして二個以上のSに選擇の自由を有するときは、第一に尤も其傾向に都合よきSを迎へて、之と抱合してC′を構成し、C′を構成したるの結果としてF′を意識するに至るべきは必然の理なり。而して吾人が此現象世界に住して、身體臟器の活動を支持する以上は、此Sは外部より內部より種々なる形を以て刻々にCを冒さんとするは明かなるを以て、CがC′に推移する迄には幾多のSを却下せざるべからず。幾多のSが却下せられたるとき、尤もCの傾向に適したる幸福なるSはCを抱いてC′を生ず。此過程を意識に關したる語に翻譯すれば、FのF′に推移する場合には普通Sの競爭を經ざるべからずと云ふ意義となる。而して此Sさへも意識的內容を有する方面より見るを得るが故に、上の命題はFのF′に推移する場合には普通幾多のⒻの競爭を經ざるべからずと變ずるを得。Ⓕとは焦點に存在するものゝ意味を有せず、識末もしくは識域下にあるものをかね稱す。かくの如くFのF′に移るには幾多のⒻより申し込を得て、其うちより尤も優勢なるものもしくはFの傾向に適したるものを採用するが故に、此意味に於て吾人の意識焦點の推移は暗示法に支配せらると云ひ得べきに似たり。如何となればF′は突然としてFを追ふて、焦點に上るものにあらず、吾人が明瞭に之を意識する前既に幽かに暗示せらるゝが故なり。

(二)吾人はCの傾向を假定し、又Sの强弱を假定したり。又Sの性質に差違あるべきを假定した

り。Cの傾向を假定すると同時にFの傾向をも假定せざるを得ず。Sの性質の差違と強弱の程度を假定すると同時にF′に就ても同樣の假定を下さざるべからず。此等の假定より出立して吾人は二三の演繹を得べく、而して其演繹する所はたゞに日常の經驗に徵して事實なるのみならず、其範圍を狹く文學に限つて其應用を檢するときは頗る興味ある結論を得るが如し。

(い)有力なるSを加へざるときは、Fは自己の有する自然の傾向に隨つてF′に移る。而して自然の傾向とは經驗の度を尤も多く重ねたる順序に從つて、經驗の度を尤も多く重ねて自己に追陪せるF′に移ると云ふに過ぎず。換言すれば吾人の意識推移は習慣の結果によつて連結せられたる內容を、習慣の結果によつて得たる秩序に排列しつゝ進行して、之を繰り返すを常とするものなり。例へば一輛の人力車が吾人の焦點に上るとき、吾人は習慣の結果として次には車夫を焦點に置くが如し。而して普通人民の意識は常態に於て特別なるSを受くる事なきが故に、大抵は此自然の傾向に從つて推移するに過ぎず。此點に於て彼等の意識は模擬的に出立して約束的に進歩するものと云ふべし。模擬的意識と約束的意識とは其內容と順序に於て一致する事多きが故に一を以て他に代用するを妨げざるに似たり。之を文學に應用して說明するとき其例證は擧げて數ふべからず。「鳥が鳴く」の後には必ず「東の空」を思ひ浮べざる可からずと思惟するものあり。「此日や」と云ふとき必ず「天氣晴朗」を隨伴するが如し。後段に至つて再び此問題に觸るゝ事あるべ

し。

(ろ)Fが自己の傾向に從つて尤も容易にF′に至る場合は(い)なりと雖ども、然らざる場合に在つては尤も抵抗力少なきF′を擇んで之に移るを常とす。卽ち多き暗示のうち、自己の傾向を害する度の烈しからざるF′を擇んで之に焦點を讓るとの意なり。自己の傾向を害する度の烈しからざるものは、其性質のある部分に於て、自己と接觸するものなるべしとは當然の推論なるが故に、Fの移るべきF′は何等かの點に於てFと類似せるものなるべしと豫想するの誤りならざるを知る。(かの能才的意識と模擬的意識の關係は(い)と(ろ)の關係に似たるは讀者の認むる所なるべし。) FとF′が類似するの推移に便なるを知るとき、吾人の先に述べたる文學的手段と號するものゝ、何が故に必要にして、何が故に作家の腦裏に浮び、何が故に讀者に快感を與ふるかの問題は自から解釋せらるゝを見るべし。吾人は文學的手段として首に四種の聯想法を述べたり。而して其特性を檢するに一種のF′を藉り來つて旣與性のFを說明せるに過ぎず。說明とは如何なるFの部分を說明するものなりやを知らずと雖ども、之を說明し得る以上はF′なる材料の、ある意味に於てFに類似せるは疑ふべからず。類似する以上はFの傾向に對して抵抗力の少なくして、Fの尤も推移し易き狀態の一ならざるべからず。是に於てか吾人が此等の手段に訴ふるの意義は單にFにF′を加へて其效果を大ならしむるのみにとゞまらずして、推移に便なるが故に之に順次に排列せりとも

云ひ得べきなり。(第四種の聯想法は音便に因つて排列せらるゝのみなるを以て、其效果は性質に於て前三者と大に趣を異にするは先に述べたるが如しと雖ども、單に推移の便(ある意味に於て)より云へば之を例外とする必要なしとす。) 四種の聯想法に於て云ひ得べき事は調和法にも假對法にも、多少の變更を以て、應用し得べきが故に略す。吾人は是に於て一の結論に達す。結論に曰くFの推移は突飛なるべからず、次第なるを便利とす。此結論の如何に時勢の消長を支配するかは後段に例證する所あるべし。

(は)Fに一定の傾向あるとき、全然此傾向に從つて(い)の發展をなす能はず、又は幾分か此傾向を滿足せしめて(ろ)の發展をなす能はずして、無關係なる、もしくは性質に於て反對なるF′に推移する事ありとせんに、此F′はFの傾向を無視するの點に於て、しかく强烈ならざる可からず。然らずんばFの發展遞次に巡行して其勢の自から消耗するを待たざる可からず。(一)の場合を想像するに常住坐臥の際、談笑歡樂の時、試みにわが意識の連續せる波動をとつて檢すれば、朝を夕を其例は得るに難からず。其(い)もしくは(ろ)に比して孰れが多きかに至つては固より個人の資性に待つ事大なりと雖ども、身心の活動に富めるものは老朽退嬰の人に比して比較的此種の推移を敢てするが如し。而して此推移の前後を構成するF及びF′に卽して云ふとき、其一般に共通にして何人をも支配すべきはFとF′とがある意味に於て對照せる場合とす。他の點を同じと見るときF′F″F‴

……F中に在つて尤も强烈なる刺激を與ふるものはFと對照を構成するF′ならざるべからざるが故なり。(ろ)に在つては類似の性質を帶ぶるが爲めFの傾向に逆ふ事なくして焦點に上れるもの、此場合に在つては全く其趣を異にして、之と對照の性質を帶ぶるが爲め——其刺激の尤も著るしきが爲め——Fを不意に襲ふて、其根據を領しF′となるに至る。一代時運の推移に於ける此種の消長は暫らく云はず、しばらく文學中に於て卑近の例を擧げて之を證するは余の責任なり。余は(ろ)の場合を說明するに四種の聯想法及び調和法を用ゐたり。今(は)の場合を解釋するに、同じく、余の所謂文學的手段のあるものを擧げて之を例するは、兩者の關係を知るの點に於て讀者の便宜なるを信ず。余は文學的手段の第六として對置法を說き、對置法を分つて强勢法、緩和法、假對法、不對法の四種を區別せり。假對法は(ろ)に屬するを以て玆に論ずるの要なしと雖ども、强勢法及び不對法(殊に强勢法)に至つては、全く此推移法に基きたる手段に外ならずと云ふも不可なきが如し。强勢法の主意はFの後にF′を置いて、對照によりて後者の價値を大ならしむるを目的とすと雖ども、其價値を大ならしむる所以のものは其刺激の强きが爲めにあらずんばあらず、而して其刺激の强きはF′のFを壓倒する源因ならずんばあらず。換言すればFのF′に推移するに便宜なる源因なりと云はざるべからず。不對法に至つては多少其趣を異にすと雖ども大體に於て同樣の論旨を以て評釋し得べきが故に煩を避けて贅せず。(二)の場合は嚴密に論ずるとき問題とならざ

るが如し。如何となれば無關係なるもしくは反對なるF′の、Fに代らんとするとき、Fの發展遞次に巡行して其勢力の自から消耗するを待つべしとの假定なればなり。Fの發展遞次に巡行すとはFのAたりBたるを意味するが故に、FのF′に推移する中間には幾多のA、B、……の横はるありて兩者を直接の推移と見做し難ければなり。然れども少しく觀察點を變じて、之を他方より解するとき、事實として此場合は吾人の思考に價するものとす。Fが自己を消耗すると假定する以上はFの推移を意味するに似たりと雖ども、Fは依然として焦點を動かざるに、F′は徐々と識域下より識末に出で、識末より漸次に焦點に向つて上りつゝあると假定すれば、兩者の關係は結果より見て同一なりと云ふを得べし。禪に頓悟なるものあり、其說をきくに自から悟に近きつゝ、自から知らず、多年修養の功、一朝機緣の熟するに逢ふて、俄然として乾坤を新たにすと。此種の現象は禪に限るにあらず。吾人の日常生活に於て多く遭遇し得るの狀態ならざるべからず。(吾人はとくに禪に於て此特別の權利を附與するの理由を認めざるが故に。) 只變化の至る迄内に昂騰しつゝある新意識を自覺する能はざるが故に此種の推移に逢へば之を突然と云ふ。表面は突然なり。去れども内實は次第なり。徐々の推移なり。一代の時勢に卽て此種の推移を名づけて反動と云ふ。此解釋に從へば反動は突然なるものにあらずして次第ならざる可からざるものなり。時勢として見たるFの推移は今詳論するの要なし。先例に從つて文界の一局部にあらはるゝ現象を

以て之を例せんに、先に文學的手段として述べたる對置法中の緩和法は略此種の推移をあらはすものなり。緩和法はFにF′を加へて前者の勢を削ぐに外ならず。勢を削ぐはFの過重なるを示す(Fの動かざるとき)若しくはFの極度なるを示す(Fの動くとき)。Fの過重なるときは之に對照するF′は急速度を以て次第に焦點にせまり、Fの極度なるときは之に對照せるF′は其度に應じて次第に焦點にせまるが故に、Fの自己を消耗するの結果に至つては同一なりとす。是に於て緩和法は單に緩和の效果を有するのみならず、Fの推移上尤も便利なる組織の一となる。

余は集合意識の推移を究めんと欲して、先づ其基礎たるべき波動の原則に歸つて其推移の法則を明らめ、且つ之を證するに余が所謂文學的手段を以てしたり。而して余の擧げたる表現法は悉く之をこゝに應用し得るを發見せり。但し最後の寫實法に至つてはFを說明するにF′を以てする——兩材料を合して成る——方法にあらざるを以て、遂に之を利用するの機なかりき。推移とは少なくともFとF′の二狀態を得ざれば論ずる能はざる題目なるが故なり。

此章に於て吾人の得たる推移の法則を一括すれば左の如し。

(一)吾人意識の推移は暗示法に因つて支配せらる。

(二)吾人意識の推移は普通の場合に於て數多のⓕの競爭を經。(ある時はFとFの兩者間にも競爭あるべし。)

(三)此競爭は自然なり。又必要なり。此競爭的暗示なき時は
(四)吾人は習慣的に又約束的に意識の內容と順序を繰り返すに過ぎず。
(五)推移は順次にして急劇ならざるを便宜とす。(反動は表面上急劇にして實は順次なるものなり。)
(六)推移の急劇なる場合は前後兩狀態の間に對照あるを可とす。(對照以外に之と同等なる又は同等以上の刺激あるときは此限りにあらず。)

焦點波動の說は吾人意識の一分時に就て云ふを得べく、一分時に就て云ふを得べきものは、一時一日に就て云ふを得べく、一時一日に就て云ふを得べきものは一歲にわたり、十年にわたり、個人の生涯を通じて云ひ得べしとは吾人の假定なり。個人の生涯を縱貫せる推移に就て云ひ得べきは、時を同うせる個人と個人を橫貫して相互意識の推移に就ても云ひ得べしとは亦吾人の假定なり。最後に時を同うせる相互意識の集合せる大意識が沉潛たる時の流を沿ふて百年を下り、二百年を下りて推移しつゝ永劫の因果を發展するも亦此理に悖らずとは吾人の旣に卷首に於て、編頭に於て假定せる所なり。此假定の非なる時——事實の證明が此假定を現實世界に否定する時、余の理論は根本より覆るが故に、盤上更に一子を下すの餘地あるなし。只刻々之を方寸の靈臺に檢し、或は年々にして、自他の徑路を顧み、或は進んで一代の精神に察し、更に眼孔を大にして、

過去の歷史を繙いて、時運消長の跡を尋ね、而してわが假定の事實を去る事遠からざるを知るや、余は前段に於て得たる原則を、わが一生に應用し、他の一生に應用し、われと他とを併せたる一代に應用し、遂に一代を重ねて不可思議に運行する浩蕩たる過去の歷史——幾億の群集が、各自に活動すると共に一團に活動し、一團に活動すると共に一團に推移して、恐るべく、抗しがたき勢の渦中に所謂天命の二字を說明する過去の歷史——に應用して憚からざらんとす。

第三章　原則の應用(一)

前章に於て得たる原則の二三を事實に應用して、集合意識の推移を例證するは此章の目的なり。例證は之を個人に取り、又一代に取る。論ずる所文學にあるを以て、之を此局部に限る事多しと雖ども、時に人間活力のあらゆる發現に及ぶ事あり。敢て混雜を憚らざるにあらず、彼此相通ずるは應用の範圍獨りこゝに止まらざるを示すの意なり。

暗示は自然なり又必要なり。一般の歷史を讀むとき吾人はある一代の活力發現に異樣の特色あるを認むべし。單に一般の歷史のみならず、文學史に於ても此現象の顯著なるは疑ふべからざるの事實なり。(個人としての文學者を見る亦如是觀を失はず。)ある時期(もしくはある作家)は比

較的感覺材料に富んで、作家自然の美を發揚するを以て文學の性命となす事あり。或は人事的材料の優勢にして、黃卷青帙悉く忠孝の譚ならざるはなき程に他を壓倒し去る事あり。或は超自然の流行に心を奪はれて、神異怪奇の趣なきものは、目して文藝と認められざるに至る事あり。或は一縷の哲理を彼是の交渉に託して、機微の眞を斷蓬の變に寓せざれば作品にあらずと思惟する事あり。是等は固より粗枝大葉の別に過ぎず。もし夫れ複雜にして睹易からず、陸離として捕へ難きものに至つては、讀者評家只其特色を認識するのみにして、之を口にする能はず、之を口にして徹底なる能はず、徹底にして簡明なる事能はず、徒らに遭迍顧望して遂に胡亂の言辭をなすに至る。然れども是評家讀者の罪にして、時代に特色なきの故にあらず。特色は明かならざるに拘はらず、彼等の腦裏に自覺せらるゝが故なり。水に浸したる地圖に對して山村水廓を髣髴するが如く糢糊として眸中に落つるが故なり。漢詩を取つて西詩に比するとき何人も其風韻の差を認めざるはあらず。只汝が認めたるものを出して之を汝が掌上に指せと命ぜられたる時趦趄して囁嚅するに過ぎず。もし萬一の人あつて兩者の差を認めずと云はゞ是詩を評するの人にあらず、かねて詩を讀むの人にあらず。彼等の不具は色盲の度を超えて失明の境に入ればなり。故に曰く此種の特色は明暗一ならず、繁簡差なきにあらず、難易同じからずと雖ども、必ず存在せざる事なしと。(此特色を明瞭に意識するは批評家の第一義務なり。此特色を明瞭に意識したる後、之を一

期前の特色に比し、之を一期後の特色に比し、始めて此特色の位地と、此特色のある意味に於ての價値と、特色の推移に就て一部分の實則とを知るを得、之を批評家の第二義務とす。)

特色の存在は明かなると共に、特色の推移も亦事實として爭ふべからず。推移の源因は個人意識の一部分と、個人意識の全部と、集合意識とを通じて頗る簡明なり。主觀的の俗語を用ゐて、之を斷ずれば遂に倦厭の二字なる平凡の解釋を得るに過ぎず。Marshall は *Pain, Pleasure and Asthetics* 中に快感と苦感との區別は時間に關係あるを詳論せり。時間に關係ありとは、此兩感の必ずしも性に於て異なるにあらずして、一を抱持して一定の時間を經過すれば自から他に變化するとの謂なり。此點より見たる快感と苦感とは始めより異なる客觀性を具せず、只之を感受する吾人の組織によりて、ある快感を延長して、適宜の期を超ゆる事あれば、先の所謂快感は次第に苦感に陷るに過ぎず。專門の心理學者ならぬ余は今 Marshall の說を取つて、仔細に其可否を究むるの便宜と權能とを有せず。然れども之をわが日常に檢し之を他の平日に徵し、又之を大にして文運隆替の迹に徵するに其言の誤まらざるを證明するに似たり。只世間往々にして此法則と矛盾せる現象を發見する事なきにあらず。然れども委曲に之を觀察するときはある圜中にあつて此心理の依然として循環しつゝあるを認め得るは容易なり。余の嘗て倫敦の客舍に寓せる頃同宿に八十餘の老人あり。老人と云はんより器械と云ふが適當なる老人なり。起臥飲食は勿論一定の

時間に於てするのみならず、散歩の時間、場所、新聞を讀む時間、及び椅子、に至つて決して寸毫の差を許さゞる程に規律に合へる生活を送れり。此生活は彼の何歳に始まりしやを審にせずと雖ども、彼は吾人が一二週間に於て變ぜざる可からざる所のものを終年繰返して自然なるが如し。余の始めて此老人を觀察したる時は、彼如何にして此單調の生涯に甘んずるやとの問題を得て、しかも此問題は到底解釋するに途なき神祕的のものと思へり。然れども少しく老人の圜内に入りて其動靜を窺へば、初に驚ろけるが如く別世界の觀をなすの必要なきを發見するは容易なり。此老人は此單調なる圜内に生息して、一歩も圜外に出でざるが故に圜外より見たる吾人には不可思議なる程單調なれども、其圜内に在つてはそれ相應に變化しつゝあり、否變化を求めつゝあるは爭ふべからず。例へば新聞の如し。同一の新聞を、同一の時刻に、同一の場所に讀むの單調なるは勿論なれども、新聞の内容は三百六十五日を通じて同一ならざるは明かなり。此老人の如きは容易に邂逅しがたき異例とするも、此種の人にして少しく其撰を異にするものに至つては枚擧に遑あらず。かの專門家の專門に於ける、藝術家の藝術に於ける皆此類なり。藤井竹外は詩人なり、生涯作る所二十七字を出でず。狙仙は畫家なり好んで猿のみを畫く。其他虎を以て鳴るものあり、蘭と竹とを以て生命となすものあり。或は少時より Faust を讀んで幾十度の多きに上るものあり。尤も興味あるは彼の淨瑠璃の如く、落語の如く、謠曲の如く、此等は一定の圜を作つて圜内

に循環して飽く事を知らざるに似たり。然れども少しく之を究むる時は倫敦の老人と同じく皆單調のうちにあつて變化を求めつゝ進行するものなり。故に曰く特色は推移せざる可からず。而して其源因は倦厭の二字を出づる事能はず。倦厭はあまりに平凡なれども、人間は此平凡なる特性に支配せらるゝが故に之を奈何ともする能はざるなり。かくして文學上の趣味も亦一所にとゞまる事能はず。必ず發展して推移せざるを得ず。推移は倦厭に支配せらるゝが故に必ずしも卑しきを去つて高きに就くの意味を有せず。(趣味の推移にして必ずしも發達を意味せざるは Marshall の說を此方面に應用する以上、必然の結論として許さゞる可からず。) 只推移せざる可からずと云ふ。而して推移は事實に於て眞なり。

推移の已むべからずして、推移の事實に於て眞なるを見るとき、吾人は二個の命題を得。一に曰く暗示は必要なり。暗示なきときは推移する能はず。推移する事能はざれば苦痛なればなり。二に曰く暗示は自然なり。暗示あるが故に推移す。而して推移は事實なればなり。若し Malthus の人口論にして推移する事なければ吾人は遂に在來の形式に於て其所說を繰り返さゞるを得ず。Darwin なるものありて、一道の暗示を這裏に得來るや、朝釀暮酵十年已む事なし。而して、一旦機緣の熟するとき發して進化論なる新らしきFに天下の勢を推移せしむ。是 Darwin の推移にしてかねて、天下人心の推移なり。此推移なきとき吾人の理性は一所に停住して幾多の煩悶と苦

痛を受く。Carlyle の文章は奇警勁拔にして自己の表現法に富める事洵に一代の雄と稱す。然れども彼は推移せざる可からず、推移して更に錘錬の功を加ふるとき Meredith となつて出現せざるを得ず。此に於てか C. は自己の文章を天下の意識に上らしめたると同時に、M. の爲めに暗示を垂れて、現代小說の泰斗をして文脈の波動を一瀾の頭に進めたるものなり。C. は死せざるべし、去れども後人は此種の文章に於て單に C. のみを謳歌して無窮に甘んずるものにあらず。もし少しく器械的なる暗示を示せば Holinshed の沙翁に於るが如く、Arthur 物語の Tennyson に於るが如し。此等の暗示を得て之を第一に實現するものを先覺者と云ふ。先覺者の實現せる意識が勢を得て普く模擬的意識を感染するとき一代の集合意識は此先覺者の爲めに波動を刺激せられて一種の新境界に向つて推移す。十八世紀の典型派が漸次に意識の焦點を去つて遂に浪漫派の爲めに識末に降下せるは文學史中にあつて尤も好箇の實例なり。佛國革命の如き大狂瀾の、集合意識を冒して、自由、平等、四海同胞の觀念が一般民衆の意識界の頂點に高く旛旗をかゝぐる時、文界の意識亦之に呼應して、政海の風雲と徵逐せるも亦著るしき事實なり。Dowden の著はせる *The French Revolution and English Literature* は兩者の關係を說いて委細なり。此際に於ける推移は一代に於る政治的集合意識が、同時代に於る文學的集合意識に傳播せる橫斷面の波瀾なりとす。文界もし此推移の趣味を許さゞるとき、詩歌文章は悉く生氣を失ひて、太倉の粟陳々として相依

るの觀をなす。千の能才あり、百の天才ありと雖ども、約束的意識を刺激して一轉輪の推挽をも成就せしむる能はず。此故に吾人が此特性に支配せらるゝは、吾人が能才たり、天才たり得る唯一の條件にして、比較的に推移の劇甚なる時代に生れたるものは、一朝にして名を成し譽を博するの所以となる。同時に推移の緩慢にして粘着性多き意識の時代には英傑奇才亦凡骨と相互して轗軻のうちに一生を終る事屢ばなり。

推移の自然にして且つ必要なるは前に述べたるが如し。而して推移を支配するは單に倦厭の二字に過ぎざるも之を言へり。此故に當期に於るFと次期に於るF′を比較して其優劣を判するとき後者の必ずしも前者に優らざるは自然の理なりとす。ことに趣味を生命とする文學に於ては其甚しきを見るべし。科學に於けるF′は多く前期のFを利用して、之に新たなるものを附加せる場合多きが上、理性の要求に應じて此ある物を附加するが故に、一種の意義よりしてF′はFよりも發達すと云ふも可なり。然れども趣味の推移に至つては前期に、あるものを附着せしむるよりは、新たなるあるものを樹立して前期を離れんとするの傾向多し。只全く前期を離るゝの自由を有せざるが故に結果として、前者に似たる特色を有す。此故にF′は必ずしもFの發達せるものならず。(趣味の推移を檢して、其推移の發達性なるや又は單純なる變化なるやを辨ずるは頗る有益の問題なりとす。余の淺學なる未だ深く此點に向つて詳論するの材料と見識とを有せず。粗雜なる現

下の頭腦を以て判ずれば下の如く云ひ得べしと思ふ。Fの推移が同一圜内に於てするときは、推移毎にある進歩を認むべく、もし此圜中の推移を經つくすか又は中絶して、ある特殊の狀況より、他の圜中に推移するときFとF′とは毫も進歩發達の意味に於て關係せざるものなりと。）余のとくに此點を重視するは流俗が時代好尙の變を見て、單なる好惡に支配せらるゝの結果なりとせず、變ずる毎に趣味は發達すると誤解するが故なり。換言すれば自己が現在の趣味を以て尤も完全にして、又唯一の標準なりと誤解するが故なり。現在の趣味を標準にして他を律するは自然の理にして毫も尤むべきにあらず、只注意すべきは此標準の、單に同圜内に於てのみ標準たり得べくして、他圜内には應用すべからざるを辨ぜず、自己は此一線の現在趣味のみを有して、あらゆる他線に屬するものをも評し去らんとするの弊にありとす。自己が現在有する所の標準趣味は多く一圜内に屬すべき趣味なりとす。而して自己が此圜内に此趣味を（標準とする迄に）得たる、發展の波動を逆しまに檢するときは、單に此圜中の趣味のみならずして、層々たる波動の逆行する所々に他圜の横つて存するを認め得べし。此故に自己は趣味の幾圜々を通過して而して現在の圜中に入り、現在の圜中にてとくに現在の標準趣味を得たるに過ぎず。然るを直ちに自己意識の過去を顧みて、其過去なるが故にあらゆる過去の趣味は悉く現今より進歩せざるものと解するは甚しき謬見なりと云はざる可からず。自己が過去に横はる趣味は單に程度のみに於て變遷せるものにあ

らず、又性質に於て變遷せるは知者を待つて知る所にあらず。今現在の程度を以て、同性質の過去趣味を批判するに止めずして、異性質の過去趣味をも斷定し、斷定して幼稚なりとするは、たとひ自己の意識内に屬する批判に過ぎずとするも越權の沙汰なるは爭ふべからず。

Sir W. M. Conway 嘗て論じて曰く「藝術の歷史は藝風(style)の相襲を示せども、長き發展の遞次をあらはす事なし。開化は着々として進行する事あるべし。國民の法制は間斷なく複雜に赴き、間斷なく效果を加ふるを得べし。教育は下層に普及するを得べし。生活の程度は高上するを得べし。去れども藝術は藝術として自家特有の進路を取るに過ぎず。開化は如何に進歩するとも天下に第二の Sophocles なく、第二の Shakespeare なく、第二の Raphael なかるべし。藝術の士にして彼等と名聲を等うするに足る者は出でざるにあらず。然れども、彼等の領域に於て彼等を凌ぐ事能はず、又彼等と霸を爭ふ事を得ず。偉大なる藝術家にして今後に出現するものは新樣に偉大ならざるべからず。未來の大流派は舊理想を舊時より巧みに表現する事なく、新理想を新樣に表現すべし。

「各藝風は發展して凋落すれども、藝風と藝風とは單に相襲ぐに過ぎずして、相互に優劣あるなし。一時期の理想は當該時期の國民の歡喜を表現す。而して歡喜に發展ある事なし。情緒は長へに同一なり。只種々なる刺激に因つて發揮せらるゝのみ。……

「……上代より今日に至つて、彼等は其理想を變じて一期より一期に移り、其理想を更へて一刻より一刻に遷れり。一代の信念は次代の信念にあらず。熱烈なる說法の功德によりて建立せられたるものは、單に不信者の爲めに掃蕩せらるゝに過ぎず。端靜の中に認め得べき永劫の念、勝利の裏にあらはるゝ軒昂の氣、或は形體の完全、或は高人の偉風、或は超人の莊嚴、或は無限の慈、無窮の愛、是等は是等以外の百千を合せて、吾人の崇拜し、吾人の思慕し吾人の生死したる理想なり。之を畫にゑがき、之を像に刻し、之を歌にうたひて、吾人は上古より今代に至れるものなり。」(*The Domain of Art* 一三八頁以下)

Conway の說余が所論を證して餘りあり。只其云ふ所理想の相襲を明かにするを以て目的とするが故に、一圜內(卽ち一理想に就て)の推移は深く之を論ぜざるに似たり。而して余の特に重を置かんとするは、吾人現在の理想は多くの場合に於て、一理想の束縛を受けて、其圜內に於ける ある程度の發展なるを以て、よし此發展の度を以て標準と見做すも、其應用の範圍は單に此圜內に於ける遞次の期程に過ぎずとの斷案にあり。如何となれば吾人は常に此點より出立して、同圜內に橫はるべき物象の批判を擅にするの極、遂に其權限を忘れて他圜に侵入しつゝ平然たればなり。文藝に於ける此侵入罪は至る所に行はれて、至る所に認識せらるゝに似たり。侵入するものは固よりわが不法を辨ぜず、侵入せらるゝもの亦甘んじて彼等の宣告を受けて寃を雪ぐに意なし。

此迷亂の狀を案じて一考を下す時、吾人は其交錯する所に人爲の標榜を認めず、從つて千里の差を生ずるの極めて自然なるを思はずんばあらず。凡そ趣味の批判に上るべき物象は其繪畫なると詩歌なるとを問はず、此を批判するに當つて一定の圜內に立つべしとの命令を受くる必要なし。度は長短を計るの圜なり。量は輕重を議するの圜なり。度の圜に坐して輕重を議せんとするも遂に得べからず、量の圜に坐して長短を計らんとするも日夜を空うするに過ぎず。是に於てか長短を計り、輕重を議するものは已を得ずして一定の圜內に立つ。然れども詩歌繪畫は其風格の如何に別派に屬するにも關はらず、吾人は吾人の隨意なる圜內に立ちて言說を逞うするの自由を有す。自由を有するとは如何なる圜內に立つも、ある種の批判を下すを得べしとの意なり。而して吾人の意識に於て尤も優勢なるは現時わが焦點に安置するの趣味に外ならず。而して此趣味は多くある一圜中に存すべき、ある程度の趣味を意味す。たとへば現今の一派が人生に關する一種の眞を發揮するを以て小說の理想となすが如し。是等(歐洲及び日本を含む)の人々の意識の焦點は趣味に關して云へば常に此標準に支配せらるゝが故に、如何なる文章に對するも此方面よりして批判し去らんとするの傾向なきにあらず。不思議なるは、彼等の爲めに批判せらるゝ作物は如何なる作物も此點よりして充分に批判し去らるゝの事實なり。作物と作物の差は、液體と固形體の如く一に對する標準を以て他を律しがたき程に、姿態形質の差を存せざるが故なり。然れども人生の

眞とは趣味より見たる標準の一に過ぎず。現代の潮流が好惡の推移を受けて吾人をして、しばらく此理想に停在せしむと云ふの外に何等の進歩を意味するものにあらず。人生の眞を標準とするは已を得ず、是吾人の多數が一種の因果に制せられて現代の趣味と仰ぐものなればなり。人生の眞を發揮するの法及び之を批判するの鑑識も亦進歩する事なしと云はず、吾人の趣味は意識として同圜内に於て一程の發展的推移をよくするが故なり。あらゆる作物は此標準を以て批判し能はずとも云はず、あらゆる作物は此唯一の標準を以て兎も角も評し得るが故なり。去れども人生の眞を發揮するは吾人が現代の趣味(卽ち時代思潮)にして、現代の趣味は過去より發達せるが故に、此一標準を以てあらゆる他の作物を批し去り判し去りて妥當なりとするに至つては彼等は趣味としての意識推移の原則を知らず、彼等の趣味は幼時より今日に至つて一脈一圜のうちに發達し、人生の趣味も亦上古より今代に至つて一脈一圜のうちに發達せりと誤解するものと云ふを憚からず。余は前編に於て文學にあらはるゝ材料を排列して之を四種に區別せり。四種に區別せるの善惡は知らずとするも、もし合一にしがたき四種の材料ありとせば、四種に對する理想を得るは容易なり。四種の理想を得るとき文學に對して四種の標準を得たりとも云ひ得べし。而して人生の眞とは其一たる知的材料に屬する理想(しかも知的材料の理想の一)に過ぎず。此理想を表現するものを、此理想によりて批判するは可なり。他の理想を表現するを目的とするものをも猶此標準

にて律せんとするは侵入罪なり。故意の侵入罪にあらず、境界の存在を認め得ざる昏迷の侵入罪なり。教師に對する理想を抱いて、教師としての余を議するは可なり。同じき理想を以て朋友としての余、親子としての余、市民としての余を評するものあらば、余は此人に向つて云はん。一樣の標準を以て異樣の余を評せんとせば評し得ざるにあらず、但し彼是目的の別を認識し能はざる評なるは明かなりと。

余は暗示の必要を述べたり。又其自然なるを述べたり。推移の源因の倦厭に歸着するを述べたり。故に推移の必ずしも進歩を意味せざるを述べたり。故に現在の趣味は必ずしも過去より發達せるを證するものにあらざるを述べたり。よし發達を證するも、其趣味の屬すべき圜内に於てのみかく云ひ得べき所以を述べたり。此圜内に立ちて、圜外に屬するものを律するは誤謬なる所以をも述べたり。是に於てか吾人が鑑賞的批判は如何にせば可なるかの問題に逢着せざるを得ず。此章の目的は固より此邊の方法を講ずるにあらずと雖ども、筆路の趨く所自然に余を驅つて、玆に至らしめたるを以て、數言を約敍して此章を結ばんとす。

現在の趣味は何人に在つても標準なり。標準の資格ありと云ふにあらず、之を標準とせざる時は、標準とすべきものなきが故に自然標準となるの意なり。現在の趣味にして一圜内に限らる可き性質を帶ぶるときは、圜外に逸出して標準たるを得ず。現在の趣味にして多樣なるを得べく

んば、多様なる幾多の圜を臨時隨所に焦點に置いて、各圜中に在つて達し得たる最高度と思惟する趣味を標準として、同圜内の他を律すべし。臨時隨所に多様の圜を焦點に置くの自由を有する人を廣き作家と云ひ、又廣き批評家と云ふ。此故に狹き作家の作物は一言にして其特色を言ひ盡すべく、狹き批評家の批評は隻句にして其主張を掩ふべし。廣き作家と廣き批評家は推移の自由と推移の範圍とを要す。推移の自由は天賦による。推移の範圍は多讀、多索、多聞、多見に歸す。

第四章　原則の應用(二)

適當なる新しき暗示に接せざる時、吾人の意識は約束的の内容を約束的の順序に反覆す。此原則を擧するに當つて(二章)、吾人は既に二三の零碎なる實例を示せり。此章はとくに之を詳述して暗に第五章の地をなすを以て目的とす。吾人は事に逢ふてある點に達し、物を見てある域に至り、或は書を讀んである句に及ぶとき、過去の記憶によりて、此ある點、ある域、ある句の後に自然の勢として隨ふべき端的を未だ隨はざる刹那に豫期する事あり。もし此豫期の適中して、吾人の欲するものを意識し得るときは吾人の推移は盤上に珠を轉ずるが如く、寸毫の障礙を感ぜず

して神意の安きを得べし。是暗示の反覆によりて推移の容易を得たる傾向に逆ふ事なくして進行すればなり。此際に於ける豫期は記憶より來るが故に、此際に於ける暗示は新しき性質を帶びざるは明かなり。二章に擧げたる例を補足すれば十指を屈するに堪へず。人若し「蛙の面に」と云ふとき、「水」の一語はわが口を衝いて、人の未だ語り了らざるに舌端に上る。是記憶の吾人に强ふる豫期に外ならず。もし一字の「水」を變じて「雨」となすも過渡の接續は既に滑かならず。意義の異なるなきも暗示の新奇なるが爲に然るのみ。更に全句を變じて「鷺翼に水」となす。只文字の異なるのみにして意義は依然として舊樣を改むる事なし。然れども「鷺翼に」と聞くや否や「水」の一轉語を下し得るものなし。同じく暗示の新奇なるが爲のみ。「犬もあるけば」と云ふとき必ず「棒にあたる」を豫期す。理を以て之を推すに棒にあたるの要果していづくにかある。板にあたるも可なり、石に躓くも可なり。鮪の頭にあたらば益可なり。然るにも關はらず犬もあるけば棒にあたらざる可からざるは記憶の吾人に强ふる豫期に外ならず。更に例を別途に擧げん。輓近の思想泰西より輸入せらるゝもの年に幾十なるを知らず。之を邦語にあらはさんとすれば所謂新熟語を用ゐて、新樣の内容を新式に排列せざる可からざるは固より已を得ざるに出づ。然れども其始めて邦語にあらはるゝや、彼等は必ず誹謗して熟語の體を具へずとなす。彼等は記憶の豫期に制せられて、彼等の慣用する熟字すら、一度は生硬なりし事を失念せるが如し。豫期の彼

等を支配する斯の如く大なり。

史を繙くに希臘の公民權は公民權を有する父母の子にあらざるよりは得るに易からざりしが如し。而して代を追ふて降下するに從つて此特權の益得るに困難なるを見る。今人の眼を以て彼等を見るに、何が故に此制限に甘んじて、特權の擴大を迫らざりしかを怪しまずんばあらず。然れども彼等は記憶によりて養成せられたる故き暗示を必然として、かくの如き秩序を豫期せるに過ぎず。德川氏の世に當つて所謂士人なるものは雙刀を帶して天下を横行し、農匠を見る事土芥の如く賤しかりき。かの士人なるものは之を以て當然とし、農匠なるもの亦獸類と伍をなして恬然たりしも、意識の推移が豫期以外に出づる事を解せざりしによるのみ。Plato, Aristotle は云ふに及ばず他の希臘の著者は奴隷制度の害を認むるにも關はらず、嘗て一人の之に反せるものなし。羅馬の學者亦然り。新約全書亦然り。彼等は約束的の推移を約束的の圜内に繰返すが故に奴隷制度を目して社會に免かるべからざる不滅の要素と認めたるが如し。佛國革命の當時 Bastille を破つて、多數の囚徒を青天白日の下に放ちたるに彼等の大部分は赦されて何等の喜悅を感ぜず。習慣の極、新しき推移に堪へ難き迄彼等の意識は暗黑なる圜内を循環せるが故のみ。

十八世紀の詩形を案ずるに heroic couplet を用ゐて想を遣らざるもの殆んど稀なり。豫期の命ずる所は彼等の創意を杜塞して千篇一律の態に出でざるを得ざらしめたるに過ぎず。單に詩形

に於て然るのみならず、其用語の新を避けて悉く典據あるを尙ぶ事、實に想像の外に出づ。彼等は鋤を呼んで鋤となすを恥づるものなり。女を歌へば必ず nymph ならざるべからず。男を目すれば悉く swain ならざるはなし。獵犬を咏ずれば常に loud hunter-crew の文字を利用せざる能はず。一代の習氣は數百の豫期を詩界に產出して、此豫期以外に逸出せるものは、詩人の性格を失ひ、詩意の穩當を缺き、詩形の本體を具せずとして擯斥せらる。約束は斯の如く頑强なるものなり。

更に文藝の風格に就て云へば先に引用せる Conway の言既に之を悉せるに似たり。星を咏じ菫を慕ひ婉孌綽約にして始めて詩品ありと目せらるゝの時期あり。道心を內に藏し、仙氣を外に現はし、虛靈空豁、塵世を超絕して始めて理想を得たりとなすものあり。或は駭浪驚風を描いて、人の膽を奪はざれば文にあらずと思ふものあり。殘酷の極を殘酷の極に壓逼して、觀者をして慘鼻面を蔽はしめて憚かる事を知らざる Elizabethan 劇の如きあり。淫縱猥褻にして男女情交の外世間に事あるを解せざる復古劇の如きあり。時代の精神は吾を驅り人を驅りて、萬客を一渦の中に葬つて、旋轉し盤回し、眩目し聾耳せしめて已む事なし。彼等は推移せざるにあらず。只意識の車輪を約束の鐵軌に乘せて習氣の陳圜を馳するが故に、馳するが如くにして遂に動かざるに等し。圜外に立つもの指示して奇異の觀をなすとき、却つて嗤笑の目的となる。豫期の吾人を縛

するや斯の如く牢なるものあり。

豫期の弊は沈滯に陷るにあり、固陋に流るゝにあり、新生命を容れざるにあり、千篇一律なるにあり、鸚鵡の呼應するにあり、屋上に屋を架するにあり、徵兵檢査の態度にあり。然れども是旋渦回流の災を免かれて、背後に往時を顧みたるものゝ始めて口にするを得べき言辭なりとす。其習氣を吸ひ、其習氣に染むものゝ口にするを得べき言辭にあらず。臭味を同うせる、傾向を同うせる、歩武を同うせるある趣味の社會一般より歡迎せらるゝ以上は、此趣味は此社會の此時期に對して正當の趣味たるを失はず。彼等は因果の大法に支配せられて、此以上の趣味を解する能はず、此以下の趣味を解する能はず、又此以外の趣味を解する能はざるが故なり。彼等が此趣味を解脫し得んが爲めには、波動の上に新暗示を得て、別乾坤に向つて、推移の線を曳かざるべからず。新暗示を得んが爲めには强烈なる刺激を待つか、或は循環的推移の自づから勢力を消耗して、外圜的推移に發展するを期せざるを得ず。外圜的推移の片影を意識の上に認めたるとき彼等の趣味は此片影を容るゝ丈の度に於て其地歩を失へるものと云はざる可からず。其地歩を失へる丈の度に於て彼等の趣味は正當の資格を失へるものと云ふを得べし。かくして舊趣味の地歩を失ふ毎に正當の資格をもかね失ひて、幾推移の後始めて全然別圜内に入るとき、舊趣味は彼等にとつて全然正當の資格を失ふが故に、趣味の正當なると不正當なるとは、其趣味を體する時代より

云へば、之を意識するの强烈なるか將た微弱なるかに因つて決するの外他に之を判するの途なきものなり。是に於てかある趣味の圜内に立つものゝ正當なる趣味と、圜外に立つものゝ正當なる趣味とは全く其質を異にして、しかも雙方共に動かすべからざる根底と地盤とを有す。同時に甲の認めて正當となし、乙の認めて正當となすものは自己にのみ正當にして、此正當の資格を他の領内に擴ぐる事能はず。理によりて說明する事の難きが故にしか云ふにあらず、理を聞いて然りと首肯するも單に理に於て他の趣味を正當と許諾せるのみにて、趣味其物は依然として自家圜内のものを以て正當と認識すべければなり。因果は趣味を支配す。因果に因つて支配せらるゝ趣味は因果の繼續する限り正當なり。もし此趣味を不正當ならしめんと欲せば趣味の性質を說明して他の理性を動かさんよりは、彼をして一日も早く此因果を擺脫せしむるに如くなし。因果を擺脫せしむるの法は一にして足らず。强烈なる刺激を與へて趣味の推移を別圜に向つて促がす一なり。循環的推移を急劇ならしめて圜内推移の傾向を迅速に消耗せしむる二なり。もし夫れ此傾向を壓迫して、自然の推移を不自然に推移する能はざらしむるは策の尤も拙なるものなり。而して彼の治者の被治者に於ける、嚴父の蕩兒に於ける、教師の生徒に於ける、警吏の人民に於ける常に此拙策を弄して憚る所なし。――然れども是此章の目的にあらず、故に多く云はず。

豫期の弊は前に述べたるが如し。もし夫れ其效果に至つては夙に天下の認むる所多く之を說く

を要せず。先に模擬的意識を論ずるや既に其大半を語れり。玆に述ぶる所は單に補足の意に過ぎず。如何に社會の吾人に必要なるかは社會の存在する事實を擧げて之に答ふれば足る。社會の制度は幾變し、社會の秩序は幾轉し、社會の組織は幾遷するも社會其物に反抗して之を破壞せるは有史以來未だ嘗て見る能はざる所、故に學者人間に附するに社會的本能を以てして集合動物と同一視せんとす。社會は壞つべからず、從つて社會を鞏固ならしむるの願は此本能より出立したる吾人の共有性なり。社會の鞏固ならざるとき他の社會と競爭する事能はず、競爭する事能はざる時社會は轉覆す。轉覆するとき自家保存の大目的を失ふ。此故に社會の鞏固は社會の爲めに必要にして、社會は個人の爲めに必要なり。只社會の鞏固と云ふ。之を說明するに數萬言を要するやも知るべからず。然れども此茫漠たる一語をとつて之を心的狀態に翻譯すれば社會を組織する個人意識の一致と云ふも不可なきに似たり。個人意識が統一を(ある點に於て)受けて社會的意識の安固(Solidarity of Social Consciousness)を構成すと云ふの義なり。此安固を失へるとき社會は滅裂して瓦解せんとす。個人主義はある點に於て想像以外に發達するを得べし、然れども此個人主義と併行して一面に社會的意識の安固を維持するは吾人が他に對するの義務のみならず、又吾人に對するの義務なり。此義務を自覺するときは論を待たず、之を自覺せざる時も亦吾人の意識は大部分に於て循環的推移をなして甲乙相呼應するものなり。而して此呼應は暗に社會的意識

の安固を胚胎し且つ在來既定の圜內に於て推移するを常態とするが故に、吾人はある意味に於て皆舊慣を墨守し、故習を遵奉して互に社會を現狀に運轉して滿足するものと云ひ得べし。もし個人主義の極端を想像するとき、個人と個人が意識のあらゆる點に於て合致せざる時、社會は成立せず、況んや文藝をや。甲の作れる小說は甲一人の外に讀者なく、乙の作れる新體詩は乙自から誦するの外遂に一人の呼應者を生ずる事能はず。是に於てか奇想警句雨の如く繁きも遂に活字に印して書肆を煩はすの必要なく文界閑然として永久の寂寞に入る。是事實にあらず。事實にあらざるよりは彼我は互に接觸し、融化するを知るべし。接觸し融化するを知るとき其意識の一部分は、互に同一の走馬燈裏に、同一の燭火を循環しつゝあるを悟るべし。

第五章　原則の應用(三)

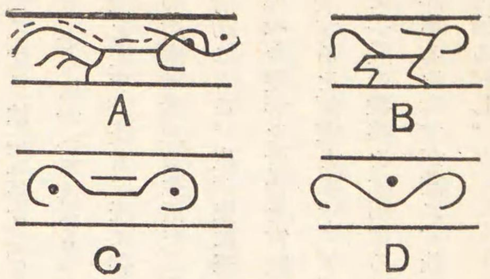
余は第三章に於て新しき暗示の自然と必要とを述べたり。第四章に於て豫期の自然と必要とを述べたり。兩章に說く所の共に自然にして必要なるを知るとき、吾人は一面に於て新を追はんと欲するの念と、他面に於て舊を慕ふの念とを兼有するを悟るべし。而して此兩傾向が同時に活動して意識の波動に影響を及ぼす事あらば、此兩傾向に支配せられて出現する頂點の內容は論理上、

下の如くならざるべからず。――全然新なるを得ず、全然舊なるを得ず。新に移らんとするとき舊は之を抑へ、舊を復せんとするとき、新は之を驅るが故なり。是に於てか第五章の必要を生ず。第五章に證明せんとするは、「吾人意識の推移は次第なるを便とす」の原則なり。

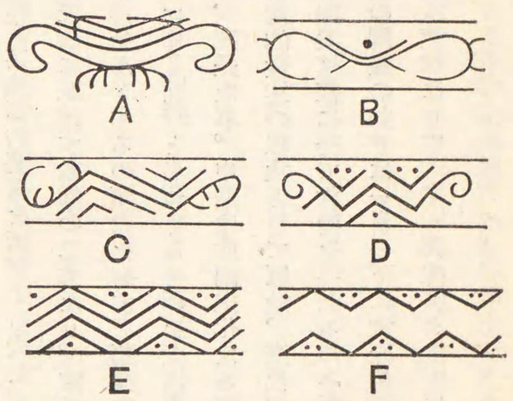
此種の推移を實例に求むるとき、吾人は塵事に、學界に、文壇に、至る所に逢着するを見る。かの發明の一朝に天下の耳目を驚かして、炳乎たる日輪を咄嗟に得たるが如き觀あるものさへ、深く其傳統を尋ねて承繼する所を察すれば淵源の遠き意外なるもの多し。一進化論を取つて檢するも亦此撰に洩れざるを見る。上代希臘の昔を說くは固より邈たりと雖ども、單に近世進化論の發達のみを討究してさへ既に一朝一夕の產物にあらざるを悟るは容易なるべし。其 Buffon (1707—1788) に始つて Erasmus Darwin に至り、Darwin を通じて Lamarck に傳へ、Lamarck を承けて遂に C. Darwin の起りしは人の知る所なり。しかも Darwin に至つて進化論は其發展を盡したるにあらず。Spencer あり、Wallace あり、Haeckel あり、Huxley あり。遂に Bateson を出し Weismann を出して暗示の傳授は皆徐々として次第ならざるなし。學者鏤骨腐心兀々として、窮晷を白頭に惜む。しかも猶前蹤を追ふて一歩の進を誇るに過ぎず。吾人の創意はしかく微弱なるなり。(一歩の進とは學者と學者を比較するの意なるは無論なり。もし夫れ一流の學者を以て庸凡の俗人と對すれば其差豈三千里にして止まらんや。讀者、推移の緩徐ならざる可

からざるが故に Lord Kelvin と倫敦の巡査を比較して兩者の間に甚しき懸隔ありと云ふ事なかれ。)

學理の推移、哲論の變遷は高遠複雜にして、たとひ此原則に因つて動くとも、一目の下に其徑路を敍說しがたし。圖案模樣の劃刻整然たるものに至つては、彼是を對照して瞬間に其發展の跡を尋ぬるを得るが故に、吾人の說を證明するに當つて尤も便宜なる材料を給せずんばあらず。Haddon は British New Guinea の蠻人に就て其裝飾的藝術を研究せる人なり。其著 *Evolution in Art* に云へる事あり。「暗示と豫期とは意匠術に及ぼす動靜の二力なり。前者は端を發し且つ樣を變ず。後者は既に存在せる所のものを保持せんとするの傾向を有す。藝術的表現に於て吾人の所謂截然たる生活史 (a distinctive "life-history") と名づくるものを產出するは此兩作用の活動による。生活史は三期より成る。生、長、死是なり。中期は所謂進化なる語のもとに一括し得べき變形を含むを常態とす。……吾人は藝術的發達の程次として原始、進化、衰頹の三期を認識するを便宜とす」と。Haddon の說は單に圖案模樣に於て肯綮を得たるのみならず、移して以て一般の推移を說明するに足る。其擧ぐる所の圖畫の如きは一目の下に意匠推遷の自然にして次序あるを示すが故に、此原則の實例として尤も適切にして、尤も興味多きは左に複寫する所を見て知るべし。



上圖は鰐魚の模様の變化を示すものにして、其推移は繁より簡に赴くものとす。讀者A、B、C、Dを順次に檢するとき、其推移の緩徐にして連續あるを認むべし。



上圖も亦鰐魚模様の變化を示すものにして、Aの寫生的なるより幾多の順序を經てEFの幾何的模様に至る。而して其間毫も突然の變化なきを注意すべし。

AはBを暗示し、BはCを暗示して遂にDもしくはFに達するが故にAとD、もしくはAとFとを較するときは恰も木に接するに竹を以てするが如し。兩者の類似はしかく懸隔すと雖ども、接續せる推移の二程次を相互に對照するときは其進化の偶然にあらざるを見るべし。辯を弄し論を闘はすもの固く執つて相讓らず、各以て根據地を去らずとなして、しかも彼是徴逐の際知らず知らず地歩を移して舌鋒を不斷に轉じ去る。一時間の後口沫を拭つて起點を顧みれば遙かの遠き

に在りて、刻下の話頭と相關せざるが如し。彼等は當初より此突如たる推移を敢てするの勇氣なかりしもの、只騎虎の勢に乘じて自から知らず轉々化換してしかも一所に停住するを信じて疑はず、一旦舌頭の糜爛せるに驚ろいて始めてわが流光を追ふて滑脱するのあまりに速かなるを恥づ。A、B、C、DよりFに至るの狀宛として是に似たるものあり。暗示の漸次なる是に至つて遂に爭ふべからず。

Muirhead 嘗て Rousseau の人は自由に生れたりと云へるを駁せるの序、書物上の言語の社會的所得なるを論じて曰く世間往々にして書を著はすと號するものあり。彼等は其名を卷頭に署し又其參考書目を序中もしくは篇末に掲げて憚る所なし。余の見る所を以てすれば、參考書目を冒頭に掲げて、自己の名を卷末に置くの、多くの場合に於て事實に近きを知る。著者の爲せる所のもの、又著者の爲し得る所のものは、無數の年月の勞力によりて彼に供給せられたる材料を新型に再鑄するに過ぎざればなり。此意義に於て Emerson の云へるが如く、各人は等しく剽竊者なり。各物は剽竊なり。家屋と雖ども亦剽竊なりと。彼等の嶄新ならんとして嶄新なる能はざるを諷するに似たり。暗示の漸次なるを著書の上に道破せるに過ぎず。藝術評論家の語に曰く如何なる大藝術家も、Phidias も Michael Angelo も Rembrandt も Velasquez も遂に全然斯樣なる美の理想を思念し又表現する能はずと、暗示の突然として天外より降下せざるを云ふに過ぎず。

Pisistratus の Athens に王たるや Solon の法規を外形の上に維持して敢て之を破壞する事なかりき。Caesar の英邁にして猶且共和政體の組織を改めず。一世の豪傑 Napoleon の如きものすら、當初は革命の時代に行はれたる主義形式を蹂躙するの意なかりしに似たり。是政治的に暗示の漸次なるを證するものなり。

文界の潮流漲落一ならず高下不同なりと雖ども、要するに亦此原則を離れず。玆に例證せんとするは英文學史に於る浪漫典型二派の興廢なり。兩派の動靜は英文學史上に在つて普く人の知る所、其定義の如きに至つては學者の說固より區々にして紛糾す。今其特性を考へ、異同を辯じて吾人が兩派に對する觀念を明かにするの餘地なし。只所謂典型派を呼ぶに典型派を以てし、所謂浪漫派を稱して浪漫派となして、相互の隆替起伏の動靜を見て此原則の應用を試みんと欲す。

所謂典型派の由來する所を討ぬるに十七世紀の半に Waller を得 Denham を得て漸く興り、ひいて十八世紀に入り Pope に至つて大成せるは人の知る所なり。此特異なる活動の何が故に起りしかは、專門の學者の云ふ所に聽いて容易に其消息を解するを得べし。當時の文學の權輿なる Edmund Gosse は其著 *From Shakespeare to Pope, an Inquiry into the Causes and Phenomena of the Rise of Classical Poetry in England* 中に述べて曰く「問ふもの云はく、十七世紀の文學は何が故に圈中に屏居し、何が故に人爲の法則に自己を自縛し、何が故に無味陳套の題目に自己

を自制したるかと、答へて云ふ。詩を鑄るに變態の型を以てせるが故なり、怪異の型を以てせるが故なり。詩を行るに荒唐不可解の辭を以てせるが故なり」と。Gosse の云ふ所を吾邦の狀勢に照らして讀者に察し易からしむれば所謂新派の歌の格調に於て意匠に於て放縱不羈の極をつくせるが故に再び平正にして典型あるを尙ぶに至れりと云ふが如し。著者の語を藉りて之を布衍すれば「十七世紀の人は自在放奔の氣に倦み、劇詩家の狼藉を惡み、敍情詩人の接吻と薔薇と、香料とに飽き、放逸にして檢束を解せざる文士の爲すが儘に、歷史の海に搖蕩し、宇宙の廣きに奔走するを厭ふに至れり。燦たる Elizabeth 朝の文星は跳躍鯨吼して、滿天の風を誘ふてあまねく文界を吹かしめたるに、之に繼ぐもの天分相添はず、徒らに其聲を大にして空洞に響を傳ふる」に過ぎざりしが爲なり。

典型派は實にかくの如くにして興れり。かくの如くにして興れるを以て時に或は反動の觀をなすを妨げざるに似たり。然れども此際に於る反動は强烈なる刺激の社會の一隅に煥發せるが爲めに、未だ推移の序を展べ盡さゞる浪漫的精神が半途に斃踣せるの結果にあらず、浪漫的精神の兇暴なる威壓に堪へずして、意識の推移が急轉して別圜に入れるに過ぎず。然れども兇暴なる威壓は短時間に於て、長時間の推移を盡すが故に、少なくとも長時間の推移を盡すと同樣の價値を有するが故に、此威壓によりて急轉する意識の乾坤は、長時間の推移に其勢力を失ひつゝ漸次に轉

化し去る乾坤と異なるなし。此意義に於て此反動は依然として漸次の暗示に過ぎず。如何となれば此反動の、尋常の推移と異なるは單に時間の短かきに在りて、而して其短かき時間のうちに、他が長時間に通過せる推移を結了するが故に、過程の順序は兩者相等しと見るを得べければなり。

典型派の興起を以て俗に所謂反動と見做すも、余が主張する「暗示は漸次ならざる可からず」との原則を打破するに足らざるは是にて明かなり。況んや其潮流の默移する所を細かに檢すれば、事實は必ずしも、かくの如く急轉直下して浪漫派を去らざるをや。讀者もし余が言を疑はば此流派の興廢に少なからざる關係を有する詩人にして劇作家たる Devenant の著述と之に對する評論とを見れば思半ばに過ぐるものあらん。彼は實に系統に於て舊派の醇なるものとして述作に從事せるなり。只半途にして翻然悟る所あり思へらく、今より二十年にして天下の大勢は必ず Waller, Denham を謳歌する事あらんと、是に於てか浪漫の衣冠を棄てゝ、直ちに典型の壘に赴けり。彼が第一に公けにせるは *Madagascar* と題する詩集なり。評家の言によるに、彼は此集中に於て未だ Waller の清新なる詩風に私淑する所なきに似たり。下つて一六五〇年に至つて敍事詩 *Gondibert* を著はすや格調一變、純然として典型派の吐屬をなす。彼は實に過去十二年間に於て冥々の裡に暗示の幾刺激を感受して、漸次に浪漫的の舊圜を出で去つて、典型の新區に入り、最後の焦點を捕へて之を一篇の騎士譚に實現せるに過ぎず。詩意識の推移を彼と共にせずして、

彼を以て猶吾黨の士と誤認せる浪漫派は彼の權變を其新作に見て、交起つて之を攻擊す。其如何に劇烈なりしかは

"I am old Davenant
With my fustian quill,
Though skill I have not,
I must be writing still
On Gondibert ....."

の如き諷刺を讀んで知るべし。(*Gondibert* を攻擊せる批評冊子二卷は珍本として今猶 Gosse の手に存すと云ふ。) 如上の事實は單に詩人 Davenant の一家に屬するが如しと雖ども、典型派の隆替に關連して、之を觀察するときは、優に推移の原則を說明するに足るべし。讀者、一に、彼の好尙の始めは舊派(此場合にては浪漫派が舊派なり)にして後には典型派に移れるを見ん事を要す。二に、此推移の十二年の時日を費やせるを見ん事を要す。三に、時勢の推移は彼と伴ふ能はずして、蜂起して彼が典型的風格を攻擊せるを見ん事を要す。最後に斯の如く攻擊の目的となりし典型的詩風は、Pope に至つて天日の中せるが如く一世を眩燿せるを見ん事を要す。——暗示の漸次なるは是に於て爭ふ可からざるに似たり。

更に此原則を證明して一層顯著なる觀念を吾人に與ふるは、次世紀に入つて典型詩の文壇に霸を稱せる頃、第二の浪漫派が之に反して旗幟を翻へせるの狀態なり。新浪漫派の意義は一言にして盡しがたし。こゝには只典型派に對して起れる活動の表現を總稱す。此表現を文學史上に瞥見すれば Cowper の *The Task* を以て、*Lyrical Ballads* を以て、Scott の長詩を以て、一時に舊風を掃蕩せるが如し。然れども仔細に眼を着けて其動靜を窺ふときは、變化の斯の如く劇甚ならず、緩行徐回して漸次に玆に達せるを點頭するは容易なり。例を全局に取れば二三にして足らず、而して余の目的は全局の發展を詳敍するにあらず。其尤も睹易くして且つ興味あるものを擧げて推移の序あり順あるを示さんと欲す。

沙翁は千古の大家なり、全歐の天才なり。是れ萬口の一致する所、何人も此斷案に對して異議を挾むものなきが如し。眞に沙翁を以てしかく偉大なりと信ぜざるものすら嘗て此斷案に對して異議を挾める事なし。萬口の一致する所に向つて、身を挺して他を誹譏せんとすれば、薪を負ふて火に赴くの危險を冒さゞる可からざるが故なり。高く其戇愚を標榜して天下に呼號すると一般なればなり。此故に彼を解するもの、彼を解せざるもの、相聚つて彼を神聖にし、彼を偶像にし、幾炷の香を彼の壇前に焚いて、薰烟靉靆の裏に其音容を髣髴して及ばざるを恐るゝが如し。十九世紀に生れて Coleridge, Hazlitt の批評に其鑑識を養へるものは、沙翁に對する此輿論を以て

萬古に通じて戾らざるの定見となして憚からず。然れども世紀を溯る事一次にして所謂典型派の——沙翁時代の浪漫的精神に抗して興れる典型派の勢を擅まゝにせる當時を回顧すれば詩聖の聲望却つて豫想外なるものあり。Thomas Rymer, C. Lennox の如きは沙翁を以て一讀の價値なしとなせり。彼の偉大なるを認めたる輩と雖ども彼を崇拜する事固より今代の如く甚しからず、寧ろ之に對して眷顧を加ふるの狀あり、或は云ふ、野蠻時代に生れて訓錬を缺き習熟を缺くと、或は云ふ、結構具はらずと、或は云ふ悲劇と喜劇の區別なしと、或は云ふ、三統一を缺くと皆今人の口にせざる所なり。詩人 Goldsmith の沙翁を誹れるは普く人の知る所、其言に曰く。「余はわが劇詩宗の有せる美點を相當の度に於て贊賞せざるにあらず。同時に余は國家の名譽の爲めに、併せて彼の名譽の爲めに、彼の描ける數多の齣幕の忘失せられん事を希望せざるを得ず。一眼を眇せるものは常に其半面を畫にせざるを得ず。輓近の再興にかゝる是等の劇を觀たるものをして、もし是等の劇にして今人の作ならしむるも猶且つ演ずるの演ぜざるに優るかを考へしめば果して如何。或は恐る彼等の呼んで以て可となす所のものは、單に名聲を耳にするが爲めに起り、又徒らなる古を慕ふの念に過ぎざる事を。事實を云へば、かの不自然なる滑稽に富める、奇僻なる想像に僥かなる、針小を棒大に不稽ならしむる沙翁の脚本を復活して新たに場に上すは、是詩宗の爲めに記念像を建つるにあらずして、却つて此記念像を戮するものと云ふべし。」(*An Inquiry into*

the Present State of Polite Learning, chap. xii.) Pope の沙翁觀に曰く。「余は沙翁に就て結論して云はんと欲す。彼の脚本は陷缺多く規律なしと雖ども、之を他の精巧にして整然たるものに比すれば、莊嚴なる Gothic 風の古代建築と、淸楚なる今代の堂厦とを較するが如き感あり。後者は都雅にして綺麗なり。然れども前者は剛健にして重厚なり。……幽暗怪異の廊を通じて始めて至る事を得べしと雖ども、其變化に富み、崇高の感に接するは疑なし。其局部を檢すれば固より稚氣なきにあらず、布置當を得るにあらず、其莊嚴の度に比例せざるもの多しと雖ども、一括して其全體をうかゞへば雄偉崇高人をして自から低頭せしむるに足る」と。もし夫れ他家の批評に至つては糅然として堆をなすが故に、今其煩を避けて一々之を引證せずと雖ども、上來說く所によつて其一斑を窺ふを得べし。要するに十八世紀に於る沙翁は前代の惰性によりて大家を以て目せられたりと雖ども、遂に之に向つて絕對に敬意を拂ふの念なかりしが如し。Coleridge の出づるを待ち、Schlegel の出づるを待ち、彼は漸くにして空前の大詩人と推移せるに過ぎず。之を余が說明せんとする原則に對照して約言すれば、沙翁崇拜の暗示は十九世紀の始めに成りしが如しと雖ども、意識の推移は百年前より漸次に玆に到達せるものなり。(向後、歐人の沙翁觀は如何に變化するかは固より計り知るべからず。)

沙翁に對する評論の變遷が推移の原則に適へるは上に述べたるが如し。吾人が仰いで以て浪漫

派の明星となす Spenser も亦此徑路を通過して今日の地位を得たるものなり。十八世紀に於る浪漫派の勃興を論じたる Beers は其著書中に述べて曰く浪漫派の Spenser に負ふ所あるは、其沙翁に負ふ所あるよりも多大なるに似たりと。Spenser の浪漫的なる固より典型派の跳梁せる十八世紀に在つて渴仰の信を博するに由なし。彼を以て文界の照星となせるは同じく十九世紀に始まるが如しと雖ども、同じく突然の暗示によりて一朝に意識の焦點に炳燿せるにあらず。現に當代の大家として、*Chevy Chase* を評し、Milton を評し、趣味の先覺者を以て自任せる Addison の如きすら彼に慊々たるものありしは、左の數行を讀んで知るべし。

"Old Spenser next, warm'd with poetic rage,
In ancient tales amus'd a barb'rous age;
An age that yet uncultivate and rude,
Where-e're the poet's fancy led, pursu'd
Thro' pathless fields, and unfrequented floods,
To dens of dragons, and enchanted woods.
But now the mystic tale, that pleas'd of yore,
Can charm an understanding age no more;

The long-spun allegories fulsome grow,
While the dull moral lies too plain below."

—*Account of the Greatest English Poets.*

Johnson は文を以て一代に鳴るもの甞て *The Rambler* (一七五一年五月十四日) に於て論じて曰く、Spenser の話談と風情を模するは敢て非議すべきにあらず。如何となれば Allegory は教化の方便として尤も感興あるものなればなり。然れども彼の文體と詩格に關しては全くしか云ふを得ず。彼の詩調は彼の生前に在つてすら猶且つ晦僻を以て目せらる。其古語を用ゐて、奇句を連ね、常流を遠ざかれるの甚しき Ben Jonson すら彼を以て to have written no language と斷定せる位なり。彼の stanza は難澁にして耳に快ならず、單調にして倦み易く、冗長にして疲るゝに速かなり。此 stanza はもと以太利詩人を模して成るもの、固よりわが國語の特性に注意して創意せるものにあらず。以太利語は語尾の變化に窮するが故に同韻の最大數を使用し得んが爲めに此 stanza に重きを置くの必要あり。然れども我國語の字脚に於て變化ある、同音の二字以上を連ぬるをすら不便宜と思ふ事多し。用韻は吾人をして不適當なる言語を用ゐて吾人の思想を表現せしむと云へる Milton の觀察にして誤りなくんば、長句法より生ずる押韻の困難なるに從つて此不適當の度は增加せざるを得ず。……詩家もし沈潛刻苦して時日を惜まずんば、或は

Spenser の詩體を模して其堂に上る事あらん。然れども吾人の世に住むは古人の遺棄して顧みざるものを集め、或は無用の長物を擬するが爲めにはあらざるべしと。彼等の Spenser を視る事概ね此の如し。(Steele が *Spectator* (一七一二年十一月十九日) に於て彼に贊辭を呈せるが如きは蓋し異例に屬す。)

一般の風潮が斯の如く Spenser と相容れざるにも關はらず、彼を模するもの〻十八世紀に輩出せるは Johnson の批評に見るも明かなり。是に於てか吾人は一方に是等模倣者を歷史的に點檢して、其勢力消長の迹に、推移の原則の活動せるを覩ふ可く、他方に是等模倣者の被模倣者に對する態度を參酌して、同じく其褒貶の度に變化轉換の次序あるを認むるを得べし。Phelps は *English Romantic Movement* を著はせるもの、書中とくに *Spenserian Revival* の一篇を設けて詳かに其顚末を說けり。其言に曰く「Spenser の模倣者がかく續出せるに關はらず、吾人の深く注意すべき重要なる事實は、其多數の誠實ならざる模倣者なるにあり。彼等は單に娛樂の爲めに Spenser を誦讀せるのみならず、又娛樂の爲めに彼の詩風を擬せり。Spenserian form を用ゐたるものに諷刺詩及び滑稽詩多きは全く之が爲めなり。Augustan age の精神は其氣運の最頂點に達して旣に漸く降下せる後も逡巡として文界に留まる事之を久しうせり。而して Spenser の模倣者にして此影響を蒙らざるものは殆んど稀なり。Thomson の *The Castle of Indolence* は

此種の述作中優に群を拔くもの、しかも作者は詩中に幾多の諷刺を混入するの必要を認めたるが如し。Shenstone の始めて *The Schoolmistress* を著すや毫も眞面目の意なかりしのみならず、世人の戲を目して本領となさん事を恐れたり。他は推して知るべきのみ」と。是に由て之を觀れば彼等の Spenser を模したるは決して崇拜の意を含めるにあらずして却つて娛樂の目的に過ぎざりしのみ。只一部僅少の人士ありて誠意に之を研究し、且つ消閑に筆を弄して彼を學びたるもの、亦自然に向背を一途にして Spenserian 復活の中に投じ來つて推移の極相率いて遂に十九世紀に入れり。Phelps は一七〇〇年より一七七五年に至つて七〔十〕五年間に出版せられたる模擬詩の表を作つて約五十種を示せり。其娛樂的閑文字なると否とは暫く措いて問はず、Spenser 復活に由來あり、次序あり、漸移あるは疑ふ可からず。

吾人は次に Thomson の *The Seasons* をとつて此原則の意義を二三の方面より證明するを得べしと信ず。(一) *The Seasons* は人の知る如く春夏秋冬の季節を分つて、四時の風光と景物とを順次に咏ぜるものなるが故に、吐屬の主題は自然に存すと云ふも不可なきに似たり。英國詩人が天地山川に對する眞情は世紀末に至つて Cowper の敍述を待つて始めて詩界に淸新の光輝を放ち、Wordsworth 其後を受けて溯花澤草の致、靑嶂翠巒の趣に幽玄の歡喜を解して、漸く一般より其價値を認められたるもの、然れども是單に其外觀に過ぎず。其暗示の流を遠き半世に溯れば、

其淵源する所却つてこの邊に存す。詩中含む所自然の二字、此原則を說明すとは是が爲めなり。(二) *The Seasons* は又多少の超自然的材料を含む。幽玄の境致に怪異を髣髴せしむるのみならず、明らさまに幽靈の文字を使用せる箇所一二にして足らず。石女を泣かしめ木人を舞はしめて快を稱するは浪漫派の得意とするところ、約半世紀の後 Lewis を得、Radcliffe を得て、怪に渴するものゝ骨爲めに寒く、下つて Coleridge に至つて玄祕の堂奧に隱約たる虛靈の、世を隔てゝ我と語るあるが如きを覺ゆ。Coleridge の擅場なる篤永空豁の趣はもとより詩人性靈の微妙なる活動による事論を待たずと雖ども、其發して *The Ancient Mariner* となり *Christabel* となるは囂然として天火の意識上に墜落して焦點に燿けるが爲にあらず。自覺と否とに關はらず、暗示より暗示を傳へ、天狗般若の妖を經て、漸く身心を脫落せる太玄の、遂に波動線上に縹緲たりしに因らずんばあらず。此點に於て超自然趣味の自から漸次に推移發展するを見る可く、而して其暗示の糸を繰りて逆しまに十八世紀に入るとき、吾人は吾人の通路に於て *The Seasons* の橫はるを認めて、其、此要素を含むの偶然ならざりしを悟るべし。(三) *The Seasons* は調に於て沈鬱なる所あり、想に於て悲傷する所なきにあらず。Beers の所謂憂鬱派の系統は Young を經、Collins を經、Gray を經て世紀末に至つて *Ossian* の跌宕孤峭となり、遂に轉じて Byron の鬱紆慷慨に至る。其推移の迹を討ぬれば依然として漸次に步を進めたるを疑はずして、しかも Thomson は實に初

期の暗示を後人に與へたるを證すべし。(四) *The Seasons* は其傾向に於て sentimental なる小話を插む事多し。是彼が Sterne 及び Goldsmith と共有する要素にして、一時天下に流行せる Wertherism の先驅と見るを得べきに似たり。此點に於ても亦多少わが原則を說明し得ると云ふを妨げず。(五) *The Seasons* は斯の如く種々の暗示を後代に與へたりと雖ども、同時に同時代の趣味を帶べるは吾人が研究上尤も興致ある事實なり。體は無韻詩にして時流を追はざるに似たりと雖ども、評家の言に從へば所々に Pope の影響を認むと云へり。又其敎誡的態度を以て詩神の靈を驅使するも亦時好の感化にあらずんばあらず。かくの如く *The Seasons* のうちには當時に流行せる風潮と、後代に發達せる傾向とが同一所に居を卜して相隣るが故に、其全詩を見れば如何に推移の漸次なるかを推するに難からざらん。

更に眼を轉じて、浪漫的潮流の中著るしき現象として吾人の注意を惹ける Gothic 復活の如きも、其發展の徑路を調査すれば、亦此原則に從つて終始せるを見るべし。此復活は Walpole に始まつて Scott に至り、燦爛として天下の趣味に一異彩を加へたるが如しと雖ども、其暗示の因つて起るところは決して突然にあらず。かの Thomas Warton は大に Gothic の風致を愛せるの人なり。然れども當時文壇を支配せるは典型的好尙なりしを以て、時代の感化を免かれず、其好尙を解脫すること能はざりし彼は自から詩を作つて其趣味の流行に添はざるを辯疏せり。有名

なる *Reliques of Ancient English Poetry* は民謠を蒐集せる第一の著述として重を文界になすものの、もし編者 Percy をして今日にあらしめば其貢獻する所群を拔き類を絕つの點に於て、大に其聲價を高うするに足るべし。然れども時代の趣味は彼をして得意ならしむべき所に、却つて抑損の辭を要求せるに似たり。彼の自序に曰く。「都雅優麗を以てあらはるゝ今代に在つて、是等の古謠が籍を文界に列するの資格に多少の疑あるは余と雖ども知らざるにあらず。然れども此古謠の大半は眞率にして味あり、巧を弄せずして自から格に入るが故に、假令高遠の詩趣を缺くと雖ども、亦以て存するに足らん。假令想像の富贍なく、爲めに人目を眩燿すること難しと雖ども亦以て吾人の心を動かすを得べし。」是時勢の意識に支配せられて自己の好む所に從つて忌憚なき能はざるが爲のみ。暗示の漸次なる推して知るべし。

最後に一例を擧げて暗示の漸次なるを證明して已まんとす。典型的世紀の半ばに當つて一種の特色を帶びたるが爲めに、大に文壇の注意を惹くべき書をあらはせるものあり。書名を *Essay on the Genius and Writings of Pope* と云ひ、著者を Joseph Warton (Warton は父と兄弟を合して三人とす。共に文壇に名を馳せたるが故に混合し易し) とす。此書の特異なるは當時の大家 Pope を貶して智才にして詩才にあらずとなせるにあり。天下典型派の格調を模して日も亦足らずとせる時に、此大膽なる批評を試みたるにあり。人皆 Pope を望んで文壇の獅々兒にして近く

べからずと思へるに方つて、迅雷耳を掩ふに遑あらざるの斷案を放下せるが故なり。嚴密なる意義に於てPopeの詩は目するに一流を以てすべからざる所以を述べて浪漫派の爲めに氣燄を吐けるにあり。現今の批評家にして此言をなすは難きにあらず、又何人をも首肯せしめ得べきを疑はず。然れども此時に當つてPopeの勢は赫として天日の頭上に中せるが如し。高く雲頭に蹲踞して群小を下瞰せる詩宗に向つて貶謫の筆を舞はすものは、Dennis一派の病狗を除いて、只一のWartonあるのみ。世論の沸騰せるは固より其所なり。彼の傳記者の語によれば、彼は四面の攻撃に堪へず、元氣大に沮喪して、未完の書を高閣に束ねて、顧みざる事二十五年、一七八二年に至つて始めて二卷を公けにするを得たりと云ふ。突然の暗示が世に容れられざるは是にて明かなり。かくの如く公衆の仰瞻する所となり、一世の威望をわが雙肩に負へるPopeも時勢の推移を如何ともする能はず、十九世紀に入つてより以來漸く其地歩を失ひ、遂に大詩人として他と雁行する能はざるに至れり。只一のByronあり、獨り彼を稱揚して已まず。一八一七年（九月十五日）一書を裁してMurrayに與へて曰く。「詩に關して一般に論ずれば彼も(Mooreも)吾人も(ScottもSoutheyもWordsworthもCampbellも余も)皆同樣に誤れりと思ふ。吾人は悉く邪曲にして無價値なる革命的詩統の上にあるに似たり。此弊を免かるゝものは獨りRogersとCrabbeあるのみ。今代も後代も遂には余と意見を同じうするに至るべし。頃日古人の詩——ことにPope

を通讀して余が說の益眞なるを悟れり。余はMooreの詩と余の詩と、他の二三家を取つて、之をPopeの傍に置いて彼此對照せり。而して構想、調和、熱情、想像の諸點に於て、此Anne朝の矮詩人と吾人の間に著るしき懸隔を認めて憮然たる事之を久しうせり。」革命的詩人を以て目せらるゝByronにして此言をなす、少しく怪しむべきに似たりと雖ども、彼がPopeに私淑せるは爭ふ可からず。文名全國に嘖々たるByronの此斷案を下して些の反響なかりしに至つては更に怪しむべし。是時勢の推移して集合意識のPopeを去る事遠きに因らずんばあらず。意識の焦點が典型の詩風を離るゝ能はざるときはWartonありて浪漫派の爲めに氣燄を吐くと雖ども、之を那何ともする能はず。意識の推移、漸を待つて一度び典型派を去るや意氣全歐を壓するのByronあつて、衆を麾いで呼號すと雖ども遂に一人の起つて之に應ずるものなし。十九世紀に在つてPope宗を再建せんとするは十八世紀に在つて之を剿絕せんとするが如く、等しく至難の事業なりとす。至難とは正邪の辨にあらず、高下の意にあらず、理非の別にあらず、單に集合意識に逆ふが故なり。山頂に水を逆行せしむるの難きを知つて、意識の推移に戻るの難きを知らず、かの權威者、暴慢者、狂悖者、沒識者は往々にして愚盲見るに堪へざるの小策を弄して、天下の耳目を瞬刻の短かきに欺いて、而して之を自然の傾向と誤認するものあり。徒らに財帑を糜し、精力を耗し、小人を役し、匹夫を驅つて、集合意識を吾が欲するまゝに動かさんと欲す。天下は

かくの如く安價なるものにあらざるなり。自然の法則は自然に從つて始めて之を御するを得べし。人間の法則は自然よりも頑强なり。單に人間なるが故に推移の大則に反して御し得べしとするは桀紂の再生にしてかねて馬鹿竹の再生なり。

推移の漸次ならざる可からざるは略其例證をつくすを得たり。推移の漸次を說くに方つて等閑に附しがたきは所謂反動の現象なりとす。

(一)所謂反動なるものの、實は漸次の推移に過ぎざるは前に述べたるが如し。俗間誤つて突然となすは、兩者共に推移の過程順序に於て異なるなきに關はらず、只其過程順序をつくすの時間に於て大差あるに因らずんばあらず。而して此時間的差違を來すものは當下意識の强度による。Fをして可成早く推移せしめんには、Fは猛烈ならざる可からず。猛烈の壓迫を受くるとき吾人は比較的短時間に於て意識の推移し去らん事を希望するは日常の經驗なるのみならず、之を集合意識に徵するも明かなりとす。かの文壇の流行の如き、流行の度が優勢なれば優勢なる程に、流行の轉換は速かなるべし。乃ち速かなる漸移にも關せず、呼んで反動と云ふは、推移の速かなるに心を奪はれて、前後兩意識の波動推移のうち尤も顯著なる二焦點を捕へて相對するが爲めなり。此二焦點を相對するが爲め二者の中間に橫つて其特質の多少明かならざるものを悉く棄て去るが爲めなり。故意に棄て去るにあらず、自覺せざるが故に閑却するが爲めなり。

(二)當下の意識未だ推移の序を經盡さゞるも、外部より强烈なる刺激を受くるときは、此刺激は他を壓倒して焦點に上る事あり。而して此刺激は他の點に於て商量するの必要なき場合に在つては、當下の意識と對照的性質を帶ぶるを便とす。是余が第二章に於て論ぜる所にして、しかも此推移はある意味に於て純然たる反動に外ならず。たとへば優婉なる戀愛小說の一般に行はれて、世間の好尙は未だ之に對して倦厭の情を釀さざるに、彼等をして未練なく此好尙を遺棄せしめんが爲めには、之を遺棄せしむる丈に强烈なる刺激を以て彼等の波動頂點を攻擊せざるべからずして、此强烈なる刺激を與へ得るものは(他の點を等しとせば)當下の意識に反對なる剛健雄偉の趣味か、もしくは滑稽諧謔の作物ならざる可からざるが如し。此推移は嚴密の意味に於て反動と名づけ得べきものなるを以て、推移は漸次ならざるべからずとの原則中に入りがたきものなり。此點より見れば別に章を設けて實例を證に詳說するの價値あるが如しと雖ども、淺學にして材料乏しきを以て他日を期す。

(三)意識の推移は漸次にして、毫も此原則に抵觸せざるも、意識を外界に實現するに方つて、反動作用と目せらるゝものあり。此際に於ける推移は內外兩面にわたつて、相互に竝行せざるが故に之を敍說するときは推移の次序を二樣に區別するの必要を生ず。內面的進行はFよりFに、F′よりF″に、F″よりF‴に至ると雖ども之を身外に實現して他の注意を引くに足る行爲と變ずるとき

は單にFとF″のみに限らるゝとき——而して此FとF″が對照的性質を帶ぶるとき、推移は依然として反動ならざる可からず。たとへば男女の愛の如し。今日は情の少しく衰ふるを覺え、明日は之を叱せんと欲し、次には其頭を打たんと思ひ、次には其眼を抉せんと願ひ、最後に其生命を奪はんと誓つて遂に之を實現するが如し。推移はかくの如く次第あり、順序あるにも關せず、外部にあらはれたる動作のみより之を論ずれば、金蘭の愛を一朝に變じて千古の恨となすの觀あり。此觀あるの點に於て此推移は正しく反動なり。例を歴史に求むれば佛國革命の如し。佛國革命は社會の基礎を根本より轉覆して、平和の民を殺戮の血に盤旋せしめたるもの、之を革命以前の光景に比すれば、晝の夜に於ける、天の地に於けるよりも甚し。有史以來斯の如きの反動は人の未だ知らざる所なるべし。然れども是實現的の反動に過ぎず。もし夫れ一般民衆の腦裏に授受せられたる暗示の波動に棹さして、苦悶不平の流を内面的に溯るときは其淵源の遠き蓋し意外に出づるものあらん。彼等は五十年前既に貴族の面上に無形の唾を吐き、三十年前權貴の背を心中に打ち、十年前腦裏の斷頭臺に王者の首を刎ねたるやも知る可からず。佛國革命は有史以來の絶大反動にして、又有史以來の漸移的運動ならずんばあらず。——世の所謂反動にして此種に屬するもの蓋し少なからず。清明治平の世、文界に暴君なく、操觚の士固より立言の自由を有す。此故に世間又文學的活動にして、佛國革命に似たる現象あるなし。然れども數奇無名の士、時好に平か

ならざるものあつて、然も機緣未だ熟せず、胸中の畫策既に成算あるを、空しく詩囊に盛り括つて、袖手知らざるが如くす。かくの如きもの一朝にして筆を得、墨を得、白紙を展ずる事を得て、鏘鏗一家言を机上に落し來るとき、天下以て大反動となす事あり。然れども是亦實現的反動に過ぎず。其人に在つては固より漸次の推移のみ。自然の傾向のみ。

（例外の反動にして此原則を應用する能はざる場合一あり。愛の何等の源因なく突然として憎に變じ、憎の寸毫の理由なきに愛に變ずる場合を云ふ。Prof. James は其著 *The Varieties of Religious Experience* に於てかゝる例を擧げたり。（一七九頁）曰く某なるものあり、二年間一女子を愛したるに、一日忽然として其愛を失却して遂に回復するを得ず。女より寄贈せる手翰及び物品を悉く火中に投じて已めりと。Starbuck は之に反して其著 *The Psychology of Religion* 一四一頁に、憎念の突如として愛情に變化せるの例を引けり。曰く某あり。知る所の女教師某を厭ふ事甚し。一日兩人廊下にて、はたと出會す。女教師に特異の擧止動作あるにあらざりしも、其時より不圖之を慕ふに至れりと。斯の如きは漸移の原則を以て說明すべからざるが如し。James の解釋によれば此現象を以て識域下の胚胎となすに似たり。是漸移論を識域下に應用せると異なるなし。只識域下の事に關しては漸移を立すると共に何事をも立し得べくして、而して遂に之を驗するの期なきが故に余は此說の余に近きにも關はらず、贊否を表する能は

ず。Starbuck は此現象を以て特異なる腦作用が無意識に發達して潰裂せるものとす。此說の當否は門外漢たる余の知る所にあらず。文壇に於てかゝる例外の反動と見做すべきものゝ起るや否やは疑問なり。故に之を詳論するの要なかるべし。)

(四)第四の反動は嚴正なる意義に於て反動的なるに於て第二の場合に似たり。當下の意識が焦點にとゞまるにも關はらず其微弱なるの點に於て、發展を盡したる第一の場合に似たり。換言すれば刺激の强烈なるよりして生ずる第二と、焦點意識の精力消耗より起る第一とを併せたるが如きものなり。從つて別項を設けて之を論ずるの必要なきやも知るべからず。吾人が當下の意識に倦んで、しかも習慣因襲の源因より、わが倦みたる事を悟らず、事實上倦みたるにもかゝはらず、之に滿足して動かざるとき、突然强烈なる刺激に逢ひて直ちに新意識に急轉する事あり。吾人が常食とする米飯は、幼時より老年に至つて日々變る事なし。事實を云へば吾人は斯く迄に飽き果てたるものを他に思考する能はざる程に陳腐なるものなり。それにも關はらず吾人は普通の場合に於て別段の不滿足なく膳に向つて箸を上げて怪しまず。如何となれば如何に陳腐なるも、米飯に代ふべき暗示を何處よりも得る能はざるが故なり。吾人は陳腐の極遂に陳腐を忘れて三度の茶椀に米飯を盛つて平然たるものなり。此故に米飯は一見吾人に對して大勢力あるが如くにして、實は甚だ微弱なる影響を有するに過ぎず。もし一朝にして之に代るべき仙醬甘露の出現するあ

らんには、吾人は雀躍して彼を去つて此に就く事猶草屣を捨てゝ玉履を踏むが如くならん。Rosaline を忘れて Juliet に奔れる Romeo は正に此運命に際會せるものなり。

Ruskin が不用意に大自然の靈と邂逅して、妙機の契合を得たるとき、其心境の轉化實に斯の如きものありしに似たり。彼は *Praeteria* (卷一、九七頁)に爾時の狀況を述べて曰く。「市街の西部なる逍遙園に出でたるは日沒に近き頃なり。足下に Rhine を望めば平野西南に開いて眼界宏豁なり。皐阜起伏、波の如きを極めつくして大地の蒼天に連なる邊に至れば——突然として——。同行のものは一人も寸時だに是を以て雲と見極めたるものなし。明かなる地平線上に、鮮やかなるは水晶の如く、落暉の薔薇を受けて紅ゐなるを。わが心に描けるもの、わが夢に慕へるものは語るに足らず、無限の距離に彼是を隔てたるを覺ゆ。——失樂園も斯の如くに美しからざるべく、神聖なる死の國の圓滿なる天界も斯の如く莊嚴ならざるべし。

「余の如き少年に取つては、是よりも幸福に、始めて人生の門戸を潛り入らん事、古今を通じて想像し得べからず。個人の性癖は固より一代の影響に關す。年代同じからざれば斯の如くに山を慕ひ、斯の如くに山中の人を愛する少年は生れんと欲するも生れ得べからず。自然に對して切切の情を寄するは Rousseau に始まる、貴賤上下の別を排して、靈に於て又肉に於て、汎く雅俗を愛するは Scott に始まる。La Fontaine の St. Bernard は其少年の眼を放つて Mont Blanc

を仰ぎたるとき、Mont Blanc の上に聖母の姿を認むべく、Talloires の St. Bernard は Anneey の湖水を見ずして Martigny と Aosta の間に死屍を見るに過ぎず。去れども余に取つては此 Alps と Alps の民は其雪たるに於て美に、其人たるに於て美なり。余は此民の爲めに、又余の爲めに、岩石の外なる天上の玉座を欲せず、岫雲の外なる天使の降臨を願はず。

「身は健にして情は烈、己れに滿足して己れ以外の小兒たるを冀はず、己れに足りて己れ以外の物を求めず、只人生を莊重視するに足る程の悲酸なる經驗を有して、生活の筋肉を弛解するが如くに甚しき苦楚を嘗めず、始めて余が眼に映じたる Alps を以て單に天地の美の現示とするのみならず、天地の美を包含せる大冊子の開卷一章となす底の科學と情緒とを有したる余は、斯の如くにして其夜 Schaffhausen の逍遙園を下れり。神聖なるべく、實利あるべき凡てのものに關して余の運命は此時よりして遂に動かすべからず。余が心情と信念とは、今日に至る迄、わが有する高潔なる衝動ある毎に、和樂利他の思想の念頭に萌す毎に、未だ嘗て此逍遙園と Geneva 湖とを回憶せずんばあらず」と。此言をなす Ruskin は Alps を見るの前、既に Alps と宿世の緣を有して生れ出でたるに似たり。

Grant Allen は科學者にして且つ哲理を談ずるもの、かねて文學を好み藝術に遊べり。然れども彼の藝術に歸依するや、其突然なる眞に意外なるものあり。彼を敍するものゝ言に曰く。(余は

此引用の出所を失念したる故、著書と著者の名を明記する能はず。)「其始め彼は單純なる科學者に過ぎず。自然の推理的研究に關してはあらゆる方面に對して興味を有したりと雖ども、藝術の美に至つては微塵も解する所なかりき。彼は藝術を以て迂愚近くべからざるものとし、藝術に關する談論を以て譫話妄說となせり。然るに彼の伊太利に遊べる頃、一日街頭に雨に逢ふて、之を避くるに由なく、遂に Uffizi の畫館に入れり。入る時思へらく、理を辨じ、事を解するもの何を以てか、時を此中に消するを得んと。斯の如く何等の目的を有せずして館中を彷徨せる彼は、頃刻の後、一畫の前に停止して、其趣味あるを認めたり。是に於てか彼は、其何人が何時に何の爲めに畫けるかを知らんと欲して遂に一冊の目錄を購へり。彼の研究は次に此畫家の手に成る他の幅に及び、遂に其師幷びに之と時を同じうせる畫家に至つて、鋭意觀覽日の移るを覺ざるうちに、閉館の時刻逼つて出場の已を得ざるに至れり。街上に追ひ出されたる彼は獨語して云ふ。必竟ずるに藝術は興味あるものなりと。彼が餘生を擧げて藝術に歸依せるは此時より始まる」と。佛家の言を藉りて云へば Allen は實に藝術鑑賞の因を具せるもの、但鑑賞の緣をかきたるが爲めに荏苒として歲月を勃窣理窟の中に費やせるに過ぎず。一旦驟雨に逢ふて因緣和合、俄然として漆桶を拔く。世間往々にして此現象を見るは何人も否定せざる所ならん。推移は漸次ならざるべからずとの原則と反動との關係は略之を悉くすを得たり。因つて此章を終る。

第六章　原則の應用（四）

此章の目的とする所は焦點意識に競爭ありと云ふ原則を敍說するにあり。前章に於て推移の漸次ならざる可からざるを證明せる時、人間活動の諸方面にわたつて種々の例を擧げたるが故に、此章に言はんと欲する所の事實は暗に前章に證明せられたるに近しと云ふも不可なしと雖ども、こゝに別章を設くるは此問題の興味多くして吾人の注意を惹く事大なるが爲なり。此競爭は少時間の個人意識をとつて之を解剖的に檢査するとき尤も明瞭に其眞相を發現するを見る。こゝに一個のFあつて意識の波頭に住するとき、取つて之に代らんとするもの、卽ちF′としてFに繼で起るものは雜然と群がり來つて其多きに堪へざるの觀あり。あるときはFの聯想する所、質に於て、形に於て、もしくは抽象的なる關係に於て、簇として識末より相驅逐して向上に勢力を張らんとする事、猶水底の瓦斯が波頭に潛り出でゝ泡沫と消ゆるの遲きを恨むに似たり。あるときは體內臟器の刺激、胃痛、空腹、行屎送尿の感、忽ちにして他を壓倒して頂點に霸を稱する事あり。あるときは身外周邊のもの、炭火の熱、墨汁の色、樹頭の風、天日の麗、地殼の紋、森羅萬象を盡くして吾に逼りて、吾が注意を强請す。讀書專念、忽ち蚤に刺されて驚くは、蚤が意識の天下を

領したるに異ならず、構想一意、咄嗟奔馬に魂を消するは、馬が意識の天下に王たるに過ぎず。吾人の意識界は斯の如く不斷の修羅場にして、王霸の起仆は終生を窮めて、盡くる期なし。

一代の風潮亦斯の如く、文界の流派亦斯の如くにして明滅去來す。かの十九世紀の初期にあたつて文界にあらはれたる浪漫典型二派の爭の如きは此種の現象として尤も興味あるものなり。こゝに其爭の、自然なる反響として、小說中にあらはるゝに至つては、特殊なる此方面の研究者たる吾人に取つて、更に一層の興味あるものなり。之を小說中に求めて二例を得たり。一を Mrs. Gaskell の *Cranford* とし、一を Thackeray の *The Newcomes* とす。

Cranford 之曰く。

"When the trays reappeared with biscuits and wine, punctually at a quarter to nine, there was conversation, comparing of cards, and talking over tricks; but by and by Captain Brown sported a bit of literature.

'Have you seen any numbers of *The Pickwick Papers*?' said he. (They were then publishing in parts.) 'Capital thing!'

Now Miss Jenkyns was daughter of a deceased rector of Cranford; and, on the strength of a number of manuscript sermons, and a pretty good library of divinity,

considered herself literary, and looked upon any conversation about books as a challenge to her. So she answered and said, 'Yes, she had seen them; indeed, she might say she had read them.'

'And what do you think of them?' exclaimed Captain Brown. 'Aren't they famously good?'

So urged, Miss Jenkyns could not but speak.

'I must say, I don't think they are by any means equal to Dr. Johnson. Still, perhaps, the author is young. Let him persevere, and who knows what he may become if he will take the great Doctor for his model.' This was evidently too much for Captain Brown to take placidly; and I saw the words on the tip of his tongue before Miss Jenkyns had finished her sentence.

'It is quite a different sort of thing, my dear madam,' he began.

'I am quite aware of that,' returned she. 'And I make allowances, Captain Brown.'

'Just allow me to read you a scene out of this month's number,' pleaded he. 'I had it only this morning, and I don't think the company can have read it yet.'

'As you please,' said she, settling herself with an air of resignation. He read the account of the 'swarry' which Sam Weller gave at Bath. Some of us laughed heartily. I did not dare, because I was staying in the house. Miss Jenkyns sat in patient gravity. When it was ended, she turned to me, and said, with mild dignity—

'Fetch me *Rasselas*, my dear, out of the book-room.'

When I brought it to her she turned to Captain Brown—

'Now allow *me* to read you a scene, and then the present company can judge between your favourite, Mr. Boz, and Dr. Johnson.'

She read one of the conversations between Rasselas and Imlac, in a high-pitched majestic voice; and when she had ended she said, 'I imagine I am now justified in my preference of Dr. Johnson as a writer of fiction.' The Captain screwed his lips up, and drummed on the table, but he did not speak. She thought she would give a finishing blow or two.

'I consider it vulgar, and below the dignity of literature, to publish in numbers.'

'How was *The Rambler* published, ma'am?' asked Captain Brown, in a low voice,

which I think Miss Jenkyns could not have heard.

'Dr. Johnson's style is a model for young beginners. My father recommended it to me when I began to write letters — I have formed my own style upon it; I recommend it to your favourite.'

'I should be very sorry for him to exchange his style for any such pompous writing,' said Captain Brown.

Miss Jenkyns felt this as a personal affront, in a way of which the Captain had not dreamed. Epistolary writing she and her friends considered as her *forte*. Many a copy of many a letter have I seen written and corrected on the slate, before she 'seized the half-hour just previous to post-time to assure' her friends of this or of that; and Dr. Johnson was, as she said, her model in these compositions. She drew herself up with dignity, and only replied to Captain Brown's last remark by saying, with marked emphasis on every syllable, 'I prefer Dr. Johnson to Mr. Boz.'

It is said — I won't vouch for the fact — that Captain Brown was heard to say, *sotto voce*, 'D—n Dr. Johnson!' If he did, he was penitent afterwards, as he showed by

going to stand near Miss Jenkyns's arm-chair, and endeavouring to beguile her into conversation on some more pleasing subject. But she was inexorable. The next day she made the remark I have mentioned about Miss Jessie's dimples."—Chap. i.

篇中の Captain は新派を代表するもの、Jenkyns は舊派を慕ふもの、兩人の會話は其好む所に焦點を置いて相下らざるが故に、會話と云はんよりは寧ろ戰爭なり。而して此兩人の戰爭は即ち當時の集合意識の戰爭に過ぎず。*The Pickwick Papers* の世に公けにせられたるは一八三〇年頃なるは人の知る所なるべし。而して *The Pickwick Papers* の如き作物は、是より以前未だ嘗つて文界にあらはれたる事なき特色を有するが故に、趣味の古きを繰り返して滿足せるもの、或は推移して全く古きを離るゝ能はざるものと、古きに厭いて出來得る限り新に就かんとするものの間には劇甚なる戰なかる可からず。眼を大局に注いで百年を一瞥に了得し終るものには兩者の成敗歷々として之を掌に指すが如く、寸翳の明を遮ぎるものなしと雖ども、因果の渦中に盤桓するが爲め、推移の順序として、自然より舊を慕ふ可く命ぜられたる少數もしくは多數の讀書子は大勢の非なるを知らず、敗滅の必すべきを悟らず、頑として落日を認めて天に中すとなす。此故に彼等は戰はざるべからず。一旦事去り時過ぎて、一回頭すれば、事毎に非に、時毎に不可、是に於てか始めて喟然として嘆をなす。しかも猶且つ天運の推移なるを辨ぜずして、人事計畫の當

を得ざるが爲めとなす。如何となれば趣味は理にあらず。悖理は說いて以て理に服せしむべしと雖ども、趣味は好惡なり。好惡はある意味よりして人間の一部にあらずして人間の全體なり。理非曲直の嘴を入れて左右すべきにあらず、成敗興廢の利害を說いて其愛憎を變ずる能はず。好むが故に好むに過ぎずして、しかも徹底より好むが故に、此を移さんとすれば人間全體を移さゞるべからず。人間全體を移さんには、趣味の意識が自然に彼を去つて是に就くを待たざるべからず。世事轉變の際、人と共に移る事を知らず、しかも移る可からざるの理由なくして、往々舊になずんで無意味に新に抵抗するものあり。此輩死に至つて悔ゐざるは蓋し之が爲めなり。

Thackeray の寫せるも亦此戰を個人の會話として小說中に織り込める新舊兩趣味の衝突なりとす。Colonel Newcome は久しく印度に在りしもの、曾ま英京に歸り來つて其子 Clive の朋友と相會し、是等青年の、文學的傾向に於てわれと大に異なるを發見して平かなるを得ず。著者其狀を敍して曰く。

"Sometimes he would have a company of such gentlemen as Messrs. Warrington, Honeyman, and Pendennis, when haply a literary conversation would ensue after dinner; and the merits of our present poets and writers would be discussed with the claret. Honeyman was well enough read in profane literature, especially of the lighter

sort; and, I daresay, could have passed a satisfactory examination in Balzac, Dumas, and Paul de Kock himself, of all whose works our good host was entirely ignorant, —as indeed he was of graver books, and of earlier books, and of books in general, —except those few, which, we have said, formed his travelling library. He heard opinions that amazed and bewildered him: he heard that Byron was no great poet, though a very clever man: he heard that there had been a wicked persecution against Mr. Pope's memory and fame, and that it was time to reinstate him; that his favourite, Dr. Johnson, talked admirably, but did not write English; that young Keats was a genius to be estimated in future days with young Raphael; and that a young gentleman of Cambridge who had lately published two volumes of verses, might take rank with the greatest poets of all. Doctor Johnson not write English! Lord Byron not one of the greatest poets of the world! Sir Walter a poet of the second order! Mr. Pope attacked for the inferiority and want of imagination; Mr. Keats and this young Mr. Tennyson of Cambridge, the chief of modern poetic literature! What were these new dicta, which Mr. Warrington delivered with a puff of tobacco-smoke; to which Mr.

Honeyman blandly assented, and Clive listened with pleasure? Such opinions were not of the Colonel's time. He tried in vain to construe 'Œnone,' and to make sense of 'Lamia.' Ulysses he could understand; but what were these prodigious laudations bestowed on it? And that reverence for Mr. Wordsworth, what did it mean? Had he not written 'Peter Bell,' and been turned into deserved ridicule by all the reviews? Was that dreary 'Excursion' to be compared to Goldsmith's 'Traveller,' or Dr. Johnson's 'Imitation of the Tenth Satire of Juvenal?' If the young men told the truth, where had been the truth in his own young days, and in what ignorance had our forefathers been brought up? Mr. Addison was only an elegant essayist and shallow trifler! All these opinions were openly uttered over the Colonel's claret, as he and Mr. Binnie sat wondering at the speakers, who were knocking the gods of their youth about their ears. To Binnie the shock was not so great; the hard-headed Scotchman had read Hume in his college days, and sneered at some of the gods even at that early time. But with Newcome, the admiration for the literature of the last century was an article of belief, and the incredulity of the young men seemed rank blasphe-

my. 'You will be sneering at Shakespeare next,' he said: and was silenced, though not better pleased, when his youthful guests told him, that Dr. Goldsmith sneered at him too; that Dr. Johnson did not understand him; and that Congreve, in his own day and afterwards, was considered to be, in some points, Shakespeare's superior. 'What do you think a man's criticism is worth, sir,' cries Mr. Warrington, 'who says those lines of Mr. Congreve about a church—

> "How reverend is the face of yon tall pile,
> Whose ancient pillars rear their marble heads,
> To bear aloft its vast and ponderous roof,
> By its own weight made stedfast and immovable;
> Looking tranquillity. It strikes an awe
> And terror on my aching sight"—et cætera—

what do you think of a critic who says those lines are finer than anything Shakespeare ever wrote?' A dim consciousness of danger for Clive, a terror that his son had got into the society of heretics and unbelievers, came over the Colonel; and then

presently, as was the wont with his modest soul, a gentle sense of humility."

—*The Newcomes*, chap. xxi.

是老 Colonel と當時の青年とを藉り來つて、兩者の間に横はる趣味の相異を敍說せるに過ぎず。古より今日に至つて世の暗示を驩迎する事、大旱に雲霓を望むが如く、翕然として一朝に推移するは蓋し極めて鮮なからん。社會を構成する個員は年齒に於て、天賦に於て、教育に於て、習慣に於て、同じき能はざればなり。此數點に於て同じき能はざるが故に、此不同に支配せらるゝ意識の推移も亦上下を通じ、四方を極めて同刻同次なるを得ざればなり。此故に一暗示を得るの前に當つて、既に多少の爭鬪を個人意識の波線上に見るのみならず、更に此暗示を集合意識の上に及ぼさんが爲めには、普通の場合に於て、劇烈なる反抗を喚起するを常態とす。此故に士苟も卓落不群にして、人の籬下に立たず、他の門墻に走らず、毅然として一家の言をなさんとせば、あらかじめ世を敵にするの覺悟なかるべからず、敵を壓倒するの氣魄と精力なかるべからず。Wordsworth 曰く如何なる作家も其偉大にして獨造的なる點より云へば、他をして吾を愛讀せしむべき趣味を創建せざる可からず。古來既に然り今後も然らざる可からずと。余の言語を以て之を翻譯すれば彼の所謂獨造的とは嶄新なる暗示に過ぎずして、創建とはFを倒して崛起するF′の意義に異ならず。Chapman の詩に曰く。

"No truth of excellence was ever seen
But bore the venom of the vulgar's spleen."

と。是の謂なり。世に先んずる一分の才あつて、俗を拔く事半歩に過ぎざるも、此材幹を振ひ、其見地に住せざるものは、天の己れを空うせざるに、進んで天を空しうせるの責を負はざるべからず。天に負かざらんと欲せば一分は一分の爭を敢てせざる可からず、半歩は半歩の戰を挑まざる可からず。一分の人も半歩の人も等しく此戰爭を經んが爲めに天意を以て人間に生れたるものなり。然れども戰爭は遂に戰爭に過ぎず、戰爭のうちに成功の意義を含めるものなし。從つて俊才奇傑往々にして中道に挫折して凡庸の群に入る。凡庸の群に入るとき天下は泰平なればなり。凡庸は處世の方針として尤も安全なればなり。古諺に君子危に近よらずと云へるは是が爲めなり。君子は凡庸の驍將にして、かの損害を怖れ、財帑を土中に埋めて、貧を守るの士と其趣を同じうす。安き事之に過ぎたるはなくして癡なる事之に及ぶものなし。

君子の事は余之を知らず。先に論じたる天才の意識に至つては、出處顯晦君子人の如くしかく如意なる能はざるが如し。彼等は成功と失敗とを顧みるの餘裕なく一意に自己を實現せんと欲して已む能はざるものなり。資性既に然り。狂と呼ばれ、愚と呼ばるゝを好まざるも、之を奈何ともするに由なし。而して天才の意識する所は能才のそれよりも世俗を去る事一層遠きが故に之を

貫かんが爲めには水準以上の猛烈なる爭鬪を敢てせざる可からず。此點より觀察したる天才は人間として尤も不幸なるものなり、憐むべきものなり。吾人が天才を謳歌するは、之を遙かなる天の一方に安置して、其既成事業の餘光がわが頭上を射るに、回頭し低徊し、想像して、遂に思慕の情を起すに過ぎず。自から進んで天才となり、もしくは之を羨やんで其位置を得んと欲して謳歌するは誤まれるの甚しきものなり。今人の認めて天才となすものを過去の歷史に求むるに、孤憤、窮愁、奮鬪、迫害の痕迹は、瞭として爭ふ可からず、燦として滴々の血に苦痛の一生を鮮やかに後昆に遺すが如し。然れども是單に世に傳はれる天才に就て云ふに過ぎず。もし夫れ傳はらざるものに至つては、世俗の反抗を受けて江湖に漂浪し、閭鄽に沈淪して斷蓬の如くならざるもの殆んど稀なり。古より今に至つて草莽に埋沒し陋巷に湮滅せる天才の數は蓋し擧げ易からざる程に夥しからん。天才の出づる必ず歡迎を得べしとは——少なくとも死後に必ず謳歌せらるべしとは誤まれる世俗の斷見に屬す。彼等は今代に傳はれる天才以外に、天才は未だ嘗て生れたる事なしと思へばなり。余の見る所を以てすれば、天才にして生前に名なく、身後に存せざるもの十の二三に留まらざるべし。但し彼等は名によつて動くにあらず、不名譽の爲めにも動く、動かざれば生活の意義は彼等にとつて無なればなり。天才は尤も執着心に富めるものなるが故に、彼等の戰爭は必ず猛烈なり。而して衆寡敵せざるは一般の原則なるが故に、天才の多くは猛烈なる戰

爭を命のあらん程持續して遂に窮途に斃るゝ事多しとす。茲に彼等の集合意識の一般と戰へる例二三を擧げて實證とす。但し是等は皆天才にして戰に勝てるものなり。其蹉躓せるものに至つては世間より存在を認められざるが故に之を奈何ともする能はざるは論なし。

Lyrical Ballads（一七九八年）は詩界の刷新者として、文壇を聳動せるもの、當時の集合意識が之に對して如何なる態度に出でたるかを見て以て其戰狀を卜すべし、*The Monthly Review*（一七九九年、五月）之を評して曰く。集中收むる所の詩篇は、其空想的なるを以て、其流暢なるを以て、又其情操を以て、吾人の感興を惹く事多大なるを疑はずと雖ども、著者が模倣せる古昔民謠詩人の時代に於て、未だ嘗て夢想する事能はざりし（著者註卽ち今代の發達にかゝる）高等なる作詩法を犧牲に供して之を鼓吹するの必要を認めざるものなり。粗野怪異なる Chaucer の韻語を踏襲して得たりとなすは獨り詩歌を墮落せしむるのみならず、かねて英語を墮落せしむるものにあらずや。今、古詩人を近代化せずして却つて Dryden, Pope, Gray が咏じたる高雅なる題目と優麗明媚の調を變じて十四世紀の方言と作風とに改めば果して如何。過去に逆行する事斯の如くにして吾人の所得如何を顧みよ。古代のメダルを模せんと欲せば錆は必要なる屬性なり。然れども三四百年前の詩を模せんと欲して、人工を竭くして錆氣を現代の詩に加ふるは、巧妙なる贋作と評するより以上に賞讃の價値を有せざるものなり。……」と以て其風潮を見るべし。

同雜誌が Coleridge の *The Rime of the Ancient Mariner* に加へたる評語に曰く。「吾人は此詩に於て微妙なる風韻を認めざるにあらず。然れども其荒唐不稽にして且つ支離滅裂なるは事實なり。一篇の趣意那邊に存するかを辨ぜず。或は婚禮の賓客をして饗應にあづかるを得ざらしむるの惡戯ならざるやを思はしむ。……」と。當時の群盲は全く空冥縹緲の致を解せざりしなり。

同雜誌（一八一七年、正月）の *Christabel* を評するや曰く。「鹵奔蕪雜なる斯の如きは遂に堪ゆべからず。況んや Lord Byron の如き天才の推賞を蒙るをや。只詩道疾くに廢れて、詩法を破るよりは之を守るものゝ却つて迂愚の極と認めらるゝの世なるが故に多言せず……」と、典型派の小刀細工を以て、醇正なる詩格と思へる世間なるが故に評家に此言あり。

Francis Jeffrey の *The Edinburgh Review* 紙上に（一八〇二年、十月）Southey の *Thalaba the Destroyer* を評するや妖譎讀むに堪へずとなして曰く、「此種の譚或は小兒を樂しましむるに足るものあらん。其奇蹟怪聞に富んで、事件の層々疊出するは、一見、人の注意を惹くが如しと雖ども、此注意は新奇の念と共に暫くにして消滅して、未だ好奇の心に滿足を與へざる先に疲勞を覺ゆる事稀ならず」と。所謂浪漫的話題の當時に容れられざりしを察すべし。Jeffrey は此評論中に、獨り Southey を非難せるのみならず、併せて一般の新派を攻擊せり。彼思へらく新派は簡易樸直を旨とすと雖ども、彼等の簡易樸直は虛飾に對するの簡易樸直にあらずして、藝術に對す

る（卽ち非藝術なる意義に於ての）簡易樸直なり。彼又思へらく下賤なる農夫賈人の情操は詩に咏じ得べきにあらず。本來詩的ならざればなりと。批評の權輿として一代に睥睨せる Jeffrey の語を讀んで、之を今代の評論と比較するときは殆んど隔世の感あるを免かれず。

Byron の *Hours of Idleness* は固より少時の作、彼の詩才を代表するに足るものなきは論を待たず、其疵瑕亦掩ふ可からざるものあるべしと雖ども Lord Brougham の *The Edinburgh Review*（一八〇八年、正月）評して「この貴公子の詩は神も人も共に許す事能はざる一種の詩なり。而して彼は此一種の標準を嚴密に守つて、神にも人にも近づく事なし」と云へるが如きは、全歐を席捲せる大詩人を評するの語にあらざるを見るべし。

Jane Austen は今代の認めて第一流の作家となして疑はざるもの、其著書の如何にして世に公けにせられたるかを思へば、亦以て這裏の消息を審かにするを得べし。Austen はもと文を售つて口を糊するものにあらず。只消閑の具として筆硯に親しめるの結果、十八世紀末に於て既に二三小說の稿を脫せり。其 *Pride and Prejudice* を草するや、其父一見善と稱し、之を Cadell にすゝむ。Cadell は原稿を一讀するの勞をさへ厭ひて直ちに出版を拒絕せりと云ふ。父亦放棄して顧みず。從つて一代の傑作も剞劂の榮を得る能はずして、机邊に橫はるの久しき遂に一八一三年に至れり。*Northanger Abbey* の如きは其運命の薄倖なる却つて之に過ぐるものあり。稿を購

へるは Bath の一書肆にして、購へる價は僅かに十磅に過ぎず。しかも此書肆は *The Vicar of Wakefield* の所有者と同じく、草稿の吾手に落ちしを悔ゐたるか、又は全然忘却せるか、幾年の久しき之を筐底に藏して嘗て活字に付する事なかりしを、Austen の兄弟が最後に買ひ戻せるに過ぎず。二三の脫稿せる小說を有せるに關はらず、*Sense and Sensibility* が處女作として發表せられたるは是が爲めなり。此處女作に因つて著者の得たるは僅かに百五十磅に過ぎず。然も Austen は過大の高額とせり。天才の冷遇せらるゝや概ね斯の如し。然れども一八一五年に至つて *Emma* のあらはれたる時 *The Quarterly Review* は一論文を草して大に之を推賞せり、其一節に曰く、「著者が世間を解するの才氣と、篇中の人物を活動せしむるの技倆とは、或點に於てかの繪畫に於ける Flemish 派を想起せしむ。題目は必ずしも優雅ならず、又決して崇高なる能はず。然れども自然を描き得て、自然に達せるのみならず、其精確にして細緻なる大に吾人の心を悅ばしむるものあり。此特質は全篇に充牣するが故に一節を抄して之を例證しがたし。」是に由つて之を見れば一八一五年に至つて Austen は既に文壇の意識を動かして、之を吾が方向に推移せしめたりと云ふも不可なきが如し。

守舊派の新作家を毒害する事斯の如きものありと雖ども、斯の如きは未だ以て甚しとなすに足らず。詩人にして尤も惡辣の毒鋒にかゝれるものを可憐なる天才 Keats とす。彼の *Endymion*

を公けにせるは一八一八年なり。年の四月に至つて *The Quarterly Review* の作家に加へたる暴語は、其沒鑑識なると、其驕慢なると、其殘酷なるとに因つて長く病詩人の爲めに後代の同情を惹くものなり。*Endymion* を評せるものは自から Keats の詩を讀まずと云へり。讀まんと欲するも讀む能はずと云へり。しかも彼を品して曰く。「著者は Hunt の模倣者なり。然れども解すべからざるは却つて之に過ぎ、突兀たるは之と相若き、散漫なるは之に倍し、冗長にして不合理なるに至つては之に十倍す。Hunt は厚顏にも自から批評の椅子に倚りて自家の標準を以て自家の詩を律せんとせりと雖ども、其云ふ所多少の意義を有せり。Keats に至つては嘗て斷見を主張したる事なきを以て、詩例を示して其主張を維持するの必要なきものなり。此故に彼の囈語は全く醉狂と云はざる可からず。彼は詩の爲めに詩を作るに過ぎずして、其 Hunt の狂批評の噬む所となるや、其詩の狂せる事却つて Hunt に過ぐるに至る。」と、是を批評の冒頭とす。以て其侮蔑と嘲笑とに富めるを見るべし。余はとくに翻譯の勞を避けて、其調の如何に讀者の耳に響くかを示さんが爲め、最後の一節を原語の儘引用して、此不愉快なる異例を終るべし。"But enough of Mr. Leigh Hunt and his simple neophyte. If any one should be bold enough to purchase this 'Poetic Romance,' and so much more patient than ourselves as to get beyond the first book, and so much more fortunate as to find a meaning, we entreat

him to make us acquainted with his success. We shall then return to the task which we now abandon in despair, and endeavour to make all due amends to Mr. Keats and to our readers." 是を批評の末節とす。詩風の漸移、幾多の小波動を描きつくして、以て今日に至つて、Keats を謳歌するもの比々皆是にして、此評論を讀むもの又一人の存するなし。天命の吾人を弄する實に斯の如きものあり。（余思へらく、詩の善惡は暫く措く、評の當否も亦論ぜず。只此評家の態度に至つては陋劣嫉むべきものあり。何となれば其本意の存する所を察するに、作家を啓發せんが爲めにもあらず、眞率に自己の嗜好を敍述するにもあらず。單に他の感觸を害し、新進作家の弱きを壓して自から快を取らんとするが爲めなればなり。もし Keats にして、評家のこの態度に出づべき相當の刺激を與へたる事ありとせば、彼の暴慢なるも幾分の諒とすべきもの なきに非ずと雖ども、Keats は未だ嘗て此評家に向つて寸毫の無禮だに加へたる事なきなり。無禮を加へざるは無論、彼は特に其自序に於てわが才分の足らざると、經驗の乏しきとを自白して禮を一般に致せり。しかも此批評家は此禮讓ある作家を——其謙遜して辯疏せる點に捕へて嘲弄を逞しうせり。文界此無賴漢を出す、不祥之より甚しきはなし。之を打殺するは獨り Keats の爲めのみにあらず、亦吾人の爲めなり。而して又社會人類の爲めなり。）

Lyrical Ballads を著はして世の嘲笑を買ひたる Coleridge が自から Tennyson を評するに當

つて抑損の意を洩らしたるは、奇異の現象にして、推移の一日も停滯せざるを示すと同時に、新作家に戰爭なき能はざるを證するものなり。評語は載せて *Table Talk* 中にあり。曰く。「寄贈にかゝる Tennyson の詩は未だ通讀の機を得ず。去れども余が一覽せる限りにて云へば多量の美點を含めるを疑はず。不幸にして彼は音律の何たるを解せずして詩を作れるが如し。假令在來の舊格に遵つて、作爲するも、もし詩律家にあらざるよりは、格調をなす事難きを以て普通とす。然れども詩律の要する所のもの如何を考へずして妄りに新格を樹立せんとするは暴と云ふの外なし。余は彼の成功を望む事切なるが故に、ことに彼に忠告せんとするは——實際しかせざれば彼は遂に詩人たり得べからず——今より二三年の間は一二舊式にして明晰なる詩格に據りて句を綴らん事なり。例へば heroic couplets の如く、octave stanza の如く、又 *L'Allegro, Il Penseroso* の octosyllabic measure の如し。斯の如くせば彼は詩律の何たるを知らずして、自然に詩律の感覺を得る事猶 Eton の學生が Ovid, Tibullus を暗んじて相應なる羅甸詩を作るが如くなるべし。」と、是に由つて之を觀れば兩者の詩律に對する觀念は一致せざりしものゝ如し。（興味あるは一八三一年、一月 *The Westminster Review* 所載、*Poems, Chiefly Lyrical* の批評なり。此評家は詩に real science of mind の必要なるを論じて、過去四十年間の詩は此科學的精神を含むの多少によつて其生命の長短を計るべしと論斷せり。此精神を缺くものゝ存在し易からざるを例證

せる彼の語に曰く「Coleridge と Wordsworth の作詩の大部分は既に死せり、又死なんとしつつあり。然れども玆に其精神に於て全然哲學的にして且つ詩的なる小冊子あり。云々」と。小冊子とは無論 Tennyson の詩集の謂なり。彼を小兒視せる Coleridge の却つて、此小兒の下に据えられんとする傾向あるは意識の競爭に Tennyson が勝利を制しつゝありしを見るに難からず。)

少しく方面を變じて、藝術の領域に入るも亦一樣の觀あり。Pre-Raphaelites の始めて展覽會を開くや、展覽に供せる繪畫の一面だに賣る能はざりしは世人の知る所なり。甞て Holman Hunt に關する書籍を繙けるに、書中云へる事あり。彼は *Rienzi vowing to avenge the Death of the Brother* に次ぐに *Christian Priests escaping from Druid Persecution* を以てせるに、他の二家の作品と共に、非難攻擊を受くる事急霰の如く甚しかりき。Charles Dickens は *Household Words* に於て、他は新聞に於て、雜誌に於て、悉く之を罵しらざるはなし。是一八五〇年の事に屬す。超えて翌年 Hunt の *Two Gentlemen of Verona* を出品するや、世間の彼と Millais を目する事蛇蝎の如く、爲めに二三の批評家は彼等の作品を Academy より斥けん事を逼るに至れり。有名なる Ruskin が三たび書を *The Times* に寄せて、評家の無智と、不正と、嫉妬とを暴露して、公衆の同情を二家の上に轉じたるは此際の出來事に屬す。Rossetti は平素世俗の評に耳を借さゞるもの、此時よりして益高踏して俗に近づかず。Millais は平然として例に因つて四面楚歌

の裏に立ち、Hunt は周圍の喧擾なるに應じて毫も狼狽せる景色なし。——Raphael 前派の始めて獨立の旗幟を翻へすや其危うき事、實にかくの如きものありしなり。

佛の名流 Millet も亦一生を落魄の裡に送りしもの、其始めて寫實家としてあらはるゝや、天下一人の彼を顧みるものなし。是に於てか彼は實際生活を究めんと欲して、去つて田園のうちに隱れ、貧に處し、名を忘れ、遂に勞働者の家に死せり。彼を解し得たるものは高尙なる二三の評家ありしのみ。彼の死して屍の未だ土中に安置せられざるに、運命は不遇の畫家を嘗弄して、順逆の境を一夜に變じ、有名なる *The Angelus* に二十四萬圓の價格を附するに至れり。

Turner と竝び稱せられて、山水畫に一機軸を出したりと稱せらるゝ Constable も亦生前に意の如き成功を收むる能はざりしは人の記憶する所なり。彼の *The Hay Wain* と *The White Horse* を描くや公衆も評家も冷然として取り合へるもの更になかりしは事實なり。彼の友 Archdeacon Fisher 之を Paris に送らん事を勸めて曰く假令多少の價を減ずるも之を Paris に賣るにしかず、これ君が名聲を博する所以なればなり。何等の批判力なき愚昧なる英國公衆は、佛人が君の畫を以て國有となすを聞かば、少しく警醒する所あるべければなり。君の誤解するや久し。人は繪畫を見て善しと思ふが故に購ふものにあらず、他人が之を得んと冀ふが故に購ふに過ぎずと。果せるかな、*The Hay Wain* の France にあらはるゝや瞬刻にして天下の耳目を聳動して、一八二四

年の金牌を受くるに至れり。久しく佛人の手に存せざりしと雖ども、始めて此畫を購へるは佛人なり。

尤も悲酸なるは所謂佛國の Impressionist 派が始めて自己を天下に紹介したる初期の歴史なり。此派の今日に優勢なるは邦人の熟知する所にして、ことに Claude Monet の如きは何人も其名を口にせざる事なき程なれども、四十年前を回顧すれば、他の迫害を蒙る事甚しきものありしに似たり。彼等は Salon に出品するの特權だに得る能はず、Academy 派のものは彼等を目して狂人となし、其作品を評して全然美術の法則を蔑視せりと評し、些の保護を與へざりしのみならず、百方其發達を阻害せんと試みたり。彼等は一個の賞牌を得るに途なく、公費を以て其作品の買收を仰ぐが如きは夢想するだに易からざりしなり。近來に至つて漸く Luxembourg の一室を割いて、此派の繪畫を陳列するに至りしと雖ども、夫すら抗議の沸騰に、容易の落着を告ぐる能はざりしと聞く。一八六三年の Salon に此派の繪畫が悉く陳列の榮を拒絶せられたるの際、時の主權者其窮を憐んで之に特別室を與へて之を "Salon des Refusés" と號す。此時 Claude Monet の出品せるは日沒の景色にして題して *Impression* と云ふ。觀者堵の如く Salon des Refusés に集つて嘲笑を逞ふす。"Impressionist" の名是より起る。而して其實冷評の意を含むのみ。

新陳交謝の際に起る爭鬪の例は是にて充分なるを以て其他を言はず。約言するに——暗示は常

に戰ふ。戰なくして暗示を人に及ぼす事は殆んど難し。Tennyson の如き通俗なる詩人と雖ども、亦多少の戰を免かれず。新しき暗示の舊意識を去る遠ければ遠きに從つて戰は劇烈なるべし。要は新暗示が舊意識を打破するか、或は舊意識が新暗示を蹂躙するかの一に歸す。兩者の間隔あまりに甚しければ新暗示は大抵通俗なる集合意識の爲めに壓迫せられ、追窮せられ、遂に剿絶せらるゝを常とす。而して天才の意識は一般を去る事遠きを以て特色となす事多きが故に、彼等は成功するよりも寧ろ失敗するを當然とす。從つて後世に謳歌せらるゝ天才よりも、禽獸と同じく泯滅せる天才の數は夥しからざる可からざるの理なり。

成功の意義。不斷の戰爭は斯の如くにして已まざるうちに、或者は倒れ、或者は起りて、永劫の波紋を無窮に描くを以て常態とす。此戰爭に利あらずして焦點に登るの期なく消滅するものを失敗と名づけ、波頭に主宰するものを成功と云ふ。此故に成功とは他の暗示を排して自から頂上に攀ぢ登りて旗幟を翻へすの謂に外ならず。而して此頂上は漸くにして降下し去るが故に、理論上よりして同一の成功は同程度に永續しがたきものなり。吾人の意識は個人的なると集合的なるとに論なく推移變化を以て特色とするは事實の吾人に敎ふる顯著なる訓則なり。

如何なる意識の成功するかは、時に應じ所に應じて異なるが故に、其内容を指摘するは何人と雖ども能する所にあらず。もし内容を捨てゝ形式より論ずれば、先に擧げたる推移の原則にて既

に之を盡せりとす。然れども先に指示したる數種の推移中、とくに吾人の注意を惹くは、現下意識の自然なる傾向に、尤も調和せる新暗示が勃興せる場合なりとす。換言すれば現下意識の邊末に潛伏して、今にも起らんとするの勢をほのめかすにも拘はらず、依然として半明半晦のうちに、不說不語の不足を感ぜしむる或者あるとき、――突然一人ありて、此不透明なる或物を掌中に攫し來つて、端的に道破せる場合を云ふ。此あるものは既に集合意識の波動線中に伏在して向上的氣勢を有するが故に、もし之に明瞭なる形體を與へ、判然たる秩序を附して世間に放出するものあらんには、天下は翕然として起つて之に應ずるの理なり。わが思念して得ず、憧憬して認めがたく、之を實現せんと欲してしかも其有耶無耶なるに困するとき、推移に一波の長あるもの、先づ目的の堂に登り本尊の龕を開き、麾いて一世を回顧すれば、一世は餓者の攝待にあへるが如く、鐵片の磁石に赴くが如く、燐寸に火を點ずるが如く、電流を導體に傳ふるが如く、忽ちにして同一の意識を焦點に認めて、炳たる事炬火よりも明かなるものあらん。

之を文界に例せばPopeの如く、Byronの如く、Scottの如く、Tennysonの如し。今一々にして其實證を彼等の傳記の中に求むるの煩を避けて、玆にたゞ其最も興味あるものを擧ぐ。Tennysonの死するや無名氏某なるものあり。書を *The Speaker* に寄せて詩人に對する自己の觀想を公けにして曰く。「所謂業務繁多なる余――中年の商人――の貴重なる一日半を費やして、單に彼

の葬儀を見んが爲めに、遙かに二百哩の里程を走れるは人の怪しむ所なるべし。個人として余のTennysonを知るは、余のThackerayもしくはDickensを知ると同じき程度に過ぎざるを以て、彼を目して朋友となす以上は、數千の人も亦彼を目して朋友となすを得べし。此意義に於て彼は今日彼の棺を送れり――彼の余の傍を去りし事は一刻だにあらず。苦鬪寧日なき此四十年を回顧するに、彼の――余は今日彼の棺を送れり――彼の余の傍を去りし事は一刻だにあらず。彼は余の朋友なるのみならず、又余の教師なり。教師にして又余の先導者なり。流轉四十年の間余の心情の變、幾回なるを知らず、變ずる毎に、未だ嘗てTennysonのわが所期に違へるはあらず。余の始め北部より倫敦に來りしとき、暮れんとする空に映ずる大都の光を見んと欲して車窓に倚つて、忽ちに思ひ浮びたるは *Locksley Hall* 中の句なり。余の浪漫的なりしとき――何人も一度は浪漫的ならざるを得ず。――愛の手に斷たれたる「我」の糸の鳴りつゝも消えたるとき、余の心を慰めたるは *Maud* と *Enoch Arden* なり。余が求めて遂に之を得たる理想の婦人は *The Princess* に於て描き出されたるを知る。婚姻の事既に成つて幸福なる長き夕、同じき詩卷を二人の間に分ち、又手を携へて詩人に導かれながらに花多き路を行けり。今日The Abbeyに立てる余は天上の快樂に比すべき昔を以て彼の賜なりとして深く彼に謝せずんばあらず。彼が衣帶を改めて、兄弟の貌を裝ひ余をして再び社會に立つの勇氣を起さしめたるは二三ケ月の後に屬す。余は其前より *In Memoriam*

を讀まざるにあらず、其後も亦幾度となく之を誦せり。然れども、其深意の吾心に刻まるゝは、冷寂なる爐邊に、空しき椅子の傍らに、人なき寢臺を控へて、之を手にしたるの時にあり」と。(E. L. Cary, *Tennyson, His Homes, His Friends and His Work*, p. 255 より譯出す。) 此寄書家は自から公言せる如く文士にもあらず、詩人にもあらず、筆硯と尤も遠かれる實業家なるに徵しても、Tennyson の詩風が時勢に適へるの程度を卜するに難からざるべし。

かくの如く一代の聲望をあつめて、天下の歡迎を受け、平生文字に親しまざるものをすら讀者として數ふるを得るは固より成功の大なるものに外ならずと雖ども、同時に此成功の程度を以て、作家の才をはかるの尺度となしがたきは無論なり。上章に說敍せる理論によるも成功とは個人たるわが意識と社會のそれとが一致するの謂に外ならずして、此一致は必ずしも才の高下を示すものと爲し難ければなり。(たとひ、才の遲速を示す事あらんも。) 既に高下秀庸の尺度となす能はざるときは、成功せる意識は天才のそれとも、能才のそれとも、又は凡才のそれとも斷言しがたき場合少からず。否、余が先に述べたる理論によれば、天才の意識は獨創的內容に富むを常として、個性的色彩を帶ぶる事强きが故に、必ずしも現代意識の將來傾向を暗知して、其傾向の發展せんとする方面に輝揚するを期しがたきのみならず、往々にして之と乖離して一般の嗤笑を買ふは先の實例にて既に明かなり。人を驚かす事狼烟の如く急にして、其忘れらるゝ事、亦斯の如く

急なるものに至つては十の七八にして皆然らざるはなし。「現代の人にして Mrs. A. M. Bennett の處女作 *Anna* (一七八五年) を讀むもの果して何處にかある。しかも此書は出版の當日に初版を賣り盡したりと稱せらるゝにあらずや。或は同女史作 *Vicissitudes abroad* (一八〇六年) を繙き得るもの能く幾人ぞや。然れども發行の日に於て、三十六志の高價を拂つて、之を購へるものは二千人の多きに上れり」と。是教授 Walter Raleigh が其著 *The English Novel* (二七一頁) 中に於て吾人に告ぐる事實なり。數年前物故せる Miss Yonge の *Sir Guy Morville* を著はすや Oxford 學生の熱心に此書を迎へたる意氣は實に驚くべきものありき。某聯隊の如きは一人として之を手にせざる士官なきに至れりと云ふ。Rossetti, Wm. Morris, Burne-Jones の徒亦爭つて書中の主人公を取つて、わがモデルとせりと稱せらる。星移り物遷る事半世紀ならずして又一人の Yonge を說くものなく、*Sir Guy* の存在をすら忘れたるが如し。Lewis の *Ambrosio, or the Monk* (一七九五年) は一代を聳動して、不朽の名作と唱へられたるもの、今人徒らに其名を聞いて、其書を見ず、只 Monk Lewis の渾名を反覆して運命の却つて彼を嘲弄せるを憐むに過ぎず。先に例證せる詩宗 Tennyson に就てすら猶多少の之に類せるものあり。彼の戲曲は當時に在つて大に文界の注意を惹けるもの、Spedding の激賞措かざりしは暫らく言はず、Eliot は之を以て直ちに沙翁の壘を摩して遜色なしとせり。Eliot と關係深き Lewes も亦之と意見を同じうせ

り。Browning は *Queen Mary* を評して白玉の微瑕(A shade of fault)だに見出す事難しとせり。Irving は *Becket* を以て沙翁の *King John* 以上に置き Richard Hutton は *Queen Mary* を *Henry VIII* に優れりとなす。今日の評家 Tennyson の詩を推賞するもの少なしと云ふべからざるも、彼の脚本に於てしかく嘆服の意を表せざるは明かなり。

同時に二三の知己よりは天才を以て目せらるゝにも關はらず、毫も世間の意に投ぜずして不成功に終るもの少なからず。かの Browning の如きは其好例なるべし。*Paracelsus* を著はして後十年、彼はある友人に書を與へて云へる事あり。Forster が *The Examiner* 紙上に其批評を公けにせる迄は、一般の誰彼は皆輕侮の意を以て此作を迎へたりと。又云ふ *The Atheræum* の評家は之を以て朦朧晦澁通じがたしとせるのみならず、單に Shelley を模倣せるに過ぎずと斷言せりと。彼の獨創的なる思想と造語とは、凡庸をして享樂を擅まゝにするを得ざらしめし結果、此失當の侮蔑を招けるは爭ふ可からざるに似たり。彼の著作中尤も難解の聞え高き *Sordello* に關しては世間今猶二三の逸話を傳へて、吾人の一笑を博するに似たり。其一に云ふ。Carlyle の妻君は尤も熱心に此詩を讀めるもの、しかも *Sordello* の男なるか、女なるか、もしくは都會の名なるか、書籍の名なるかを知るに苦しめりと。其二に云ふ。Tennyson は此詩を讀んで僅かに二行を解し得たり。一行は "Who will, may hear Sordello's story told" にして正に冒頭の句なり。一行は "Who would, has heard Sordello's story told" にして正に結末の句なりと。其三に云ふ。Douglas Jerrold の病に罹つて將に癒えんとするや、醫師の許諾を得て、讀書の快を貪らんと欲し、偶爾架上の書を抽いて *Sordello* を得たり。默過數頁にして卷を投じて喟然として嘆じて曰く、病は卽ち癒ゆるに近し、頭腦は遂に用を爲さずと、彼は *Sordello* の解すべからざるを見て、自己の知力が病の爲めに衰耗せるものと誤認せるなり。評家 Chesterton 嘗て之を解して曰く。書籍の批判は時々の流行によつて其趣を異にす。或は褒揚及ばざるの期あり。又は貶譏日も亦足らずとなす。然れどもわれも解し得ず、われも要領を得ずと殆んど萬口にして同一の嘆息を洩らせる事 *Sordello* の如きは古今を通じて其例蓋し稀ならんと。要するに Browning の解すべからざるは、彼の意識する所の、凡を離れて衆と調和しがたきによる。然れども是遂に才の高下を測るの具たるを得ず。評家 Browning と Tennyson を併べ稱して世紀の二大詩家とす。評家の言を以て妥當なりとせば、世に歡迎せられざるを以て天才なきの證左となす能はざるを知るに足らん。故に曰く。成功は才に比例するものにあらず。理論既に然り。事實も亦斯の如し。

第七章　補遺

前章に述べたる推移の順序、種類、并びに例證の外論ずべきもの固より多くして、時日の缺乏と材料の不足より、已を得ず詳論しがたきものを集めて一章とす。

(一)文界に及ぼす暗示の種類。暗示に因つて推移する意識の波紋は千差萬別なるが故に、其內容を具體的に說明するの難きは、猶天才の意識を實質よりして說明するの難きが如し。然れども之を大綱に分つて、とくに文界の意識に限るときは、種別的に其概性を擧ぐるを得るに似たり。如何となれば文界に於ける暗示は文學の內容を構成すること論を待たずして、文學の內容は先に論ぜるが如く、四種の材料を以て成るが故に、あらゆる暗示は皆此四要素の形を以て注流し來るべければなり。

然れども是等の暗示が、如何なる社會の狀況に因つて影響せらるゝかの問題に關しては、こゝに一言するの要ありと信ず。文學は人間活動の一發現に過ぎずして、此發現は單獨に自由の行路を取る事能はず、他の活動の上に其勢力を及ぼすと同時に、他の活動より影響を受くるを以て事實とす。此故にある文學的暗示の源因結果を論ぜんとき、單に文學的潮流のみを眼中に置いて、

他の活動を閑却すれば完全なる研究を爲し難きものとす。此點より見たる文學は社會現象の一なるを以て他の社會現象と關聯して其自動、反動を盡して始めて之を知るを得べし。此故に凡ての歷史家は同時に文學史家ならざるべからずして文學史家は又一般歷史家ならざる可からず。今人間活力の大なる發現を大別すれば(い)經濟的及び科學的狀況(ろ)精神的(哲學及び宗教等より生ずる)狀況(は)政治的狀況等なりとす。是等の大活動にして、文運の推移に關係ある以上は文學と是等の活力とは到底離し難き事論を待たず。

(い)物質的狀況と文學との關係を論ずるに方つて何人も第一に着眼するは Elizabethan literature なりとす。Elizabethan literature の英文學史にあつて空前絕後の盛時なるは普く人の知る所なるが、其起因を察するに當時の物質的狀況に支配せらるゝの多きは論を待たず。(物質的狀況以外に何等の文運に關する活力なしと云はず。例へば宗教問題の如し。女皇卽位の當時迄は宗教の紛爭絕ゆる事なく人心大に動搖せり。宗教は人間の死生を司どる大活力にして、適當の解決を見ざる間は、民意固定せず、風船に乘じて空に漂ふが如し。英國の如き宗教の歷史を有する國民に在つては更に然りとす。故に此問題の解決は大に文運勃興の機を早めたるを疑はず。) 當時商業貿易の隆勢に應じて、民衆の經濟は非常に殷富に赴けるは史家の事實を擧げて保證する所なり。農事の改良と共に、嚴冬の候も猶羊群を飼養するの便を得て、在來の如く鹽魚を常食とするの必

要なきに至り、煉瓦の再發見(一四五〇年)は家屋の改良を促がして、富まざるもの亦硝子、絨緞、枕の使用を知るを得て、好尚自から華麗に、氣象自から雄大に、精神漸く自信を生じ來れり。此自信の會釋なく活動するは當時の文學を一見するものゝ著るしき現象として、直ちに認むる所なりとす。此時に方つて英人霸を海上に西人と爭ひ、所謂 Invincible Armada を擊つて數百の艨艟を海底に沈む。(此戰勝の物質的狀況に負ふ事多きは論を待たず。) 思へらく天下は我有なりと。志のある所に向つて傍若無人に我意を發展して、前後左右を顧みざる底の雄心は、爛漫たる詞藻となつて、遠く其痕迹を二十世紀の今日にとゞむ。此故に當時の文學は圓太郎馬車の如くなるも、放縱不羈なるも、法規約束を無視するも、毫も窘束の體なく、窮迫の樣なく、退嬰主義なく、厭世主義なく、隱遁主義なく、傲然として進取的なり。Invincible Armada を覆へせるの氣魄は躍然として文學の上にも活動せるにちかし。次に忘るべからざるは所謂物質的膨脹の狀況なり。有史以來彼等の生息して無邊際に廣きものと思へる世界は眞の世界にあらずして、單に其半面なるは此時に方つて彼等が始めて自覺せるの事實なり。而して其未知の半面には見ざる人あつて住み、聞かざる獸あつて走り、草も木も、禽も魚も、悉く、陳套なる舊世界に飽き果てゝ發展の餘地なきに困したるものを驚かすに足るは一大發見にあらずして何ぞ。此發見の反射逆照して彼等の精神に一轉化を與へざるは夢にだに想像し得べからず。恰も一畝の庭宅に繞らすに高き墻壁を

以てして、歲月をつくして其中に起臥して晏如たりしものが、一朝睡眼を摩して、戸を排すれば、俄然として四壁昨夜に崩壞し去り、千里の景物爭つて雙眸に落つるが如し。其宏豁なる新圖の、われに與あるを覺ゆると共に、眼界の先に簇々として、視線の外に我を誘ふものゝ轉た豐富なるを想像せずんばあらず。卽ち此新世界は此新世界の裏に伏在する新々世界を喚び起して非常に富贍なる想像力を國民に附與するものなり。此富贍なる想像力は優に當時の文學に一異彩を放つて、後人をして其華曄なるに瞠若たらしむ。

又一例を引かむ。十八世紀に於て英人の成就せる農業的發達は單に農業的發達とのみ見做すべからずして、其影響は慥かに藝術の上に反響せるに似たり。此發達の行はれざるに當つてや、中世紀と異なる所なく、羊を飼ふに牧草を以てせるが故に冬に入れば遂に之を牧する能はず。多くは之を屠るを以て常とせり。加之草を以て飼養するが故に、草を得るの地は、草を得んが爲めに、毫も耕作の用に供する能はず。不經濟の甚しきものありき。十七世紀の頃蕪を以て羊を養ふの方を和蘭にて發見せるものあり。遂に之を英國に移して單に飼養の方を冬季に開けるのみならず、かねて、耕稼の地を擴げて、農者の產を殖する事擧げて數ふ可からず。斯の如く彼等の富を致せるは記憶すべき事實にして、而して此事實の影響は所謂 landscape gardening の藝術として發現せるも亦爭ふべからざるの事實なり。在來彼等の住宅の無風雅なるは Macaulay が其歷史中に

述べたるが如く甚しかりしもの、こゝに至つて忽ち舊態を改めて、高柯大樹を庭中に見、自然の斷片がおのづからなる園景を形ちづくるに至れり。英國が landscape gardening を以て名を得たるは實に此時にありとす。影響は單に造園術にとゞまらず、彼等は其資材の豐かなるに應じて自己の家室を飾らざる可からず。之を飾るに父祖もしくは自己の肖像畫を以てせるは藝術史を繙くものゝ知る所なり。かの Reynolds を得 Gainsborough を得たるは正に此際にして、彼等の技術が、肖像畫の發達に與かつて力ありしは、此奬勵を受けたるが爲めなり。

(ろ)次に政治と文學の關係に就いて一言せんとす。政治的活力として單に吾人の心を惹くのみならず、其文學的影響に於て空前絶後なるは、先に二三次も例にせる佛國革命なりとす。其標榜する所は在來の舊弊を打破し、人爲の階級を滅絶し、あらゆる形式を放抛して、本來の自由と平等とを享樂せんとするにあり。世界の歴史に於て有名なる此政治的活動が時の文學界に入りて拭ふ可からざる痕迹を紙上に印せるは先に既に論及せる所なり。當時の英國作家にして、此影響を蒙らざるは殆んど稀なりとす。革命の進行固より其弊に伴はざるを得ず、或は其極端なるに驚ろいて反抗の氣勢を示せるものなきにあらずと雖ども、其種々なる方面に於て、作家を動かせるは事實なり。Godwin の *An Inquiry concerning Political Justice* 及び Wollstonecraft の *A Vindication of the Rights of Woman* の如きは理論的方面に於て革命主義を鼓吹せるもの、もし夫れ純文學

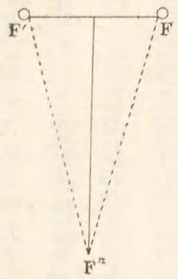
の領域に在つては當時知名の作家皆然らざるなし。Burns 然り、Southey 然り、Coleridge 然り。Southey の *Joan of Arc* は浪漫的にして、革命主義をかねたるものとして著るしき作物なりと云はざる可からず。沈着なる Wordsworth の如きすら Louis XVI の所刑を正當と認めて、佛國革命に對する辯護を草せるに至れり。其他 Moore あり、Landor あり、Byron あり。彼等の詩中に革命主義の蟠まるは讀者の夙に知る所なり。(本節は只例にとゞまるが故に、說いて精密なる能はず。讀者其詳細を知らんとせば、先に擧げたる Dowden の *The French Revolution and English Literature* を見るべし。)

(は)次に道德と文學との關係に就いて一言せんと欲す。然れども單に例を擧ぐるを目的とするが故に、說く所はたゞ數行に過ぎず。A. W. Ward 其著 *A History of English Dramatic Literature* (卷三、二六二頁及び二六三頁)に於て沙翁以後復古時代に至つて、劇にあらはれたる德義的精神の次第に衰頽せるを論じて曰く。「此墮落は固より程度に於て一樣ならずと雖ども、當時の劇文學に在つては疑もなき一種の特色にして、遂には道德的墮落となつてあらはるゝに至れり。ある評家は道德を以て藝術上の作品と全然交涉なきものとなす。去れども一國民の藝術的生活の進步を一般歴史の進步の傍に置いて思索せば、何人も反對の結論に達するを疑はず。比較的完全なる研究を遂げ得べき希臘彫刻の歴史に於て、希臘社會の一般歴史に含有せらるゝ幾多の經驗が反射

し來るが如く、吾が劇の歴史は Elizabethans の昔より復古の當時に至つて、わが國民生活の行路が指示する經驗の同繼續に於て道德的影響の隆替をあらはす。James 及び Charles 時代に於ける劇が、公私共に道義の理想に缺乏せる社會的生活を反射すと云ふは Massinger と Fletcher の間に存せる、若しくは Shirley と Ford との間に存せる道德的調子に於て大差あるを閑却するが如く、無益の言論なり。然れども公私兩樣の關係に作用し來る、重要なる束縛力のあるものに就て、當時社會の格段なる方面に於て認め得べき無感覺は、時代の特色なると同時に、當時の劇文學の特色なりとす。個人的に云へば Marlowe は Ford に比して、あらゆる點に於て放縱ならざる可からざるが如し。然れども前者は德義的勢力に對して毫も輕侮の念を挾むものにあらずして、後者の之を蔑視するは檢束なき情慾の敍述よりも吾人を悚然たらしむる事多し。沙翁自身すら、吾人の知る所を以てすれば、自由なる市民的德義の最高理想を實現せる事あらず。彼の描寫せる Brutus は、實に此概念を具體化せるもの、然も半ば修辭的にして、半ば悽愴なる霧中に包圍せらるゝに似たり。然れども沙翁にせよ、沙翁と時を同じうせるものにせよ、Fletcher と同程度に墮落するは到底忍ぶ可からざる所なるべし。Fletcher の生息せるは自由の空氣を呼吸する能はざる時代なり。慈悲あるも殘酷なるも臣下の身心を支配する專制君主としてより以外に人 prince を思惟しがたき時代なり。」

文學的意識の、他方面の活動に支配せられて、新暗示を得るは斯の如し。此點に關しては學者研究の餘地あるを疑はずと雖ども、不肖にして且つ時日なきを以て不完全ながら、筆をこゝに擱く。

(二)新舊精粗に關して暗示の種類。文學上の F が F^1、F^2、F^3……F^n と連續して變化するとき、F^{i+1} なる次回の F は性質に於て如何なる性質を帶ぶべきかの問題に接したるとき吾人はかく答ふるを得べし。(い) F^{n+1} は古代の F を復活す。(ろ)又は古代の F の結合せるもの。(は) F^i に加ふるに全然新しき或物を以てす。(に)全然新しきもの。(ほ) F^i と古代の F の連結せるもの。(へ)最後に全然新らしきものと、全然古きものとの連結。吾人は理論上より此六種の場合を認め得べし。然れども實際にあたつては、此六種に相當する場合を明瞭に文學史中より例證すること容易ならざるやも知るべからず。例へば現下の意識が咄嗟の際、急に古代の F に變じ、もしくは全然新しき F に變ずるは、反動の種類を解剖せる當時既に其例外なるを述べたるを以て茲に之を重說するの勞を再びせざる可し。もし此例外の、强烈なる外部の刺激よりして起るときは、一見暗示の急變に制せらるゝの觀ありと雖ども、急變後の推移を檢すれば、却つて漸移と其歸着する所を同じうするに似たり。圖を以て之を說明せんに、F と F′ とは其質に於て懸隔する事甚しく、自然の傾



向にては遂に移りがたきを、ある强烈なる刺激の結果として、FよりF′に急變せりと假定して、變後の推移を討尋するに、F′は徐々としてF″に向つて歩を移すを認むべし。同時に此强烈なる刺激なくFは自然の傾向に從つて漸移の原則の命ずる如くに變ずとせば、此Fも亦徐々としてFⁿに向つて歩を移すを認むべし。要するにFもF′も遂にはFⁿに至つて平衡を保ち得て始めて已むに過ぎず。

之を世間の例にかりて言へば一擲に乾坤を賭するが如し。突如として成功するの觀あるとき、人は皆認めて偉業なりとなす。然れども所謂偉業の、一朝に成就して、しかも其變の非常に急なる時は、成就の後を待つて、漸々と成就せざる前の意識に近づき來るが故に、幾年かの後には、先に人目を眩せるが如きの大變化として認め難きに至る。之に反して漸次を旨として改革を企つるときは赫々の功を樹つるの餘地なきに似たりと雖ども、推移の自然なる、亦幾年の後には所謂偉業と同一の效果を收むるを得べし。放身捨命を敢てして佛國革命に贊同せる英國文人は漸次にして舊態に近づき來れり。突飛に泰西を謳歌せる日本の文學者も、少しく沈靜の時日を得れば漸くにして日本流を再發し來るにあらずや。文藝以外の娯樂に徵するも、謠曲の流行となり、茶の湯の復活となり、弓術、柔道の再興となり、日本畫、木板、骨董の道樂となつて、歐化の注入と共に唾棄せるものを、再び芥溜裏より拾ひ來つて及ばざるを之れ恐るゝの狀態なり。而して此活

力は西洋主義と日本主義と精神的に平衡を得るに至つて始めて已むが故に、所謂歐化主義は當初に吾人をして愕然たらしめし程に猛烈なる變化にあらずして、始めより漸次に泰西の文物を輸入せると同樣の結果に到着するや明けし。――然れども是本題に關係なき所、只次を以て之に及ぶのみ。

再び本題に歸つて上述六種のうちより此例外を除却すれば、殘る所(い)(現在)+(古)(ろ)(現在)+(古+古)(は)(現在)+(新)(に)(現在)+(新+古)の四種となる。此四種は內容に於て各趣を異にすと雖ども、其推移の態に至つては固よりさきに擧げたる原則に支配せらるゝに過ぎずして、式中に插入せる(新)の符號も亦上來の敍述によりて略推測するに難からざれば、こゝには只(い)(ろ)の二種卽ち式中に(古)の符號を含めるものを擇んで簡單なる例證を試みんとす。(い)の場合を名けて復興と云ふ。英語に所謂Revivalを是なり。文學史上に於ける復興は其例頗る多しと雖ども、其尤も顯著なるはRenaissanceとす。此懷古、求上の意識が如何にして勃發し、如何にして天下を風靡し、如何にして後代の意識に影響を與へたるかは、專門の學者に浩瀚の著作ありて之を審かにせるを以て云はず。其小なるものにして學者の注意を惹けるは十八世紀末に於けるGothic Revivalなりとす。此復興は希臘、羅甸の古典に關係なき中世紀の意識を再現せるものにして、かのHoraceWalpoleがStrawberry Hillに建設せる邸舍の如きは此復興の先驅と見るも不可なきに似たり。

下つて Walter Scott に至つて或は小說に、或は詩歌に箇中の趣味を發揚して一世の好尙を鼓舞せるは普く人の知る所なり。其他 Macpherson の *Ossian* を公けにせるも Percy の *Reliques* を蒐めたるも皆此復興趣味に支配せられたるの結果に外ならず。輓近 Wm. Morris が自から古代の氣圍氣を作つて、好んで其內に住し、かねて讀者をして杳邈たる過去の世界に逍遙せしめたるが如きも亦其好例なるを失はず。(ろ)の場合を名けて連結の復興と云ふ。(用字の生硬なるは難あるべきも。) 式に於て示せる如く、古代の類を異にせる二個以上の意識が——二個以上の潮流と云ふも可なり——現在のそれと合して、彼是融釋せる場合を云ふ。例へば Milton の詩の如し。彼の詩題を見るに *L'Allegro* と云ひ、*Il Penseroso* と云ひ、*Comus* と云ひ、*Lycidas* と云ひ、古典に據らざるものなし。加之詩中引用して、粉飾の具に供せる神話上の故事は、繽紛錯落として無識なる吾人を壓倒す。彼の Cambridge に遊ぶや、好んで Ovid を愛讀せりと云へば、古典の彼に影響せるは多言を要せずして明かなり。翻つて彼の作爲せる他の詩篇を讀むに、*Paradise Lost* と云ひ、*Paradise Regained* と云ひ、*Samson Agonistes* と云ふ。題既に面目を新たにす。もし夫れ詩中に敍述する內容の如きに至つては、之を先に擧げたるものに比すれば、迥然として趣を異にせるを覺ゆ。吾人は是に於て Milton の、古學に精通せると共に、新舊兩典に耽湎せるの結果、兩者の精神合して、紙上に煥發せるを知る。彼は一神の子にして、かねて多神の子なり。希臘と

希伯來、Ovid と聖書、常識を以てすれば遂に調和しがたきもの、而して時勢の變は、彼をして忌憚なく兩者を同時に復活せしめて、左右逢源の自由あらしむ。然れども是大體の辯に過ぎず。精細の研究を重ねて、批判の眼を摩するとき、失樂園の一篇既に數多過去及び現在の意識を包含して錯綜羅織せるを見るべし。史家 Courthope 其著 *A History of English Poetry* (卷三、四一三頁以下) 中に之を列擧して(一)清敎徒の神學(二)騎士的物語(三)以太利復興の精神等となす。

(三)暗示の方向と其生命。此項も亦說いて精該なる能はず。只一言にして其要を辯ずるのみ。文界、ある時期に際して新暗示を得るとき、此暗示を發現する書籍は續々發刊せらるゝを常とす。而して此等の內容は、皆同暗示に促がさるゝが故に、大抵類似性を帶ぶるを以て特色とす。此類似の作物中孰れが尤も長命なるやの問題は、理論的に又實際的に、吾人の興味を惹く事なしとせず。此問題に接したる十中七八の人は、此うちにて尤も價値ある作物が、尤も長命なるべしと斷じて疑はざるが如し。斷案者の言は必ずしも眞ならずとせず。しかも逸すべからざる因數を打算せざるに似たり。作物に對する善惡の標準は、吾人の趣味に外ならずして、吾人の趣味は常に推移するにも關はらず、必ずしも發達を意味せざるが故に、尤も價値ありと認められたる作物は、趣味の未だ推移せざる今日に於て價値ありと云ふ意義に外ならずして、嚴格に云へば、未來に通用すべからざるの斷案なり。たとひ善惡の標準に、動かすべからざる根底ありて、今日の斷案が

後代に應用し得べき性質を有するものと假定するも、善きが殘り、惡しきが滅すと思ふは幼稚なる考慮に過ぎず。文藝は暫らく措て論ぜず、文藝以外の事物に就て觀察せば、頃刻にして要領を得るに近からん。かの道德世界に於ける、吾人成敗の歷史の如きは、著るしく此消息を反射するに似たり。適當の才あるものが適當の位に居つて、道心に富めるものが、衆俗の尊敬を受くべきは、しかあるべしとして、千古以來の定論なるに、千古以來の事實は決して是の如くに發展し來らざるなり。庸劣なるものにして俊才と目せられ、狡獪なるものにして君子と稱せられ、卑賤なるものにして紳士の位に居るは、われも人も、古も今も、近き將來も、遠き未來も、恐らくは變る事なき世態なるべし。有史以來善人と呼ばれたるものゝうち、多くの惡漢あらん。惡漢と稱せられたるものゝうち、亦多くの善人あらん。其德を謳歌し、其善を表彰して然るべき大人にして、泯滅今に傳はらざるもの果して幾人ぞやと想到するとき、文藝上の著作も亦同一の運命に際會して、空しく覆瓿の災に、迹を坊間に絕てるもの多きを思はずんばあらず。Homer と同程度の作物を著せる人は、必ず Homer と同程度に後代に傳はらざる可からずと思ふは、しかあるべしの理想世界に運行する法則を、斷はりもなく、しかあるの現實世界に應用せる單純なる見解に過ぎず。Homer 以上の名作にして湮滅せるものなしとは果して何人が保證するぞ。人間はしかく具眼の動物にあらず、又しかく公平の動物にあらず、しかあるべしの世界を夢みて、長へに、しか

あるの世界に彷徨する愚かなる動物なり。

理想世界の法則は余の關する所にあらず。（作物の價値のみが作物の生命を支配せざる以上は。）今、價値以外に作物の生命を支配する條項二三を擧げて讀者の參考とす。

（い）同一の暗示を發現せる作物が前後して公けにせらるゝ場合には、暗示を第一に發現せるもの（恐らくは暗示を第一に得たるもの）換言すれば其著作を第一に公けにしたるもの、尤も長命なり。第一の著作に接したるときの刺激は、尤も明瞭にして且つ痛切なるが故に、此著作は尤もよく一般に意識せらるゝの傾向多く、又其意識の惰性を次期に傳ふるに便なればなり。例へば Smollett の Picaresqte romance に於るが如し。史を案ずるに、彼の此種の小說に指を染めてより、一七六〇年の頃に至つて、同種の著作にして他の筆に成るもの既に十三四種の多きに達せり。しかも其今日に傳はるものを求むるに、杳として知る可からず。恰も Smollett 以外に冒險的奇譚を草せるものなきに似たり。史上に名を存するもの既に十三四種なれば、史家の逸せるもの亦蓋少なからざらん。而して此短命なるものゝうち或は Smollett を凌ぐものなしと云ふ可からずして、しかも彼の獨り盛名を擅まにするは、作物の壽命が單に其價値によりて支配せらるゝのみならず、價値以外に「時の前後」なる閑却しがたき因數によつて左右せらるればなり。日露戰爭の當時港口閉塞の壯圖を敢てせるものは前後幾人なるを知らず。しかも軍神に變化せるものは獨り廣

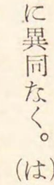
瀨中佐あるのみ。何が故に獨り此人を軍神にするかと問へば、彼の最後が尤も壯烈なりしと答ふるの外、彼は第一に先鞭を着けたりとの大源因を擧げて答へざるを得ず。先鞭は獨り閉塞隊に於て成功の機をなすのみならず、文藝界に在つても亦成功の機たらざる可からず。經濟界に在つても需用に應じて第一に供給の途を開きたるもの、尤もよく世間と後世の注意を惹く。繼で起るものは、たとひ質に於て之に優ると雖ども、名に於て、命に於て之と雁行する能はざるは吾人の日常に見聞する所なり。明治の元勳が左したる學才もなきに、日本の政治を代表して憚からざるも全く之が爲めなり。此際に於ける暗示の命脈は一二の代表者を擇んで之にわが生涯を託するやの觀あり。而して之が代表者たるの資格は、代表者としての價値よりも、着鞭の先後に因つて決せらる事多きに似たり。

(ろ)同一の暗示を發現せる作物が前後して公けにせらるゝに關はらず、代表者を擇んで自己を後世に傳へんとせざる場合ありとせば、此團體の各が後世に殘ると想像するか、又は其各が灰滅すると想像するより外に解決の途なかるべし。然れども各の後世に殘るべき機會は事實に徴して頗る希ならん。吾人の家に就て檢するも數十代を溯つて、先祖の位牌を悉く保存するものあらざるべし。十人二十人を合して一牌となすか(代表の場合)又は極めて古きものゝ自から失はるゝに任せて顧みざる事多からん。よし位牌ならざるも先祖代々の俗名を記憶して忘れざる程の君子は到

底見出し難からん。從つて團體の各が後世に殘るよりも、各が後世に忘れらるゝの機は甚だ多かるべし。十八世紀の中葉より以後何々冒險談(Adventure of—)と題せる冊子時好を追ふて續々市場に上れり。曰く *Adventure of a Lapdog*(一七五一年)曰く *Adventure of a Guinea-hen*(一七六〇年)曰く *Adventure of a Black Coat*(一七六〇年)曰く *Adventure of a Bank-note* 曰く *Adventure of a Cat*(一七八一年)曰く *Adventure of a Rupee*(一七八二年)曰く *Adventure of a Flea*(一七八五年)累々として數ふべからざるに似たり。然れども悉く短命にして、今一人の之を讀むものなし。何が故に代表者を存して後世に傳へざりしかと問へば、代表者の必要と認めらるる程度に於て、當時に意識せられざるが爲めのみと答ふるの外なかるべし。(作自身の價値は固より論ぜず。)かゝる場合には、此部類に屬する各作は皆同等の程度に意識せらるゝが故に、とくに其中の或物を擇んで他を代表せしむるに足るものなく、强ひて之を求むれば比々皆是なるを以て、遂に設くべきを設けずして已むの勢となる。去りとて同類の各作を悉く記憶するは彼等のよく堪ふる所にあらざるを以て、終には其孰れをも忘却するに至るに過ぎず。たとへば美人の壻を擇ぶが如し。其數より云へば二三十にして足らず、しかも皆同程度の資格なるを以て、之を迎へんとせば悉く迎へざるべからず、去れども入用なるは只一人に過ぎざるが爲めに皆落選して美人の眼中に存するもの一人もなきに至る。

(は)同一の暗示を發現せる作物が前後して公けにせらるゝ場合に、前なるも滅し、後なるも滅して、只中間に出でたるものが強く人の心を動かし、永く世間に記憶せらるゝ事あり。此心理を解剖すれば下の如し。――當初は暗示のあまりに珍奇なる爲め、他を辟易せしめ、或は其陳腐なる爲め、毫も好奇の念に投ぜざりしものが、ある一種の事情により、漸く勢を得て、遂に一定の時期に達して一般意識の頂點に上れる頃、機に投じて公けにせられたる作物は、比較的に世間より歡迎を受くべきの理なりとす。而して一度び歡迎を受けたる暗示は漸く意識線上を沿ふて降下し來らざるべからざるが故に、此機を逸して後、公けにせられたるものは依然として世人の嗜好に投ずる能はず、遂に爛熟陳敗の弊を受けて全く一般の指顧を買ふことなきに至る。要するに集合意識が此頂點に達するに至る迄は、準備の期に屬するを以て、其期中に產出せられたる作品は、往々にして、他の犧牲となるに過ぎず、只後者の爲めに道を拓くを以て能事とす。之に反して頂點期以後に發刊せられたる著述は、既に降下の時運に際せるを以て、他の爲めに株を守り舟を刻み、盡きなんとする油に燈を挑げて、長き夜を一時だに照らし明かさんとするが如し。小兒に書を敎ふるとき、始めは之を厭ふ。漸くにして其趣味を悟る。又漸くにして趣味其極に達す。此極度に趣味を涵養せるときに讀破せるの書は、修養期に習得し得たるの書よりも、深く、長く、彼の腦裏に印せらるべし。換言すれば小兒の腦裏に書物の壽命を永くせんが爲めに、修養期に敎へら

れたる書物は功能ありと云ふも可ならん。作物の興廢亦之に似たるものあり。先に例せる Gothic Revival の如きは十八世紀に始まつて徐々に運行し、遂に十九世紀に入つて、一般意識の準備略成りたるに際して Scott の小說は炳焉として頂點上に耀けるものとす。

以上三個の場合を圖に示せば(いは の如く始めは優勢にして漸次に衰退し。(ろは  にして前後共に勢力に異同なく。(は にして一點より漸次に膨脹して中間に至つて其極度に達し、又其勢力を狹めて一點に至つて已む。

本章に述ぶる所は凡て布衍して、詳論するの價あるものなり。不幸にして材料時日の缺乏より吾意の如くするを得ず。因つて補遺として其大要を約言す。

(文學論として論ずべき事項は以上五編にて悉くせるにあらず。漸くに論じ得たる以上五編も亦其布置、繁簡、段落、推論、の諸點に於て余が意に滿たざるもの頗る多し。且忙中に閑を偸んで隨書隨刷纔かに業を卒るを得たるを以て、思索推敲の暇なきよりして、罪を大方に得る事多からん。讀者之を諒せよ。)

解

說